
ハリーポッターに怒りの転生

めだかクロニクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリーポッターに怒りの転生

【Nコード】

N4196Q

【作者名】

めだかクロニクル

【あらすじ】

ハリーポッターの世界に転生します。

不思議と、作者と会話すると言う不思議な雰囲気ですが宜しく願います。

あらすじとキャラクター紹介（前書き）

初回の方の話についていけないという方がいたのであらすじを載せておきました。主人公のテンションについていけない方は番外編から読んでください。

あらすじとキャラクター紹介

あらすじ

ハリーポッターの世界にHOLIECの力をもらい、転生させられた少年は、なぜだか7巻の時代に送られた。トリップじゃねえかと怒りながら、なんだかんだで主人公組みに遭遇。そして、ロンが死亡しているという原作無視の流れに、自分の力を使いロンの魂を入れなおすという荒業に出る。信用を得たのもつかの間は何を思ったか、ヴォルデモートの軍勢に居候する。戦い方を学びヴォルデモートが杖探しのたびに行くというので、またしても、何を思ったかホグワーツに強行編入する事に、そこでであつた、原作ではいたのかいないのかも分からない新一年生と意気投合、そして新たに判明した、みぞの鏡の中の部屋に創設者達が残した古の守りを求め、ダンジョン攻略中。初回の方の話についていけないという方がいたのであらすじを載せておきました。主人公のテンションについていけない方は番外編から読んでください。

キャラクター一覧

主人公

名前不肖

通称

君、貴様、あなた、名無し（アレックス命名）。

年齢

15歳。外見10歳

キーワード

なぜか、好かれる体質。

アレックス・クープ

年齢11歳

解説

危ないからホグワーツに来たくなかった子。両親から、ありとあらゆる防衛術と攻撃呪文を学ぶ。多数の魔法薬とおまもり所持。残念な人にはさんずけで家名で呼ぶ。ハリーVSヴォルデモートには不干涉をつらぬく。

キーワード

シヨタコンホイホイ、巻き込まれキャラ、一言多い、食物崇拜。

以下、アレックスの電波による主観と偏見のキャラ解説。

ハリーポッター

すぐ、怒る短気さん。ハリー教の神。一瞬、ホレそうになった。

ロナルドウィーズリー

しょっぱなで死んだ残念な子。

なぜか、人と裸で風呂に入るのを嫌がる。小さいに違いない。

ハーマイオーニグレンジャー

巻き毛。

ルーナラブグット

時々、口調が変わり、武者になる、おっとり天然女子で毒舌。筋力がハンパない。北斗真拳を使える。

ジネブラウィーズリー

ハリー教の幹部。けっこう可愛いお姉さん。男好きのハリーさんを愛している不憫な女性。

ネビルロングボトム

ハリー教の幹部。

自傷行為が激しいドMで痛い子。勘違いやろう。

ハリーさん大好き。フィネガンさんと悪巧みを計画中。

ハリーさんといけない関係。

シエーマスフィネガン

爆破大好きやろう。危ない人。短気。ハリーさんと同室をの人、ハリーさんといけない関係。ハリーさんに恋焦がれている。

その他、D A

ハリーさん大好き、あわよくば恋仲になろうとしている。

セブルススネイプ

シヨタコン。

ハリーさんのピンチに現れて、ハリーさんの心をわしづかみにしようとしてる中二な人。

アルバスダンブルドア

土の中に住む住人。呼吸も食事もしなくていいという超人。

ミネルバマクゴナガル

結構やさしい、ババア。ほれるかと思った。

ポモナスプラウト

身体に植物を寄生させている、霊力で操る魔界の住人。
実は、ナイスバディ

リーマスループン

犬耳を生やす人。腐女子界の神。

ヴォルデモート

蛇の人。暇すぎて世界をのつとた人。目が怖い。
名無しさんのストーリーカー！。

ベラトリックスレストレンジ

戦いになると豹変するらしい。hhが基本用語らしい。

ドビー

愛すべき隣人。彼の手から作られるものは特級中師やミスター味っ子もしのぐ。

クリーチャー

つんでれ、彼の包丁さばきは光速を超える。

箱の中の勇者。

影の主人公。世界の裏で暗躍し世の平和を守ってる。
ヴォルデモートも一瞬でぬっ殺せる最強の人。武器は聖剣エクスカ

リバー、この世の全ての情報があるという2のつく箱の中の勇者達が集う場所。

彼いわくなんでもいけるらしい。

僕に礼儀と世渡り術を教えてくれた人。

世界に転生の前（前書き）

ハリーポッターの世界で頑張る、童顔少年の物語。

世界に転生の前

「君、死んだから」

「ご飯がすすむ君で食べようかな。さらさら鮭茶づけでたべようかな」

「聞いてる？」

「聞いてない。やっぱり、鰹節ふりかけの、めんつゆかけの、チャーシュー焼きのでいただきます。君も食べる？用意したけど」

「あつ、おいしそう。食べます」

「うまつつ何だこれ、神の私も食べた事ない、神の味」

「でしょ？この味が忘れられないから死ねないんだよ」

「・・・ごめん」

「何？」

「・・・ごめん・・・死んだ」

「僕さ、ちよつと前まで引きこもりだったんだよ。前にさ、イジメ問題解決しようとしたら、先生が生徒集めて、俺を悪者にしようと計画したみたいでさ、大人信用できなくなったんだよ。だけど、ハリーポッター読んでたら生きるってすばらしいって思ってたさ、友情を感じたくなつていま 今ハッピーな学生生活送ってるんだ」

「・・・まじでごめん・・・君死んだんだ・・・」

「・・・生きてて良かった！日本食、食べなくなるとか死んだわ！って感じだわ。イギリス行って、あんな冷凍食品万歳の食事食うかと思ったら死んだほうがましだわ」

「・・・ごめん」

「お前・・・ぶつ殺していい？？どうせ、お前は神で、間違つて殺したとか言っただろ？？それで最後にドッキリって言っただろ？？ベタだね」

「・・・ドッキリじゃない」

「・・・雰囲気的に、黒すぎる空間に、僕と君が白くなってるから

不自然だし、思ったものが出てくるから不自然に思ってたけど・・・
僕・・・死んだの？」

「ごめん・・・雷ドッカンするの間違えた・・・」

「感電死したの？」

「・・・焼け死んだ」

「？」

「雷ドッカンで死ななきゃいけない運命の人がいて、ドッカンしようとしたら、直前に、お前は、そこにいてはいけないとか言っ、君が飛び込んできて・・・」

「死んだの？」

「うん・・・君は、先先代の神の生まれ変わりだから、何が起きるか分かったんだろうね・・・」

「僕の前世が神？神も輪廻転生に含まれるの！？」

「君は、神の仕事飽きたとか言っ、アデューって言いながら転生した。そんな神見た事ねえよ、後処理丸投げしやがっ、前の神は過労で壊れて、誰もやりたくないからっ、俺に無理やりやらせやがっ」

「怒ってる？」

「当たり前」

「何かごめんね。大変だったんだね。よく頑張ったね」

「そんな言葉かけないでー！泣いちゃうー！！そんな綺麗な目で見つめないでー」

「良いんだよ泣いて。ここには、僕しかいないから。誰も見てないひとしきり泣いた後、話が戻った。

「それで、僕は元神様なんだね」

「うん、じゃなきゃ、この空間で、好き勝手に物を造れない」

「ふゝん、じゃあ、君は神殺しなのね」

「！！・・・マジでごめん。許して。何でもするから」

「蘇らせて」

「あの黒焦げに???痛いだけで、すぐ死ぬと思うけど・・・」

「他の身体になったらどうするの？」

「その人を別の世界に転移させて、君をその身体に入れるけど」

「え??? 別世界???」

「元神様でも忘れてるよね。この世界の創作物は他の世界の思念から出来てる物だから。っていうか、その法則創ったの君だけだね」

「まじ??? じゃあ、僕が大好きな、ナルトや、×××HOLICとかハリーポッターは現実にとっかで存在してるの？」

「当たり前じゃん。じゃなきゃ、あんな凡人に想像できないでしょ」

「作者馬鹿にしたら、殺すぞ」

「ごめんなさい。ってかキャラ違う」

「そう?」

「黒いよこの人。絶対さっきの、自分が優位に立つ為の演技だ」

「うん?」

「何でもないです」

「じゃあ、僕を転生させる。それで許す」

「??? まじ? ぶったまげ? 許してもらえるの!! 何でもしちゃうよ」

「とりあえず、ハリーポッターの世界に転生させる」

「許してもらえるなら何でも良いよ。転生するだけ??」

「どういう意味??」

「他の間違えて殺した人は、能力とか要求してくけど」

「お前何人殺してるの・・・」

「299人!! 君で300人目達成!!」

「神に復活したら殺すから」

「何でもしますから許してください。特典いくつでもつけますから」

「しょうがないか。今は君が神だもんね」

「僕が新世界の神だ」

「だまれ!!」

「はい・・・」

「能力特典は、とりあえず、魔力キャパシティ無限、ハリーポッター世界の魔法を全て使える、×××HOLICの魔法全部できる、

肉体年齢、性別を自由自在に変えられる、新術、魔法の開発が可能な知識、後は自分の境遇を自由に相手に変えられる能力」

「わかりました。最後のはどういう意味ですか？」

「ハリーの兄弟って言ったら、ハリーの兄弟設定、シリウスの従兄弟って言ったらシリウスの従兄弟設定って事だ」

「はい、そうします。後はないですか？」

「ううん転生した後の特典追加が欲しいな」

「うっ・・・そんな発想してきた人はいませんでした。あほなチート能力のみしか要求してこない人ばかりだったのに」

「ちなみに、どんな能力要求してくる人が多いの？」

「多いのは、ギアスの能力全部とか、肉体最強とか、七美の能力とかドラクエの魔法とか、ナルトの術とか、後は魔眼とかですかね」

「・・・知らない」

「え？」

「今言われた能力、ほとんど知らない」

「珍しいですね、オタクじゃない人が死ぬなんて。×××HORI
Cとか知ってるから詳しい人かと思ったんですが」

「違う！！僕は、オタクだ！！ただ、ちょっと、好きなアニメが偏ってるだけなんだ！！知ってるよVガンダムとか、カテコウとかいう単語知ってるんだからね」

「そこでキレルんですか、全般的に網羅してないと」

「だって、家の中にいるより、外で蛙さんと喋る方が楽しいんだもん。ドラクエとか難しすぎてできないし」

「痛いですね」

「泣くから。元神様なかつたって先生にチクツてやる」

「え？？泣かないで下さい。そんな目しないで、許してください。何でもいう事聞きますから」

「じゃあさっきの、お願い聞いて」

「また演技か。ううん特典追加。そんな発想した人いないからな」

「元、神だからね、もしもの事を考えて準備しとくさ。だめか??」

「そんな、可愛い顔で怖い顔しないで欲しいよ」

「可愛い??死ぬか?」

「ひっ!!追加特典の様な物でしたら、あの方に頼めば動ですか?」

「どのかた?」

「今書いてる方」

世界に転生の前（後書き）

ご指摘の点を修正しておきました。

作者協力するの？

ひっ！！追加特典の様な物でしたら、あの方に頼めば動ですか？」

「どのかた？」

「今書いてる方」

「止まらないで下さいよ」

「だから止まらないで下さい。書き込んで会話してください」

「俺？」

「そう、作者さんです」

「どういうこと？」

「さっきも言いましたが、創作物は別世界の情報が流入してるだけなんですよ」

「え？じゃあ今書いてる事も、現実には？」

「なってますよ」

「マジか。俺がここで止めたら？」

「リンクしてるので、進まないですね」

「俺はどうすればいいの？」

「話を完結させてください」

「完」

「今地震あったんだけど」

「私が起こしました、次ふざけたら、雷ドッカンしますよ」

「わかりました。それで、転生者君に何をすれば？」

「普通にかいて下さい。助けがほしいときは喋らせますから」

「わかりました。」

むかつく突然の展開

「話は付きました。困った事があれば、作者さんに頼んでください。」

「あーうん。わかった。」

「姿はそのままが良いですか？指定していく人いますけど」

「どんな？」

「男の子の場合は、何か美男子にしていきますね。女の子の場合は、髪の色変えたり、何か長い人が多いですね」

「美男子は嫌いだな。自分の顔気に入ってるしな」

「そうですね、美男子って感じじゃなく、やんちゃなシヨタっ子って感じですよんね」

「何て言った？」

「何でもないです。怖いからとっととハリーポッター世界に行ってください。作者早くしてください。お願いします」

「はいはい」

洗濯機の中に入れられたような変な感じがして、吹き飛ばされた。黒から白の世界に良き、あれは？鋼の錬？？通り過ぎて、カラーの世界に降り立った。

「ここが、ハリーポッターの世界ね。けっこう普通だな。僕の不可思議さと比べたら、時限の魔女以外は何でも普通か」

歩きながら、ここは、魔法使いの、町だとは分かったが、ホグズミードではないようだ。原作に出てないから、どこか分からない。

「一般人もいるから、普通の町か？」

しばらく歩くと、石の壁に、ゴドリックの谷と書いてある。

「え？こんな所なの？もつと田舎かと思った」

「お前、唯の壁に何話しかけてんの？」

「この壁の字」

「は？」

見えてないのか、魔法の字か？

風が吹いて新聞が飛んできた。情報が知りたいと、拾った。

「何してんの？」

これも、魔法で見えないのか。

「変な奴」

そう言つて、子どもは消えた。

新聞を読み始めると、驚愕の表紙が目飛び込んだ。

ダンブルドア殺される 追悼式は

「死んでんじゃねえか！！ 最終巻の時代に飛ばすとか何考えてんの！！ 普通、石だろ石のあたりに飛ばすだろ！ これじゃ、隠れるハリーに会えねえし、可愛くてハグしたくなねえ大人ハリーにしか会えねえだろ」

沸点が湧き上がった。

「あの！！！！ボケ！！！！！！」

怒りに震えた管状が伝わったのか

「ひっ」

と言う声が聞こえた気がした。

「とりあえず、今いつだ？ 状況が把握できない。 ってか転生じゃなくてトリップしてるし」

てくてく

「やめろ、てくてくって足音になってる。 恥ずかしいから、文才は求めないから、少し小説っぽくして」

「努力します」

情報を収集しようと道を歩き始めた。

しばらく歩くと、閑静な住宅街に似つかわしくない光景が目に入った。

「これが、ハリーの家か」

そこには、瓦礫の山と化した木々があった。

そこが、家だと分かったのは、立て札にポッター家であると記されていたからである。

「どうするかな。季節は昼間に子どもがいたし、夏休みくらいの時期かな。つてことは、まだ、追悼式はやってないだろ。ハリーの家に行けば、まだ、脱出の最中かな。姿現し試すか。イメージが大事なんだよな」

目を閉じ、意識を集中させた。

プリモールド、ハリーの家。イメージを描き、飛んだ。

「ふゝん。イメージどりの場所だな」

家をのドアをノックしたが、返事がない。

「いないのか。うゝん。あれを使うか」

左手を前に出し、魔法人を創る。

「我、探す彼の者。我を導き、彼の元へ姿を現せ」

魔方陣が光り、白く光る燕が現れ現れた。

その燕に触れると、一瞬暗くなり、そして明るくなった。

ふわっとする嫌な感覚、そして、身体を加工させようとする力、足元がない。

あまりの事に、見苦しくも叫ぼうとする声も出ない。

口をグツと噛み。恐怖が頭を支配した。しばらく落ちると、アドレナリンで頭がはつきりする。時間が、とても短く感じた。

救う代償

浮く、その方法だ。目を閉じ、イメージを作り、目を開いた。

「浮いてる。大丈夫、力は使える」

周りを見渡すと、大分落ちたのだろう、上のほうで光線が飛び交っている。

「ハリーが襲われている時か、急がなくちゃ」

風を切る音が激しさを増す、はやくもつと早く、そう思う事で、スピードが上がった。

「まだ、遅い。我、求む、我より早き、機械、現れよ」

シュっという音がして足元に感覚が合った。

「メーヴェ？マジか憧れのメーヴェじゃん。こいつ僕より早いのか。さすが、未来世界」

アクセルを一気に踏み込み、加速した。

人間が一瞬で過ぎ去っていく。

「危ない！！」

見覚えのある顔が、見知らぬ顔から呪を受けようとしていた。杖などない。指を杖代わりに、守りの魔法を使った。

「プロテゴネスト」

緑色の光線が、跳ね返り、打った相手に直撃した。

「殺した？僕が？」

次に飛び込んだできた光景は、ロンが呪を受けようとしている光景。

「くそっ」

そう言いながら、呪をかけようとしている奴を殴りつける。

「早くハリーの元に行かなくちゃ。あれはスネイプ」

見るとスネイプが、目の前にいる死食い人を退け、呪文を放とうとしていた。

「あれは、双子のどっちか。怪我させるか！！！！」

後一步のところで呪文が放たれた。続けざま、スネイプの横を通り

過ぎ、双子の片割れをキャッチした。

「後は任せる」

そう言つて、ルーピンに押し付けた。

ルーピンは、困惑した顔だったので続いて付け足す。

「ダンブルドアよ。永遠なり」

そう言つて、横を通り過ぎた。

「ハリーどこだ。あの光は」

廻りの光線とは明らかに違う、光があった。

「あそこか」

近づく、ヴォルデモートの杖が破壊されている所だった。

「ヘドヴィグは死んだか！！クソッ、主を守りし、誇り高き勇敢な鳥よ。私の元へ。彷徨える魂、今だ、誇りを忘れぬ暖かき身体へ還りたまえ」

ヘドヴィグが生きた姿で現れた。

「ッグ、何だ」

身体から突然何かが抜ける脱力感と頭に違和感があった。

そんな事よりもヴォルデモートは杖を砕かれても、尚、ハリーを追おうとした。

「ヴォルデモート！！くらえ！！！」

牽制に五指から放たれる、呪文をいとも容易く避けると、僕を睨んで来た。

「何者だ。その様な呪文の出し方をするとは」

「お前に関係ない。我、守りたきもの有り、邪念を擁きし者を退けよ」

「何だ、これは！！！」

そう言いながら、見えない壁に押されるように、退けられた。

「怖いな、さすが闇の帝王だ。ハリーを追うか」

ハリーの乗ったバイクを見つけ、後を追った。途中、後ろから追ってくる死食い人を退けた。

突然ハリーが消えた。隠れ穴に着いたのだろーと思ひ、魔法で張つてある結界を、壊さないように、クロウの魔術で通り抜けた。

「誰！……」

そついつて、杖を向けてくる、2人の魔法使いはモリーとハグリッドだった。

「ママ！……子どもだよ」

僕は、もう、15歳なんだけどな。童顔の日本人だからしょうがないか。

「手を上げます。何ならはだかになりましょうか？僕は、ハリーを守りに来ました。ダンブルドアよ永遠なり。ヴォルデモートは、糞食らえ」

「なっ！？」

驚かれるのも、無理はないと思つた。知らない奴が、守りの魔法を抜けて突然現れて、それも、子ども、驚くだらうと思つた。

その時、突然、人が飛び込んできた。血だらけの人を支えて、歩いてきた。

「ジョージがやられた」

僕は、走り出した。

途中、全員から杖を向けられた。

「治療が先だ！……信用できないなら、杖を向けている！」

若い世代は杖を降ろしたが、やはり修羅場を経験している大人世代は杖を降ろさなかつた。

「出欠が思つていたより酷い、急がなければ。歌うように言つたか？」

オペラのように歌つた。

「血が止まらない。クソ！……！我の前に横たわりし傷つき身体、元の姿を取り戻せ」

直つた。そう思つた瞬間、強烈な脱力感が遅い立つていらなくなつた。

地面の泥の上に、這い蹲り、身体に力が入らない。

「僕!!!!」

「誰が僕だよ、そう思った。復活したら、痛い目に合わせてやるからな」

そう、呟いて、意識がなくなった。

予定外 ロン？

誰かが叫ぶ声で意識を取り戻した。

顔をクシャクシャにして、誰もが叫んでいた。

リーマス顔を青ざめている傍らに、トンクスが寄り添っている。

次に目に飛び込んできたのは、ロンが横たわる姿だった。

ロンの名前を叫ぶ声が、空しく響く。

「死なないでロン！！目を開けて、ロン！！ロン！！！」

しばらく茫然としていたが、死という言葉に切っ掛けに身体が動いた。

「いつだ！！いつ死んだ？」

「なっ！？」

受け入れられないのだろうか、怒りの表情を向けてくる。

時間が惜しかったので、端にいるトンクスに向かった。

「たしかロンと一緒にいたのはトンクスだったよね。ロンが死んでからどのくらい時間が経ってる？」

必死の形相にたじろいだ、トンクスが返答を返す。

「20分くらい」

「良かった！！まだ間に合う」

ロンの身体の側に泣き崩れている人達に言った。

「どいてください。今からロンの魂を呼び戻します」

「子どもが出る幕じゃない！！！」

アーサーに怒鳴られ、驚いたが、時間がなかったので、術を行使した。

「友を守りし、志高き魂、今元の身体へ」

術の発動と同時に円陣が現れた。

その円陣を、見て驚きの顔をする人々。

次になった表情は、驚愕と喜びの表情だった。

「ロン！！！！」

ロンが起き上がったのだ。

ロンに駆け寄っていく人々の傍らで、身体がぐらりと揺れた。

突然、口の中にこみ上げる物があり、鉄の味が広がる。そのまま、吐血した。

いち早くきずいた、リーマスとトンクスが駆け寄ってきて倒れそうな身体をささえた。

「すみませんが、回復呪文かけてもらえますか？あとできれば、爪を切って僕の口の中に入れてくれませんか？体の回復を早めたいので」

「トンクス呪文を頼む」

そう言ってリーマスは手の爪に、清めの呪文を放ち、引っこ抜いた。予想外の行動に驚いたが、説明するのもめんどくさいので、血まみれの爪を口の中に入れる。

爪を引っこ抜くなら、清めの呪文は後からで良いんじゃないのかと疑問がわいた。

魔法陣を出し、爪の細胞をバラバラにし、体の各部に送っていき、傷を埋めていく。

しばらく繰り返すうちに、体の傷は癒えた。

「回復呪文って、痒いんですね」

「もう大丈夫なの？」

「何とか」

短い間で傷を癒した事に驚愕に表情を見せ言った。

「私の呪文必要だった？」

「同時進行じゃなきゃ、こんなに早く直りませんよ」

「他に何かすることある？」

「お腹が減りました」

「ふふ。これ食べて、もうちょっと待ってくれる。ロンが生き返ってみんな喜んで、私たちの事に気付いてないみたいだから」

そう言って、手に収まらないほどの大きなクッキーを渡してきた。クッキーを見ると、満面の笑みをして食べ始めた。

「おいしい」

そういつて、リーマスを見ると、手から血が出ていた。

「ごめんなさい。忘れてました。すぐに直します。手を出してください」

出された手の指を口の中にいれ、先ほどリーマスから貰った爪の細胞を増殖させ、爪を復元させた。

「はい。終わったよ」

「もう？」

そういつて、リーマスは手を見たが、爪は綺麗に揃っていた。

「しまった」

「どうした？」

「リーマスさん、ごめんなさい。クッキー食べてる時にやっちゃったから砂糖の成分入っちゃたかも」

そういつと、リーマスは、自分の指を舐め、笑った。

「すぐに直します」

「それはだめだ。便利な指だから放っておいてくれ。紅茶を飲む時に指で混ぜるだけなんて何て便利なんだ」

リーマスが子どものようにはしゃぐ活き活きした顔をしながら言った。

「気に入ってるなら何もしないよ。リーマスさんってこういう性格なの？」

トンクスに聞いた。

「キュートでしょ？」

「仲良く慣れそう」

「そろそろ、私もお腹がすいたわね」

「リーマスもお腹減ったでしょ？」

指を舐めだしそうなほどウツトリと眺めるリーマスに聞いた。

「え？あつうん。そうだな」

「ロン生還おめでとう。みんな、ロンが生き返ってよかったわね。ところで私たち、朝から何も食べてなくて餓死しそうなんだけど」

はつとした顔をみんながして、お腹に手を当てた。

「どうやら、みんなもお腹が空いていたらしい。」

「安心したら、お腹空いちやっただね」

「誰のせいだと思ってるの？さっきまで一生何も食べたくないって思うほどだったのよ。ねえハリー？」

「ハーマイオーニーが言った。」

「お腹空いてるかどうかなんて忘れてたね。でも確かにロンの言うとおり、お腹減った」

「そうねご飯にしようね。今日はお祝いよ」

「モリーはそう言って、杖を振るった。」

もちろん偽名

「うわー。おいしそう」

「ほら、みんな席について」

全員が席に着き、食べ始めた。

「これは、何て食べ物？」

隣に座っている、トンクスに聞く。

「キツシュよ」

「これは何の肉？」

「ほろほろ鳥よ」

「おいしいね。こんなおいしい料理食べた事ない。あっロン、その、パンとって」

「うん」

パンを取って渡すロンが怪訝な顔をした。

「君は誰？」

その、言葉に全員の動きが止まった。
バタバタしていて忘れていたのだ。
視線が注目する。

「誰って言われても、名前は遠藤小林。もちろん偽名」

視線が痛みにつめき声が漏れそうだった。

「本名は簡単に教えられない。そういう、術を使うから」

「では、君は何故ここにいる？」

「リーマスさん怖いです。ダンブルドアの命でハリーを守りに来ました」

完璧なる嘘を真顔でつく、しかし、こうでも言わなければ、信じてもらえない。

「君の様な、子どもが？」

「子ども子どもって多少幼く見えるか見知れませんが、いくつだと思ってるんですか？」

「5歳くらい？」

真顔で言われて、ショックを受ける。

「それはさすがに酷いんじゃない？」

「だってねー？」

みんなが頷いている。

とてつもない違和感、よく考えると、身長差がおかしい。

「鏡下さい」

トunksが鏡を貸してくれた。

「なんじゃこりゃー！。誰これ？僕なの？何でこんなに小さくなったの？アポトキシン？転生ってこういうこと？違うよね」

「どうしたのちよつと落ち着いて、お水飲んで」

貰った水を一気に飲み干し、落ち着ける。

「薬で姿を変えてるの？君は本当はいくつなの」

「実年齢は15歳。薬で姿を変えてるわけじゃない」

「やっぱ子どもなのね」

「でも良く考えたら、年齢を元に戻せばよかったんだよね」

「え？老け薬を使うの？」

「ううん、ゆびぱっちゃん」

カスツという、指ぱっちゃん失敗の音と共に年齢を実年齢まであげた。

「どう？戻った？」

「戻ってないわ、せいぜい10歳くらいよ」

びっくりして鏡を見ると、ちゃんと元に戻っていた。

「戻ってます」

「え？」

「これで一様15歳です」

「そうなの？」

「あなた、アジアよね？」

「ジャパンです」

「ジャパン？」

「私知ってるは、東洋の島国で、箸とかいうもので全てを切り裂き、全てを突き刺し、腐った豆を食べるのが日本人よね」

驚愕と言うより、マイナスの驚愕という顔をしていた。

「うん。その通りだけどね」

箸を取り出し説明した。

「杖か！？」

全員が身構える。

「全てを切り裂き、全てを突き刺す。そして全てを食らう」

そっぴいなながら、ほろほろ鳥を箸で食べた。

「ナイフとフォークの代わりなんだよ」

「すばらしい！！他にはどんな文化があるんだね？」

「アーサーちよつと待って、後でいくらでも聞いて良いから。重要な事を聞いてないわ。あなたが味方だと証明できる事ってないかしら？」

その時、突然、扉が開きアラスター・ムーディが入ってきた。

リーマスが動き、二人が杖を向け合う。

「合言葉は？」

「山」

「川」

「二人とも馬鹿なの？」

「そいつは誰だ」

「今の姿じゃ分からないか。さっき盾の呪文をあなたに使った人ですよ」

「そんなことわかつとる。お前、死食い人を攻撃してたが、何の目的だ。攻撃したからと言って信用はせんぞ。お前は怪しすぎる。見た事もない術を使ったり、お前の体からは闇の魔術の気配がする」

「黒魔術使っからね」

「闇の魔法使いか！？」

杖が向けられる。

「黒だろうと、あなた達の側に変わりはありません。ヴォルデモートは僕の敵です」

「信用できないな。スネイプの件もある」

その言葉に、周りが渋い顔をする。

「この子は信用できると思うよ」

そう言ったのはリーマスだった。

「この子は、ジョージの傷を治したりロンを助けたり不思議な魔法を使うが、救ってもらったのは事実だ。それに、どうも、術を使う反動で自分の体が傷つくようだ。自己犠牲なんて、闇の魔法使いだったらありえないと思うがね」

「確かに、わしも小僧に助けられた。死食い人の打った死の呪文を跳ね返してな、それに、こいつは、ヴォルデモートと対峙して退けおったぞ」

全員が驚愕の顔をする。

「本当なの？」

「闇の力が苦手な魔法を使いましたから。マジで死ぬかと思いましたがよ」

「死の呪文を跳ね返したって、どうやったの？」

「死の呪文って強力だから防げないんですよ？だったら、同じくらい強力なのをって思って、盾の呪文と死の呪文を混ぜたんです」

「死の呪文に死の呪文をぶつけて威力を軽減させて、盾の呪文で跳ね返したということか」

「ぶったまげー、そんな事できるんだ」

ロンが素っ頓狂な声を上げた。

「あれは、どうやった？ロンを生き返らせたのは？」

「僕が生き返った？僕死んでたの？」

「今さらなの？もういい、無視して続けて」

ハーマイオニーがあきれた声を上げた。

「どうって言われても、死んだばかりだったら、体が壊れていないだろうし魂も離れきっていないだろうから、入れなおしたんだよ。」

あれは、ちよつと特殊な術だから。家伝の術みたいな物かな？」

「ジャパンの術なの？」

「微妙かな、日本人の術者がいたり、中国人の術者がいたり、存在がありえない術者がいたり、こつちとは違って、基礎は一緒だけど、独自の術を使う人の魔法を混せて、自分流に創り直したって感じだよ」

「独自の術？すごいわね。それも強力なのばかり、あの呪文みたいなのは日本語よね？コンニチハ」

「さすがハーマイオーニー、こんにちは。あれは日本語だよ。言霊を使うだけだから、こつちの術と基本は同じだけど、強力な術を使うのにはちゃんと術を言わなきゃいけないから時間がかかるのが難点だけだね」

「言霊？」

「詳しく説明すると宗教観とか真理の説明になるから、簡単に説明するけど言葉には力がある。魔術を行使するのに魔力を言葉で導くという事。例えばルーモスの語源は光の力って意味でしょ」

「そういう事ね。でも、その歳でどうやって、そこまでの術を？」

「それは、秘密」

家族愛

「術を使うのにリスクがあるね？制御できないということなのかな？」

リーマスが聞いてきた。

「うーん。あれは、対価不足ってやつだと思う。」

「対価？」

「何かをかなえるには、同等の何かを支払わなきゃいけない。だから術を使うのには魔力を払えばよいけど、誰か何かしてあげる時に同価値の者を貰わなきゃ、代償が自分にかえって来るんだよ」

「それで、ヴォルデモートを退けたりは出来るが、人の傷を治すと傷つくわけか」

「ヴォルデモートは、襲ってきたから退けただけだからね。あれもハリーを守るために、充分ルール違反だから、普通の術者だったら傷つくけどね。僕の魔力は多いから、多い魔力を代償に払ってる。

さすがに人の生死に関わる様な傷の時はちょっとだけ体に傷が付くみたいけど」

「ちよつと？吐血したじゃない」

「人を生き返らせる代価が吐血だったら、軽いもんでしょ？」

「代価が成立すれば、良いって事ね？」

「うん、だから、さっき、僕が吐血した後、リーマスさんが指を怪我したのを、クッキーを代償に治したのは成立したんだよね」

「じゃあ、僕も何か払うよ」

ロンが言った。

「ウィーズリー家の誇りにかけて払わさせてくれ」

アーサーが言った。

「無理だと思う。人の命の代価ってわかってます？」

「命か」

「本気で見合うものだったら、同じ命ですね」

「だったら、私の命を」

モリーが言った。

「いらないうすって、もう自分の体で代償払っちゃいましたから」

「じゃあ何かさせて」

ジニーが言った。

「そうだぜ。俺達が双子でいられるのは、閣下のおかげなんだから」

「えー、うーん。じゃあ友達になって」

キョトンと言う顔をしている。

「そんな事でいいの？」

「閣下の仰せのままに」

笑いの輪に包まれた

ムーディーの苦手な者

黙って聞いていた、ムーディーが聞いてきた。

「それで一番重要な事を聞くが、どうやってハリーが移動する日を知っていた？まさか散歩してたら突然出くわしたとはいわせんぞ」

「うーん、何て言えばいいんだろう。予言かな？」

「予言？」

「ハリーがこの日危ないっていうのを占いで出たから、ハリーのところ、移動したの、姿表しみたいなものかな」

「占いが出来るのか？お前の占いは絶対なのか？」

「大体はかな、ロンが死ぬなんて出てなかったから」

「誰が死ぬかまでわかるのか？」

「うん。占いどおりだったら、今日ムーディーさん死んでたよ。間に合ってよかった」

全員が息を呑んだ。

「ふん、死ぬなら死ぬで良いんだ。余計な事をしおって」

「嫌だよ。ムーディーさんに死んでほしくない」

突然必死になって、ムーディに懇願するように、目に涙を浮かべて言った。

「わかった。わしが悪かった。泣きべそかくな」

「ふふ。闇被い形無しね」

トンクスが笑った。

「まあ、結論は出たんじゃないかな？少なくとも味方である事に変わりはないと思うが」

リーマスが言った。

「まだだ、この先の予言もあるのか？」

「あるよ」

皆が目の色を変えた。

「教える」

「ごめんなさい。言えない」

「何故だ？」

「人の未来に関する事だから、言つと結末が変わっちゃう。細かい事だったら、大丈夫だけど、現にありえないはずのロンの死があった。多分あれは、死ぬはずだった者を助けたからだと思う」

「わしの身代わりになつたのか？」

「多分」

「わしに関しては二度と助けるな」

「嫌だ。お願い誰も死なせないから、僕頑張るから、そんな事言わないでよ」

同じ展開、同じ答えが返ってきた。

「でも、あれはただだけないな、人を助ける為に君が傷つくのは良くない」

リーマスが、優しい声で言った。

やさしい。やさしい人だ。絶対この人を死なせない。そう心に誓った。

「一つだけ予言を教えるね。ヴォルデモートは滅びるよ」

「それが聞ければ充分だ。小僧」

そういつて、僕の頭を小突いてきた。

「すばらしい予言を聞いた。さて、ケーキにしようか」

「待ってましたー」

双子の兄弟が息の合つた声を出した。

「まちなさい。まず、あの子にいう事があるわ」

怖い、怒られるのかな？息子を殺す原因作つたんだもんな。

「ありがとう。本当にありがとう。息子を助けていただきありがとう」

モリーが言った。

「ああ、本当にありがとう」

アーサも言った。

「サンキュー」

と双子がグーサイン

「ありがとう」

ジニーが言った。

「ほらロンも」

ハーマイオーニーがせかす

「ありがとう……！」

ロンが恥ずかしがるように言い切った。

日本文化

ハリーやたらと大人しいな。何かあるのか？悩んでるんだよな。

日本文化について、永遠と聞いてくる、ハーマイオーニーとアーサーの相手をしながら、主人公とまったく絡んでないことに気が付いた。

「日本人は、魚しかたべないの？」

「肉も食べるよ。でもやっぱり、魚とか野菜とか食べる事が多いかな」

「たんぱく質はどうしているのかしら？」

「豆とかかな、豆を加工して色々作るんだよ」

「それで、豆を腐らすのね」

「好嫌い激しい食べ物だけだね」

「日本人は風呂好きと言うから臭いの強い食べ物があるのは不思議だわ」

「ほう日本人は風呂好きなのかね。どのくらい入るのかね？」

「毎日ですね」

「毎日！？綺麗好きだ。潔癖なのかい？」

「島国だし、木の生えてる山が多いので、水には困らないんです。現実とは違うんですけど」

「日本人は大きな公衆浴場があつて富士山の絵を背中に牛乳を飲むそうよ」

「ほう、すばらしいね。何故牛乳を飲むんだね？」

「そこに牛乳があつたから」

「かつこいいわ。何か分からないけどカッコいいわ」

「後は、露天風呂とかがあるよ」

「何だねそれは？」

「外の風呂だよ。日本は火山が多いから、いたるところに風呂があつて、外の風景を見ながら風呂に入るんだよ。露天風呂は開放的で

「気持ちいいんだよ」

「すばらしい。よし作ろう」

「え？アーサーさん？」

「どうすればいいんだね？」

「とりあえず土を掘って温泉を掘り当てなければ」

「よし掘ろう。魔法を使えばすぐさ」

「もう、じゃあ僕が作るよ」

「代価は大丈夫なのかね？」

「もちろんもらいます」

「何がいるかね？」

「しばらく、この家に泊めてください」

「そんな事は、こちらからお願いしたいくらいだ。唯、保護者の方は良いのかな？」

「大丈夫です。死にましたから。じゃあ、創って来ます」
外に飛び出していった。

「まずい事聞いてしまったな」

「そうですね、傷ついてないようだから安心ですね」

「そこが心配だね」

「どういふことですか？」

「あんなに幼い子が傷つかなくなるほどの事を経験してるという事じゃないか」

「ハーマイオーニーは口を押さえた。」

「ハリーでさえ、大変な人生を送ってきて、今だ、乗り越えられないのに、あの子どんな人生を送ってきたのかしら」

風呂と親馬鹿

窓の外をトンクスとリーマスが見ている。

「ねえリーマス、あの子、好きでしょ？」

トンクスがニヤニヤしながら言った。

「なっ何を、私にその趣味はないぞ。二つの意味でやばいじゃないか」

「そんな事聞いてないわよ。あなた、自分の子どもと重ねてるんでしょ？」

「うん、まあ、そうだな。親心を抱いてしまうな」

「私もそうなのよ。母性をくすぐられるのよね」

「あの子を見ていると、子どもが欲しいと思ってしまう」

「そうね。でも、まだ悩んでるんでしょ？あっ、あの子が転んだ」
ガシャーン

リーマスが窓を突き破って飛び出した。

抱いて帰ってくると、叫びだした。

「膝をすりむいた、トンクス何とかしてくれ」

「親ばかね、ってか何で、また小さくなってるの？」

魔法で傷を治しながら聞いた。

「服がきつかったので小さくなりました。やっぱり魔法で治療は辛いですね」

「大丈夫か！？大丈夫なのか！？」

「大丈夫ですよ。リーマスさん、心配してくれて嬉しいです」

ニコツと笑顔をのぞかせると、トンクスとリーマスが満面の笑みになった。

この時、これは使えらと、腹黒い事を考えた。

「そうだ、日本式お風呂できたんで入りましょうよ」

「日本式？それは面白そうだ」

「もう出来たのかね？すばらしい」

「女性用も作ったので、トンクスさんもどうぞ」

「あら、嬉しいわね。さっそく皆に知らせなくちゃ」

皆ではいる事になり、外に皆出てきた。

「あの子は？何か準備するって言ってたわ」

「来たようだな」

「待たせてごめんなさい」

「何を準備してたんだい？」

「後のお楽しみ、早く入ろうよ。こっちが男湯、隣が女湯」

「じゃあ後でね、リーマス。あなたはどっちに入るの？」

「えっ？僕、男だけど」

「あなたの肉体年齢なら、どっちでも良いと思うけど」

「そうかなー？やっぱ男湯」

「ふふ、じゃあ気が向いたら、いらっしやいね」

「もー早く入ってよー」

そう言って入り口を潜った。

「ここが脱衣所だよ。日本は、裸で風呂に入るから、水泳パンツとか準備しないでね」

そう言って、手を振ると、みんなの水泳パンツが消えた。

「え？裸なの？」

ロンが、聞いてきた。

「ホグワーツもそうでしょう？」

「そうだけど。外だし」

「男たる者、隠す事なかれ」

「そうだがロン、隠す事なんか無いぜ」

「そうともさ。それとも、隠さなきゃいけないものがあるのかな？」

双子が言った。

「わかったよ」

ロンが諦めたようだ。

風呂に入るとアーサーが感嘆の声を上げた。

「日本の風呂はすばらしい。何たる爽快感」

「こういう時、日本では、絶景かな絶景かなって言うんだよ」

「ふむ、そうか絶景かな絶景かな」

「戦いの中癒されるね。そうだろ、アラスター？」

「中々だな。裸ならば、武器を持つやつもおらんしな」

「昔の日本人も、そういう考え方で、裸で風呂に入る事にしてみたんだよ。特に仲間と信頼しあう意味で、裸の友という言葉もあるくらいだよ」

「そうか。日本人は話が合いそうだな」

「もっと気に入る事があるよ」

「なんだ？」

カスツと言う失敗の指ぱっちんと共に、お盆に載った徳利と猪口、つまみが数点現れた。

僕の悩み

「日本の酒だよ。お風呂に入りながら飲む酒は格別なんだって」

「それは、日本人はすばらしい」

「うむ、日本人とは共になりたいたいものだ」

「君の気配りは、完璧だね。子どもにしたいくらいだ」

「俺達も、飲みたいぜ。だろうジョージ」

「そうともさ、フレッド」

「逆でしょ？」

僕の指摘に二人は驚いた。

「さすが閣下だ」

「本名を教えたら、分かるよ」

「そういうものか」

「本名を教えるっていうのは、こっちでは、魂の恥を掴まれた様なものだから」

「僕も飲みたい」

ロンが近づいてきた。

「ママには言うなよ」

「わかってるよ、パパ。ハリーもおいでよ」

「うん」

「じゃあ僕も」

「君はだめだろ!!!」

全員、同時に声を上げた。

「えーじゃあ大人になる」

そう言つて、姿を20歳にした。

「日本では、10代で、酒を飲んで良いのか？」

「一様20歳の姿だけど」

「どうみても、13歳くらいにしかみえないよ」

「うん、つまみ消すよ。自信作なんだけど」

「ごめん、つい本音が」

「ってか、外国人が、おとなっばすぎるんだよ!!!」

「日本人てみんなそうなの？」

「一部の人だけです」

「うわーん、トンクスー」

そう言いながら5歳の姿に戻り、女湯に消えた。

「それでね、トンクスみんな、そういうんだ」

「そうね。確かに、幼く見えるわね。だけど気にしないで、あなたの長所よ」

「そうよ。可愛い事は良い事だわ」

「そうよ。私がハリーに一目ぼれしたのも、可愛かったからだし」

「そうなの、ジニー？」

「うん、そうなの。あのころのハリーは可愛かったな。今ではかっこよくなっただけ」

「ジニー女は押しよ！パパを落とした時もそうだった」

「だってハーマイオーニー」

恋話が始まったので、男湯の時と同じように、酒を出した。

こちらは、梅酒にした。

「うわーん、リーマスー」

そう言って、男湯に戻った。

ハリーの悩み

皆が寝静まった後、こっそり抜け出した。

「ハリー大丈夫？」

外に寂しそうに座るハリーの姿があった。

「うん、大丈夫」

「何を悩んでいるの？話して」

「君は、未来を知ってるんだよね？」

「似たようなもんかな」

「ダンブルドアの死も知ってたの？」

「知ってたよ」

「なんで助けないの？」

正確には助ける事が不可能だったが、怒りをぶつける相手が欲しいのかと思い、従った。

「必然だから」

「じゃあシリウスも」

「必然」

「何でそんな事」

「ヴォルデモートが滅びる為に必要な代償なの、でも、ハリーは、そんな事で悩んでるんじゃないよね？」

「え？」

「ロンの事？」

しばらく経った後、ハリーが口を開いた。

「僕、今日怖かったんだ。ロンが自分の代わりに、死んだと思った。だってそうでしょ？ロンは、僕に変身してたんだよ。僕を守るために死ぬなんて、こんな」

ハリーが泣き出した。

僕はハリーの前から、そっと抱きついた。

「怖いね。苦しいね。守られるほうは溜まんないよね。お父さんと

お母さんと重ねちゃったんだよね」

ハリーの鳴き声が一層強まる。

「良いよ、泣いて。僕が、姿を隠すから」

ハリーの腕に力が入り、抱きつく力が強くなる。

「優しい子、大丈夫。誰も死なせないから。でもね一つだけ覚えておいて、終わる時、こうなる事は必然だったて」

そう言つて、頭に手をやり眠らせた。

「願わくば、彼等の未来に幸多からん事を」

追悼式

しばらく、楽しい生活があり、ハリーがあれ以来、事あるごとに僕のところに来る事になった。他にもみんなで、食事の時、僕の隣を争いだして、日替わりの日程を決めた。料理も、酒と一緒に出したつまみが美味しかった事から日本食を事あるごとに作らされた。ムーディがイカの塩辛を気に入って、常備しなくては、いけなくなつたのはめんどくさかった。

一緒に寝ると言って聞かないリーマスと一緒に寝たり、ずるいと言い出した皆に結局、日替わりになったり、きつと、戦争が近い事を薄々感じているのだろう、少しでも心の安住の地が欲しいのだ。

僕は、基本的に、皆の癒しになれば良いので、年齢を、ちょこちょこ変えている。

リーマスの側では、5歳にしている。

そんな生活の中、ダンブルドアの追悼式に行った。

たしか、襲われるんだったなと思い、ここの周りに結界を張った。

案の定、結界が攻撃された。

「死食い人が襲ってきました。ディメンターもいます。皆さん避難をしてください」

直後にシャックボルトの守護霊がやってきて、魔法省が落ちた事を伝えた。

「皆急いで、もうじき、守りが破られます」

バン、バン、と姿現しをしていく音がする。

「クツもう、保てない」

直後、術を破られた事で体から血が流れる

それを、合図に一齐に死食い人が襲ってきた。

ハリーが駆け寄ってきた。

「行って！ハリーにはやらなきゃいけない事があるだろ」

「でも！！！！」

「ハーマイオーニー頼む連れてって！！！」

「ツク、わかったわ。ロン、ハリー行くわよ」

バシッという音と共に3人は消えた。

「リーマスたちも行つて、僕の術に当たるよ」

「しかし！！！」

「あーもー、トンクスお願い！！！」

「わかったわ」

あらかた逃げた事を確認すると、両腕を突き出し、一気に十個の気絶呪文を打ち出しながら体を回転させる。

さながら、ストウピーファイのスプリンクラーだ。

しかし、数が多すぎた。

法具の指輪を出現させ、指にはめた。

一発の気を分散させ、多くの敵を打つ。

デイメンターにも効果があるようだ。

突然、大きな声がした。

「見つけたぞ。幼き者よ」

「ヴォルデモート」

「貴様には聞きたい事が山ほどある」

「僕にはないけど？」

「私にはある」

「知らない。怖いからバイバイ」

そう言つて逃げた。

「これから、どうしよう。誰がどこに行ったかわかんないしな。術を使えば分かるだろうけど、しばらくは、暇な時間だしな」

「そうだ京都に行こう。違うわ！！！！ヴォルデモートの所に行こう。暇だし」

また、ヴォルデモートの所に戻った。

「ただいま」

「貴様！！！」

「僕は、君の子ども。だから、一緒に連れて行って」

「そうだったな。一緒に来い。我が子よ」

神様の特典使えるなど、思いながら着いて行った。

三河屋さんと食事と

「ちわーす、三河屋です」

「さぶちゃん、ガリーック！！！ピマーン！！！キュッカンヴァーをお願いします」

「わかりました。ベラット・リックスさん」

「ブーンと言う音と共に、子どもが消えた。」

「ベラトリックス何をしている？」

「はっ！！私はいったい何を！？」

「錯乱の呪文を使われたのだ。さすがだ」

「あの餓鬼！殺してやる」

「殺気立つのは良いが、貴様、我が子を殺すのか」

「我が子！？そうでした。滅相もございません我が君。闇の帝王の王子様に手を触れようなど恐れ多い」

「ただいま、買って来たよ」

「さぶちゃ……。王子様、よく帰っていらっしやいました」

「えゝもう解けちゃたのゝパパが解いたんでしょ？」

「そう、怒るな我が子よ。ベラトリックスは闇の帝王の右腕だ。そう、いじめるな」

「右腕！！！我が君、身に余るお言葉です」

「ベラちゃん、しょうがないな。右腕記念に、今日は僕がご飯作つてあげる」

「王子様に作らせるなど滅相もございません。ワームテールにやらせれば良いのです」

「わ、私がやらせていただきます」

「ピーター、いつの間にかいたの？良いよ、今日はぼくが作る。命令ね。逆らわないよね？」

「ひっ！わかりました王子」

「よし、腕によりをかけて作るぞ」

「楽しみ似ているぞ我が子よ。肉は入れるよ」

キッチンで、音程が非常にずれた歌が聞こえる中、死食い人の会議をするのに魔法力を総動員しなければいけなかった。死食い人達は、それでも音量が上がってくる声に、疲れ果てて、息も絶え絶えだった。死を覚悟する者までいた。

突然、歌が止んだと思うと、王子が現れた。

「何で皆、倒れてるの？」

「……！王子様、ご機嫌麗しゅうございます」

「全員で揃えるってキモい、びつくりするじゃんか。」

「そう言うな。どうしたのだ。我が子よ」

「うん、パパ。ご飯できたから様子を見に来たの」

「どうせ、魔力の減少で会議などできない。食事を持ってきてやれ」

「え？パパは食べたくないの？」

「そんなことはない。食べたいに決まっている」

「パパはツンデレだな」

そう、言いながら、失敗する指ばっちんの音と共に食事が現れた。

「これは何だ？我が子よ」

「これはね、日本料理ですき焼きっていうんだよ。肉も野菜も食べられるから、みんな健康になれるでしょ？」

「良い香りです王子」

「だまれ！ワームテール。王子をほめるのは私が先だ」

ベラトリックスが怒鳴る。

「ほう？食欲をそそる匂いですな王子？時にどの様な薬を使えば、これほど、甘美な匂いが出せるのですかな？」

「やだなースネチャま、薬なんかじゃないよ。これは、僕の愛情だよ」

「話している場合ではないぞ、せっかくの我が子の料理が冷めるではないか。早速食事にするぞ」

「ちよつと待ったー。この料理を食べる時は生卵につけて食べるんだよ。」

「生卵ですか王子？」

「文化が違うから戸惑うかもしれないけど、一番美味しい食べ方だよ」

「我らは、死食い人だ。そんな事にこだわったりはせん。そうだな？」

「はい。我が君」

全員声をそろえて言った。

「では、食すか・・・」

「どう？口に合う？」

「我が子よ、何と美味たる味が」

「こんな美味しいもの食べた事ありません王子」

「抜け駆けするなワームテール。王子の食事は全て私がいただく！
！！」

「叫ぶなベラトリックス。それにしても、薬も使わずこの味を出すとは恐れ入ります」

「みんな、何かキャラ違う」

小声でそう呟いた。

ピーター

食事を食べ終わった後、会議を再開したようで、何故か僕は、お風呂に入ってくるように全員から促がされた。

ヴォルデモートが根城にしている、マルフォイ家の別荘にも露天風呂を作ろうとしたが、反対されたので、しかたなく、室内の風呂を、魔法でそう見えるようにした。

「良い湯だなーこんな時は、日本酒に限る」

グビツと飲み干しながらイカの焼き物を食べる。カタツと物音がしたので後ろを振り返ると、ピーターがいた。

「あれ、ピーター、もう終わったの？」

「はい、終わりました。」

「ピーター、もっと気楽に話そうよ」

そういつて、ピーターの猪口を出した。

「僕の母国の酒だよ。美味しいから飲んでみなよ」

恐る恐る飲むと、目をキュンと輝かせて言った。

「王子、美味しいです。このイカもとっても美味しいです」

「そう？よかった。ピーター、どうして、友達を裏切ったの？」

「ひつ、わ、私は、闇の帝王の為に」

「良いよ。そんな事言わなくても。君の名前からは、友を思ふ気持ちしか語られてこない。なのに、どうして？」

「わ、私は、言えない」

「怖い？じゃあ手を出して」

そう言つて敗れぬ誓いを立てた。

「王子」

「これで、大丈夫だよ。ピーター話して」

「わ、私は予言を受けた」

「それで？」

「ジエームズを・・・友を殺し、友に罪を着せ・・・闇の手の中で

光を助けよと」

「そう、それで友を殺したの？」

「それだけではない。私は、闇が怖かった。自分が死ぬのが恐ろしく、ジエームズ達の彼光が私を影の世界に追いやったんだ。だけど、僕を救ってくれたジエームズだけは殺したくなかった」

そう言つてピーターは泣き始めた。湯面に映る姿は、幼き頃のピーターそのものだった。

「大丈夫。彼らはきっと許してくれる」

そういつて、ピーターを抱きしめた。

泣く彼を魔法で眠らせ、ベット転送した。

彼を、心のそこから愛おしくおもった。

「彼の余生に幸多からん事を」

そう言つて、猪口を口に当てた。

電話会談

「新事実発覚だね。ピーターにそんな予言が合ったとは思ってもみなかったな。原作にそんな伏線あったかな」

「なかったと思うけど」

「作者さんか！？びっくりした。突然介入するんだもん。」

「なんか原作にないこと多いね。これも、君が介入したからなのかな？」

「わかんないな。ところでさ、何か話にくいよね」

「何が？」

「作者さんと話すのって、頭に話しかけられてるみたいで何か違和感ある」

「そう、言われてもな。しょうがないじゃん」

「あれできるかな？」

「何が？」

「我望むものあり、異なる次元を繋ぎ、言葉を繋げ」

「よし、これで良いな」

「あつちよつと待って電話」

「もしもし？」

「僕、僕、わかる？」

「がちゃ」

「ごめん。僕、僕、詐欺かかってきたわ。本当にあるんだね。感動した」

「いや、僕だから！電話してるの僕だから！もう一回かけるから、ちゃんと出て」

ブルブルル

「もしもし？」

「切らないでね！めんどくさいから作者さん」

「えゝ有りですか？こんなの有りですか？」

「まあ、魔法だし。メーヴェ出せたから大丈夫かなって思ってた」

「何か変な気分、キャラクターと喋るって」

「それよりさ、どうなってるの？原作に載ってない事があるって」
「知らないよ」

「あんたが書いてるんでしょ？」

「いやだって、頭の中で勝手にストーリー出てくるから。それに、神様も言ってたけど、君のやっている事は、現実起きていて、それが、俺の頭の中に流れてきて、そこに俺が介入して」

「頭痛いからやめて」

「俺も言ってる気持ち悪くなってきた」

「何か俺らって似てる？」

「僕も思った。もしかして童顔？童顔設定に全然違和感感じてないし」

「君ほどじゃないけどね。3〜5歳くらい若く見えるみたいだよ」

「本当に？けっこうな童顔だね。なんかさ大人に見られたいって気持ちと、かまってもらえるから良いなって気持ちに戸惑わない？」

「わかる。ム力つく時もあるけど、便利といえば便利だよ」

「知らない人も親切にしてくれるしね」

「そうそう、道に迷った時とか、後ヤンキーに絡まれない」

「ヤンキーって意外に優しいしね。怪しい大人とかは困るけど」

「ショタコンね。リアルなのはやめて欲しいよね。痴漢とかされてもどう反応して良いかわかんないしね」

「痴漢された事あるの！？何回？」

「5回。君はないの？」

「俺まだ15歳だからそんなに電車に乗らない。でも、繁華街歩いてて、裏道に迷い込んだ時とか変な人着いて来て、困ったな」

「大丈夫だったの？」

「写真取らして、って言われたからピースして、飴もらった」

「危ないよ。だめだよ。お父さん許しません」

「誰が？そんな歳じゃないでしょ？」

「へへ。君よりは年上」

「うざー」

「そついえばさ、名前を決めなくて良いの？」

「偽名は言っただよ」

「あれじゃ、だめでしょ」

「まだ、偽名決めてないんだよね」

「名は大事だからね」

「うん。名は大事。ちゃんと考えておくよ」

「それよりさ、君、ピーターどうするの？」

「ピーターは助けたい。好きだし」

「同感だね。一番、人間らしいよね。何か見捨てられない感じだよ
ね」

「分かってももらえる？あんま理解されないんだよね」

「3巻の最後の、シリウスがピーターに言った。（だったら、死ねばよかったんだ）ってやつあはないよね。」

「僕もそう思う。友達を裏切るのは許せないけど、他の魔法使い達
がかなわない相手にね立ち向かえないよね。強いやつ言い分だよ
ね」

「あいつら正義感の塊だからな」

「何とか助けてあげたいよね」

「そうだね」

「今からどうするの？このままヴォルデモートと一緒にいるの？」

「そのうち、消えるよ。この前のロンの事もあるから、不測の事態
が心配」

「つてかさ、人を生き返らせたよね？真理を破壊した？」

「してないよ、時間も巻き戻してないよ」

「どうやったの？代価は？」

「魂が離れきってなかったっていうのと、魔力を大量に払ったのと、

寿命を払ったからね」

「寿命？大丈夫なの？」

「自分の事は良く分らない。」

「無理しないでね」

「リーマスさんみたいなこと言うね」

「何か弟みたいだからさ」

「ありがとう。兄ちゃん（笑）」

「がんばれよ、弟（笑）。それと、ハリーにヘドウィグ生きてる事教えてやれよ」

ベラトリックスの悩み相談

朝起きてボーっとしていると昨日の会話を思い出した。

「兄ちゃんっていうと前の世界の事思い出しちゃうな・・・何か気持ち暗くなる。別の事を考えなくては!!」

朝食を作りながら、卵を割っていた時、鳥つながりでヘドウィグの事を思い出した。

「そうだ。ヘドウィグの事忘れてた。今は魔法で場所分らないから、ヘドウィグ困ってるだろうな。後で届ければ良いか」

朝食をびっくりするくらいでかい、テーブルの上に運び終わると寂しく感じた。

誰も席についていないのだ。

「闇の陣営って朝が苦手なのかな・・・よし!!歌おう」

「ケロケロケロ いざ進めゝ 宇宙侵略」

歌い始めたばかりの時、屋敷中から悲痛なうめき声が聞こえた。

不思議の思い、様子を見に行く為階段の下まで来ると

「お・・・う・・・じ」

そういつて、ルシウスが階段を転がり落ちた。

「ぎゃあああ。ルシウスさんの穴という穴から血がー!!!!」

パニックになりながら、呪文で傷を治すと、自分自身もぼったり倒れた。

目が覚めると、ヴォルが目の前にいた。

「ぎゃああ!!目に毒!!!!」

「うつ。我が子よ。悲しいぞ」

「ORZしてる!!!パピーがORZしてる!!!ごめん、いきなり怖い顔が目の前に」

「うぐつ。」

「パピーが。―― 床に倒れて棒になった！！！落ち込まないでパピーは世界一素敵だよ」

「良くぞ言った我が子よ」

「元気になるの早！！」

「もう一度言ってくれ」

「パパは宇宙一のすてーき」

「ふははははは」

笑い声と共にヴォルデモートが去っていった。

夜になりうるちよろしていると

「王子様！！」

「！？ベラちゃん。突然脅かさないでよー。後、無駄に声高い」

「ワームテールから聞きました。王子に悩み相談が来ると」

「何の話？」

「お風呂で悩み相談を受け付けていると」

「え？まあやった事はやったけど」

「私も相談があるのです」

「ベラちゃんも？良いけど。対価が必要だよ」

「ちなみに、ピーターは自分の秘密を払ったよ」

「私に払えるものは何があるのでしょうか？」

「明日から修行に付き合って」

「修行？なんのですか？」

「魔法の」

「王子にそんなものが必要があるとは思えません」

「実戦経験がないから、力押しの攻撃以外も修行したいの」

「私にできる事でしたら喜んで」

「交渉成立。じゃあ後でお風呂でね」

お風呂の準備をして先に湯に使っているとベラトリックスが現れた。

「それで、相談って何？」

「闇の帝王にとって私は何なのでしょう？」

「パパの右腕でしょ？」

「心は隣においてくれないのでしょうか？」

「愛か。うーん。パパも良く分かっていると思うよ。パパは愛を馬鹿にしているし、自分が人の上に立っているら誰かから離れていけないと心のどこかで思っている悲しいところがある」

「どうということですか？」

「寂しがりやなんだよ。力に執着するのはね自分に心のそこから信頼できる仲間がいないから、だけど、仲間が欲しい。だからこそ、人を力で縛ろうとする。闇の印なんかで繋ぎとめようとするんだ。」

「やはり、私は、心からの信頼は得られない」

「違うよ」

「どうということですか？」

「パパは、自分の寂しさを認めようとしないだけ。認めているのを恐れているだけ。認めてしまえば、自分を見失ってしまうから」

「どうすれば」

「パパは態度も行動も言葉も信じない。それでも、信じて続けて、願って。あなたの思いはきっと届く。人の願う力はそれほど強い。特に、魔法使いはね」

「わかりました」

「でもね、あなたの願いは、二人で一緒にでしょ？」

「何故分かるのですか？」

「あなたの名前を知っているから。あなたの願いは強い力がある。でも、2人で一緒なら良いの？そのままでは、ただの邪念になってしまう。相手の幸せを願わなければ、どんな状態でも、誰を殺しても2人なら良いというのは邪念なの」

「邪念」

「邪念は、呪と一緒に。自分も相手も不幸にする。相手も自分も不幸になって、2人で不幸の道に行く。あなたの願いわ？」

「2人で幸せになる事」

「僕はきっかけを作るだけ。後は、あなたしだい」
ゆびぱっちゃんの失敗の音と共に、ベラトリックスを眠らせた後、部
屋に送った。

ルシウスの悩み

猪口に酒を注ぎ、一杯やっているルシウスが入ってきた。

「ここで、王子が人生相談をしてくださると聞いたのだがよいですか」

「うん、まあ良いよ」

そう言つて、ルシウスに酒を勧める。

「異国の酒とは、なかなかの名品です」

「分かる？ あんまり手に入らないんだよ。こっちもどう？」

そういつてキセルを取り出す。

「これは？」

「パイプみたいなものかな」

ルシウスが煙を吸い吐き出した。

「なかなか、すばらしい」

「それで、何を相談したいの？」

「私は杖を失つた事で、地位を失つた」

「それで？」

「地位を取り戻したいのです」

「地位を取り戻すだけで良いの？」

「それ以外に何を？」

「地位を取り戻してどうしたいの？」

「マルフォイ家の力を取り戻さなくてはいけないのです」

「マルフォイ家の力を取り戻してどうするの？」

「ドラコモナルシッサも蔑まれておるのです」

「あなたの願いは？」

「家族で共に幸せな日常に」

「そこに杖や地位はいるの？」

「家族さえいれば良いです」

「そう。きつとそうなるよ。思うように行動すればね」

「感謝します」

失敗する指ぱっちんて部屋に送った。

スネイプに悩み相談

スネイプが入ってきた。

「王子、ここですか？」

「スネピーも相談？」

「何の事ですか？良い酒が飲めると聞いたので来たのですが」

「酒目当てね」

「ところで、王子は杖なしで魔法が使えるのですな。妖精の魔法に似ておりますが」

「別に使おうと思えば使えるでしょ？杖の制御無しで使う練習しないからだよ」

「確かに、制御が難しいですな。その歳で、呪文も杖もなしで使えるとはさすが、帝王の御子息ですな。指をこするのは何故ですか？そう言われると、手をすつと払い猪口を出した。

次に、息をふつ吐くと徳利が現れ、ウインクするとつまみが数点現れた。

「別に何でも良いんだけど、何かやったほうがカッコいいから」

そういつて、頭で念じると、徳利が勝手に猪口に酒を注いだ。

「何もせずとも、魔法が使えるのですな」

スネイプは目の前に浮いている、猪口を取り、飲んだ。

「なかなか、良い酒ですな。ジャパンの物ですか？」

「日本の酒だよ。これは、肉じゃが」

「うむ、おいしいですな」

「ねえ？質問して良い？」

「何ですか？」

「どうして、一人の人を一生愛せるの？」

「！？突然何ですか？」

「リーリーさんまだ好きなんですよ？」

「リーリーです」

「ファミリーネームが変わっても？」

「それを聞いてどうされるのですかな？」

「誰にも言わないよ。信用できないなら、僕の秘密を教えてあげる」
「秘密ですと？」

「僕、ヴォルデモートの子ともじゃない」

「！？どういう事ですか」

「こういう事」

手をスツと振ってスネイプにのみ本来の感覚に戻す。

「錯乱の呪文か。我ら全員にかけるとは未恐ろしい」

「錯乱の呪文とは違うけど、そんな物かな？みんなには内緒ね」

「それで、何が聞きたい？」

「人を好きになるって、どういう感じ？」

「何に変えても守りたいという様なものだ」

「良く分からないよ。それなら、僕は、誰に対しても感じてるよ」

「子どもには難しいかもしれぬな」

「いつか、僕にも分かるのかな」

「人を愛する気持ちが分からぬのか？」

「愛は分かる。でも、たった一人って分からない。僕は、皆大事だから」

口を湯に沈めてブクブクやっている僕の頭にスネイプが手を置いた。

「いずれわかる」

「とつても、やさしい。」

知らない世界に来て、みんなに優しくしてもらった。

だけど、僕は皆を好きだから、誰にも心を開けない。

誰か一人に特別な愛情がもてない。

前の世界でもそうだった。

兄ちゃん元気かな。

恐怖 ベラトリックス来襲

次の日、約束どおり、ベラトリックスと修行を始めた。

多対戦の力押しなら、僕のが強いけど、一対一の技量線になると、経験がない分とっても弱い。

今は、実力を見るために決闘の最中だ。

「1、2、3」

ベラトリックスが杖をあげるより早く、僕が魔法をぶつける。

無言呪文の上に杖もなしだから、先手はこちらが取る。

「くっ」

ベラトリックスは驚きの声を上げながら、呪文をよけ、魔法を放つ。さすがに、死の呪文は使ってこないが、本気の魔法をぶつけてくる。

「プロテゴ」

「王子も呪文をいうのですな」

審判役のスネイプが聞いてくる。

「呪文のイメージを明確に持たないといけないから、とっさの時は呪文を言ったほうが早いのに」

「余所見をしている暇があるのですか！！！」

ベラトリックスが先頭モードに入って、狂いだす。

「ベラちゃん、呪文の連射しすぎ」

「hh」

「言葉になってないよ！何？hhってははって笑い声の事なの！？」

「hh」

「怖いよ」

ベラトリックスが、芝生を炎で多い尽くす。

「熱！！我を守護せよ水の魂」

体の周りに水の幕を張る。だが、水は長く炎の中にいれば沸騰してしまう。

炎を一気に突っ切り、ベラトリックスに跳び蹴りを入れようと炎か

ら飛び出す。

「読まれた!？」

ベラトリックスが待ち構えて、杖を鞭に変え、僕の体を捉える。鞭がギョウギョウと体を締め付ける。よく見ると、それは、鞭ではなく蛇だった。

息が出来ないので、無言呪文で蛇を綿にし引きちぎる。

「ベラちゃん強すぎ」

そう言って両手の10指から呪文を打ち出す。

呪文は10倍の力で、ベラトリックスを襲う。

地面がえぐれ、小さなクレーターが出来る。

しかし、ベラトリックスは、もはや、そこにはおらず、呪文の直線的な軌道を読み、斜線上から体を横目に走ってくる。

それでも、僕の術スピードのほうが速い。口から、気絶呪文を打ち出す。

不意打ちだったにもかかわらず、ベラトリックスは反応し、呪文を弾かれた。

目の前に杖を突きつけられた。

「まいった」

「勝者ベラトリックス」

「ベラちゃん強すぎだね。後、怖い」

「王子様こそ、冷や汗をかかれましたよ。10指の魔法は、威力があります。当たってたら死んでました」

「それにしても最後の不意打ち良く反応できたね」

「やってやるって顔してましたから」

「表情で読み取られたの? うわっ、すごすぎ」

「王子も良く戦っていましたよ」

スナイプが割り込んできた。

「そうかなー」

「王子の技は多対戦で力を発揮するようですね。10指の技は一直線に出すより、多対戦の時のように広範囲に術を出したほうが良い

「と思いますぞ。」

「広範囲か」

「そうです。あたれば終わりの業の威力を高めても意味はないのです。」

ベラトリックスが言った。

「ちょっとやってみるね」

魔法を放つ。10個の魔法の当たる音が重なり合い、不思議な音がした。

「これでは、先ほどのようなわけ方はできまい、ベラトリックス？」

「避けるのは無理ですね」

「今から、もう一回やる」

「いえ。一対一はもう必要ないです」

「え？まだ勝ってないけど」

「王子は術の応用や反応が悪いだけです。今から、サバイバルをして、戦いに慣れてもらいます」

恐怖のサバイバル演習

そういうことで、サバイバルに突入。

僕対ベラトリックス、スネイプ、ピーター、ヴォルデモート、グレイバック

「あーもーマジですか。何で、こんなに強いやつらと多対戦なの」
岩の陰に隠れながら、嘆いていた。

不意に、何かの気配がする。

何も無いはずのところで、誰かと目が合った。

キラッと何かが光ると、僕は横っ飛びに避けた。

頭から地面に突っ込んで、みつともないが、そのまま反撃する。
盾の呪文と共にスネイプが現れる。

「目くらましを見破るとは」

スネイプが僕の横にあるつたに杖を向けると、つたがするすると動いて体を縛る。

「何で皆、縛るのが好きなの!!!」

そう言っつて、術を使い、つたを通り抜ける。

「なに!？」

「ていやー」

そう言っつて、回転しながら10指ストウーピファイを打つ。

「くっ」

そういつて、スネイプは物陰に隠れた。

後ろのほうでも、誰かが盾の呪文を使っている。

何人が潜んでいたようだ。

ドシンという音と共にグレイバックは倒れた。

術にあたったようだ。

グレイバックに近づき、気絶しているか確かめる。

「グーちゃん」

「・・・」

「返事がない。ただの屍のようだ」

ふざけている所に魔法が飛んでくる。

ピーターの襲来だった。

とても早い術の応酬に、パニックになり、反撃が出来ない。

「ピーター結構強いな」

足に魔力を込めて飛び上がり、ピーターの背後に着地し、ゼロ距離で魔法を使う。

とたんにピーターの姿が消える。

ネズミになったのだ。

ネズミに向け術を乱射するが、当たらない。

精密射撃は難しいな。

「hh」

ベラトリックスが現れた。

ベラトリックスの攻撃

王子に20のダメージ

王子は逃げ出した。

「hh」

王子は逃げ切れなかった。

ベラトリックスは魔法を使った。

王子に40のダメージ

王子はアイテム砂を使った。

砂がベラトリックスの目を直撃。

ベラトリックスは逃げ出した。

「卑怯な手を使ってしまった」

「ふははははは」

「パピー!？」

空から現れた、ヴォルデモートが、強力な魔法を使ってくる。
結界を張り防ぐ。

「強い!! 攻術をするしかないか」

手をヴォルデモートに向け魔力を直接叩きつける。

ヴォルデモートが避け魔法を放ってくる。

「パピー本気か」

「当たり前だ。でなければ強くはなれぬ」

「hh」

「ベラちゃんもう復活したの!？」

「私もいるが」

「スネピー!!」

そういつて、土の壁を作り3人の術を防ぐ。後ろに回り込もうとした矢先、土が突然3匹の蛇になり体を縛り付けた。

3匹の蛇を水に変え3人を襲わせる。

3人はそれを、炎に変えた。

僕は足に魔力を溜め一気に駆けぬける。

そこに、ピーターがアニメーガスを時、杖を持って現れる。

ピーターの杖を吹き飛ばすと、どこから現れたのか3人に杖を向けられた。

「まいった」

「まさか、あの炎を防ぐとわ。さすが我が子よ」

「蛇を水に変えて反撃したのは、上手かったです」

「しかし、魔法ではなくベラトリックスを砂で撃退するとは、面白い手を使いますな」

「追い詰めたと思ったのに杖を吹き飛ばしたのが素晴しかったです」

「でも、また、負けちゃった」

「我が子よ。我ら5人の相手をし、ここまで善戦するのだ。見事としか良いようがないぞ」

「そうかなー。」

「では、また明日。戦えばよかつ。今日は、休まねばならん」

「え？もう一回やろうよ」

「疲れておらぬのか？」

「まだ、大丈夫」

「我が子よ。お前は大丈夫かもしれないが、我らは力を使いすぎておるのだ」

「まあ、いつか」

バタ

バタ

バタ

バタ

振り返ると4人が倒れていた。

「え？うそー！！僕だけ魔力無限だからか！？」

パニックになりながら、皆を建物の中に運んだ。

レトルト食品という崇高な存在

修行を始めてからしばらくたち、ヴォルデモートに呼び出された。

「我が子よ。しばらく我らは旅に出る」

「杖を探しに行くの？」

「分かるのか？」

「何となくね」

「お前を連れてはいけぬ」

「何となく分かった」

「すまぬな」

「一つだけ約束して欲しいんだけど」

「何だ？」

「人を殺さないで」

「・・・」

「お願い」

「できるだけそうしよう」

次の日ヴォルデモートが旅立った。

「これからどうしよう。ハリーたちは、しばらくグダグダしてるだろうからな。まあいつか行こうかな」

ゆびばつちんの失敗する音と共に、移動した。

「久しぶり！！」

「くっ」

一瞬で杖を向けられた。

「え？何？」

おたおたしているとハリーが口を開いた。

「僕は君を信じていたのに！！！！」

「やめてハリー相手は子どもよ」

「でもこいつは!!」

「そうだぜハーマイオーニー」

「でもロン!あなたを助けた」

「裏があるに決まっている」

3人の言葉の意味が分からず聞いた。

「ちよつと待つて、何なの説明してくれない?」

「私、本で調べたの。あなた例のあの人の子どもなんですよ?」

「え?ああ。そこまで変わるのか」

「どういつつもりだ!何の目的だ!!」

「今説明する」

動くと術をくらいそうなので、3人の頭に真実入れる。

「え?どういうこと?」

「僕の手だよ」

「錯乱の呪文じゃないわよね?」

「違うよ」

「わけが分からないけど。あなた味方なのね?」

「そうだよ。最初に言っただでしょ」

「ハリー、杖をおろしたほうが良いんじゃないかな」

ロンの声でハリーが杖を降ろした。

「死ぬかと思った」

「それより、あなたどうやって保護魔法を破ったの?」

「破ったんじゃないよ。保護魔法を通り抜けただけ」

「そんな事できるの!?!」

「できてるでしょ?」

「そうね。そう」

「君は何で来たの?」

ロンが聞いた。

「暇だったから遊びに来た」

「ふざけるな!!遊びじゃないんだ!!!!」

「ハリー外して」

ハーマイオーニーがホーラックスをつけているハリーに言った。

「それ、しばらく封印しようか？」

「出来るの？」

「つけている本人の心が安定しているなら惑わされない程度には出来るよ」

「対価はどうなるの？」

「そうだな。時が来たらあるものをもらう」

「怖いわね」

「ハリーが捨てる物だから大丈夫だよ」

「僕が捨てるもの？」

「今は知らなくて良い」

「何でも良いよ」

ハリーがまたイライラしだした。

「それを、そこにおいて」

ホーラックスの上に手を置いて、目をつぶり魔法陣を出現させる。

ホーラックスが浮き出し、目の前に来たところで、ホーラックスの周りに円を描くように手を動かす。

「できたよ」

「もう？」

「うん。でも、これはつけている本人の意思によるところが大きいからね。特にロンとハリーは気おつけてね」

「わかった」

「うん」

「前から言おうと思ってたんだけどさ」

3人が真剣な顔でこちらを凝視する。

「ロンって背が高いのに可愛いね」

「え？」

ロンが驚いた顔をして顔を赤らめる。

ハマイオーニーがくすつと笑い、続いてハリーが力を抜かしイスに

座る。

「何だよそりゃ」

「だって、発言が何か子どもみたいで可愛い」

「君が言うな!!!」

3人が声を揃えて言った。

「そういえば、みんなちゃんとご飯食べてる?」

3人のやつれた姿を見て言った。

「あまり、ちゃんとしたものはないわね」

「おいしいものなんか何もないんだ」

「魚を焼くくらいしかないよ」

「魚ってちゃんとしてるよ」

「焼いた魚だけだぜ」

「私達、あまり料理をした事がなくて、焦げちゃうのよね」

「じゃあ、ご飯の作り方を教えてあげるよ」

「本当に?でも簡単に出来るのかしら?」

「とりあえず、ご飯作ろうか」

魔法で飯ごうを出し、米を研ぐ。3人にも教えながらご飯を炊く。

野菜の切り方も教える。

「デイフィンド」

「こら!魔法使うな」

ロンが魔法を使ったので叱った。

「だって楽でしょ」

「手作りが美味しいの」

「こんな感じで良い?」

「え?ハリー上手いな」

「うそ?私より上手」

「僕は、ダーズリーのところで料理担当だったからね」

「そういえば、そうか。カリカリベーコン作ってたね」

「君は何で知ってるの!?」

「しまった・・・」

第一巻の記述だったな。どうしよう

「それも、君の力？」

「そうそう、僕の力」

「まあ、何でも良いや」

お湯で、野菜を煮て火が通ったところでカレー粉を入れる。

「この匂い、カレーアンドライス」

「こんな本格インド料理作れるんだね」

「あらやだロン、少し前までは、イギリスでも家庭料理だったのよ」

「カレーのルーと野菜入れば作れる料理だから簡単でしょ」

「・・・」

「・・・」

「カレーのルーって何？」

「何いってんのロン？それに二人して何で無言？」

「忘れてた！！！レトルト食品使えばこんな生活せずに住んだのに

！！！！」

「そうだわ、冷凍食品だってあるわ。その手があったのよ」

「何それ？」

「マグルの食べ物で、火で暖めるだけで、料理が出来るんだよ」

「え？何それ魔法みたい。魔法とは違うの？」

「出来てる料理を腐らないようにしてるだけだからね」

「魔法生活長いから忘れてたわ」

「まあ今度買ってくるから、しばらくは我慢してね。とりあえず食べよう」

皆でカレーを食べ始めた。

「美味しい！」

「何か、イギリスで食べるのとは違うね。でも美味しい」

「うぐっ ヒッグ グスン」

「ロン泣かないでよ」

「だってー」

「喜んでもらえて光栄だよ。これは日本の味付けのカレーだからね」

「私知っているは、日本ではカレーライスって呼ばれてるのよね？」
「博識だね」

「あーあ。これで、ホーラックスを破壊できる方法が分かればな」
「え？まだ知らないの？」

「君は知ってるの？」

「安全な方法よね？」

「バジリスクの毒を吸ったグリフィンドールの剣とバジリスクの牙」
「そうか！そうなんだ。だからリドルの日記も」

「でもだめね。そんなに簡単に手に入らない」

「ごろごろ転がってるわけじゃないし、君が取ってきてくれば」

「だめ。自分達でやって」

「何でさ？」

「そうしなけないから」

「そうね、私たちで成し遂げなければ」

「真の勇気を示せば大丈夫だよ」

「僕は、もう行くね」

「もう行っちゃうの？」

「いろいろしなきゃならない事があるからね。料理のレシピと、山菜の見分け方の本置いていくね」

僕は姿を消した。

番外編 新入生の悪夢

聞いてほしい事がある。

僕の生まれは魔法族。って言ってもピンとこないか、僕の家系は代々魔法使いなのだ。

魔法を信じてない人もいると思うけど、魔法は実在するんだ。だって、僕のお父さんもお母さんも、じいちゃんもばあちゃんも、果てはおじさんも、皆、杖を振るだけで、不可思議なことをやってのけるんだから。

ある日、例のあの人が復活したという噂が流れた。

どうやら、ぼけた爺さん。もといホグワーツ校長ダンブルドアが言っているらしい。

それからの毎日は地獄だった。僕のパパが、今日から自分を守るように特訓をすると言い出したのだ。毎日の過酷な修行の中8歳で、守護礼の呪文を使えたことは、最年少だと親は喜んだ。だけど、食事に毒が入っていたり、寝ている時に闇の魔法を打たれるのを修業というんだろうか？ママもママで、風呂に入っていくのが、ご飯を食べていようが、攻撃呪文をかけてくる。

最初の頃は、当たってしまったが、今では、無言呪文で防げるようになった。ちなみに、おはようの挨拶に、ステューピファイを打ってくるのは日常の光景だ。

そんな、不思議な毎日の中、一通の手紙が届いた。

ホグワーツ入学の手紙だ。

ありえない。ありえなさすぎる。僕が魔法を使えるから覚悟はしていた。けどとっても行きたくない。なぜなら、今、魔法界はヴォル・・・例のあの人に牛耳られてるからだ。

こんな時期にホグワーツに行きたい訳がない。行きたい奴なんて、闇系の子供か、自殺志願者だけだ。どちらでもない僕が行きたくないのは、皆共感してくれるだろう？

そういう理由から、手紙は親に見られる前に燃やした。

次の日、朝の眠さを晴らそうと外に出ると飾りであるメールボックスが、体積を無視して膨張していた。メールボックスから「助けてくれ・・・」という声が聞こえたから、開くと、体が吹っ飛ばされ、壁に打ち付けられるほどの勢いで顔を手紙が襲った。インセンドイオで燃やした。紙の勢いで顔中が切れたが、ママに治してもらい、治療呪文も教えられた。

次の日、昨日の炎の真ん中で笑っている、人の悪夢が災いしたのか、寝ぼけ眼で部屋のカーテンを開けた。外が見えなかった。目をこすつて、もう一度見るが、やはり外が見えなかった。アグアメンティで顔に水をかけたが、やはり外は見えなかった。良く見ると、覆っているのは、手紙だった。

家のカーテンじゅうを開けてみたが、全て手紙で覆われていた力の限り。ちなみに全部のカーテンを開けるのに20分かかった。

次の日、ドアを開けると目の前が真っ白になって、体に濁流のような圧力が流れた。パパとママがいるリビングに入る前に燃やした。パパとママはなんか焦げ臭いといっていたが、悪霊の火を使うのに失敗して髪の毛焦げちゃったと言っておいた。嫌がらせのように、大量の手紙が雨の様に降ってきた。

さすがに親にバレた。

とうとう僕は、死亡フラグ満載のホグワーツに入学する事になった。

新人生の悪夢2

パパ、ママ、逝ってきます」そう言ってホグワーツ特急に乗り込んだ。

パパとママには逆らえない。僕にできることは、列車占拠だけだ。乗って早々、機関室に乗り込んだ。

運転士は楽に倒せたが、ホグワーツ特急に乗っていた、教師陣によって取り押さえられた。

組み分け防止の儀式まで、眠らされていたようだ。

突然、頭の上で声がした。

「ふむ、君は、好奇心旺盛で、自分の信じる道を疑わず、誰よりもやさしい。だが、ホグワーツがくだらないと思っているね。うゝむ、難しい。だったら、ハッフルパフ！！！」

意味不明すぎて、寝落ちした。

眠りから覚めると「知らない天井だ」そう言って、起きてみると、周りは静かで、寝ているようだった。

お腹が鳴り、談話室を出て、親から教えられていた、調理場へ行った。しもべ妖精たちも寝ていて、起こすのもまずいから、明日の朝食になるであろう、パンとスープをいただいていた。

階段でムシャムシャと食事を取っていると足音が聞こえた。

「何をしておるのかね？」

粘つくくて、いかにも薬漬けな先生がいた。

「ご飯食べてます」

ムシャムシャ

「そうか。だが、この時間に談話室から出るのはどうだろうか？」

「餓死しても良いなら、出ませんが？」

ムシャムシャ

「では、私の部屋に来ると良い。それならば、良いだろう。今からb、トイレに行くので着いて来い」

「先生、トイレ怖いんですか？それともシヨタコンですか？この変態校長……！」

そういつた瞬間、青筋を立てて、無言呪文を放ってきた。それを、防ぎ、言った。

「……！！……？？」

「分かりましたよ。着いて行けば良いんでしょう？」

「……黙って着いて来い」

「むしゃむしゃ、むしゃむしゃ」

「口で言う必要わない」

「はいはい」

新入生の悪夢3（前書き）

間違っ
て消してしまっ
たので再投稿します。

新人生の悪夢3

今日も僕は夜更かしをして、厨房へ向かった。

どうも昼夜逆転になってしまっているみたい。うす汚い帽子のせいだ。どうして、僕が夜厨房に向かうかといえば、一つはお腹がすいたから。もう一つは、うるさいからだ。

毎晩、毎晩、ノイズ交じりの音声を垂れ流し、それに耳を傾ける、寮生達がああでもないこうでもないと凄くうるさいのだ。話の中心は、英雄ハリーさんと蛇の人だ。

・・・どうでもよくない？

蛇の人が政権とったからってどうだっというの？今までと変わらないよね。今までだって、独裁政治の魔法省だったんだよ。独裁裁判、独裁政治、独裁教育。大臣が何でも決めれたんだよ。蛇の人が革命を起こしても、政治体制変わってない。じゃあ、どっちでも良いでしょ。

魔法族以外を捕まえまくっているから良くない言ってるけど、それって、無実の人を捕まえるから駄目って事でしょ？

やっぱり変わってない。今までだって、魔法界の裁判に証拠も何もあつたものではなかったよね。シリウス・ブラックって確か証拠も何もなしで、捕まって投獄されてたんだよ。魔法で記憶改ざんなんて簡単にできるのに、それを証言に使うって何なの？え？秘密の守人？状況証拠でしょ。何の証明にもならないよ。魔法界マジでウザイ。

何で、僕が魔法界でこんな異端な考え方をするのかといえば、僕の近所にスクイブのエレンおばさんとニコラスさんっていう夫婦がいるんだけど、エレンおばさんは、マグルの子達の学校で先生をして

いるって言うてた。魔法が使えない子に何を教えるの？って聞いた
ら、人生をより楽しく生きる方法を教えてるんだって。内容は良く
分からないこと言われたんだけど、面白そうだから色々教えてもら
ったんだ。そうそう、その人の夫のニコラスさんが弁護士さんなん
だ。弁護士ってというのは、良く分からないけど、魔法界という偉い
人が裁判の時に付添い人になることとする仕事みたい。二人から色々
教えてもらった。

僕の家は、純潔の家系だから、魔法のことは色々、分かりすぎるく
らい教えてもらってるけど、マグルの子が教えてもらってることの
方が面白そうだった。だから、時間があればエレンおばさんの家に
行ってたんだ。エレンおばさんもニコラスおじさんも、息子さんが
今は結婚して違うところで住んでるけど、孫が一生できないって良
く分からないことを言うてたから、それで、僕の事を可愛がってく
れてるんだって。

パパもママもニコラス夫婦とは仲が良かった。

パパとママがマグルやスクイブを嫌わないのには、理由がある。

僕が生まれる時に、家の前で突然産気づいたんだって、そんな状態
だから、姿くらましも危なくてできなくて、パニックになってるか
ら助けを呼ぶことも忘れてたんだって、パパちよつと情けないよ。
それで、たまたまエレンおばさん家でイースターのお祝いをしてい
た、エレンおばさんたちと息子のウォルター夫婦が様子に気付いて
助けに来てくれたんだ。ウォルターさんの奥さんのアイリーンさん
が生殖医療だかなんかのお医者さんなんだって、ヒーラーのマグル
バージョンみたいなものらしい。

それで、僕は健康に生まれて来られたらしいんだ。そんなこんなで、
パパとママは、ニコラスさん一家に感謝してて、マグルやスクイブ
の事も偏見がなく見ているみたい。そのせいで、パパもママも不死
鳥の騎士団に参加してしまったわけだけど。エレンおばさん達はパ
パ達が保護してるらしい。

エレンおばさん達は好きだけど、バレたら、僕どうなるんだろう。

はあ。ため息が出る。

「どうかなさいましたか？」

「ドビーか。ちょっとね、親の都合で窮地に立たされるかもと思うとね・・・」

「どういふことでございましょうか？」

「なんでもないよ」

「ドビーめには分かりませんが、ドビーめにできることがあれば何なりとお申し付け下さい」

「ドビーは優しいね。うんそれじゃあ、お腹すいちゃったからご飯もらえるかな？」

「ドビーめが優しい？あなたも不思議な魔法使いなのですね」

「不思議ってどういふこと？」

「他の魔法使い様のほとんどはドビーめ達をそのように扱いません」

「ああ。そういうことね。僕のうちの屋敷しもべ妖精も、みんなこんな感じだよ」

「純潔の家系なのですか？」

「そうだよ。でも美味しいものを作る奴に悪い奴はいない。美味しいものを作ってくれるんだから感謝するのは当たりまえでしょ」

「ハリーポッター様のような方ですね」

「ハリーポッター？」

「ハリーポッター様も屋敷しもべ妖精に優しいのです」

「英雄も変わり者なのね。ドビーそれよりご飯をくれない？餓死しそうなんだけど」

「はい。ただいまお持ちします。」そう言って、ドビーはどこかに走っていった。

（ハリー・ポッターね。どういう人なんだろう。ダンブルドアの追悼式にもビビって仮病使って行かなか

ったから、新聞でしか知らないんだよね。潜伏中らしいけど、僕がらしたら意味わからないんだよね。死体偽装して逃げればいいのに、整形すればいいのに、何で革命返ししようとするの。人の迷惑考えてよね）

また、ため息が出る。

「お待たせいたしました」そういつて、ドビーはパスタ（タリアテツレ）にスープ、サラダにマッシュポテトミートボールを用意した。

「ドビー、すばらしい。ボロネーゼにミートボール。すばらしい組み合わせだよ。」

「光栄です」

「ドビー、聞きたいんだけどハリーポッターってどういう人？」

「すばらしい方でございます。ドビーめはハリーポッターを心から

崇拜しております」

「崇拜・・・」（蛇の人と変わらないじゃないか）

そんな、事を考えていると、ドビーは聞いてもいないのに、ハリーポッター6年の軌跡を語りだした。

3時間後・・・

「ハリーさん、パネエ・・・マジで恋する5秒前だった。それに、セドリックさん！！シリウスさん！！ダンブルドアさん！！！！親しくもないのに名前と呼んでごめんなさい。そして、最大の被害者ロックハート先生！！ホグワーツにさえ来なければ平和に暮らせたのに」

「パネエとはなんですか？ございますか？」

「凄いつていうことだよ。昔、近所の家の、兄ちゃんに教えてもらったんだ。今は確か、ひきこもりって仕事しながら映像の写る箱の中で勇者してるんだって」

「勇者でございますか。凄い方ですね。あつパネエですね」

「そろそろ、部屋に帰らなきゃな。ドビー、夜遅くまでありがとう。おやすみ」

ドビーはカッと目を見開き言った。

「もったいなきお言葉、おやすみなさいませ」

廊下を歩きながら、考えていた。

（ハリーさんは凄いけど、やっぱり僕には関係ないよ。どうせ、そのうちハリーさん守るために戦わなくちゃとかになるんでしょ。僕は不干涉でいこう）

「こらまで!」

「そつちだ!そつちに逃げろ」

（え?何?誰か来る。やばい隠れなきゃ）
すぐに、目くらまし呪文を使った。

「さて、ロングボトム!!!フィネガン!!!」

（うわー過^カ勞^ロ死兄弟に追われてるよ。確か彼らは7年生の先輩でハリー・ポッター擁護派の人だったよね）

「ええい！まだいるかもしれん！ホメナムレベリオ」
スウッと何かが身体を通り過ぎた。

「やはりいたか。出て来い！」

（どうしよう。今、やっつけても顔を見られたら・・・）

新入生の悪夢 4

7年生を追いかけていたアミかス兄弟により見つかりそうになってしまった。

ジリジリと杖を向けながら迫る兄弟。

（攻撃するより降参した方が得策かな。でも、この人たちは体罰で有名だからな。痛い嫌だな。倒した後、記憶操作をしようか）
そんな事を考えていた矢先、突然、赤い光線が放たれた。

「ステューピファイ」

「ぐあ！」

「ロングボトム、貴様、よくも！」

「こっちも忘れるな！コンフリンゴ！」
地面が爆発し、土煙で煙幕ができた。

「誰か知らないけど、こっちへ！」
先輩達は走り出した。

僕も、今は逃げなきゃいけないのでついて行った。

「はあはあ。ここまでくれば・・・シエーマス大丈夫か？」

「はあはあ。何とかなネビル。必要の部屋には入って来れないはずだ」

「誰か知らないけど、そろそろ姿見せたら」
ロングボトム先輩が言った。

しかたがないので、呪文をといた。

「一年生！！？」

「何で知ってるんですか？」

「ホグワーツ特急を占拠しようとしたり、組み分けの最中に寝る子どもなんて見たことないから。君、有名だよ」

「目、つけられてるんですか？」

「いろんな意味でね」

「聞かなかった事にします」

「ネビル、そんな事より、こいつを必要の部屋に入れたのまずくないか？」

「あつ、確かにまずいかな」

「記憶消すか？」

「ちょっと、まずくないか」

「こいつが、D Aの事を喋ったらどうするんだよ。」

「あの、必要の部屋？D A？って何の事ですか？」

「え？あつしまった」

「シェーマス、焦りすぎだよ」

「D Aってもしかして日刊預言者新聞に載ってたダンブルドアの私設武装組織ですか？ファッジ元魔法大臣が解体したんですよね」

「私設武装組織ではないけれど、今もハリーを守るために活動は続いているよ」

「不死鳥の騎士団の下部組織としてですか？」

「君はどうして、そんな事まで知っているの？」

「僕の親も不死鳥の騎士団の協力者ですから。目立った活動はしてませんけど」

「じゃあ、君もハリーの事を・・・」

「僕は不干涉ですよ」

「どうして？」

「だって危ないじゃないですか。僕は純潔ですから、どちらが勝ってもデメリットはないです。メリットもないですけど」

「君は、ヴォル」
「ネビル！」

「ああ、追跡されるんだったね。例のあの人が支配する世界になっても良いの？」

「良いも何も、もう支配されてるじゃないですか。それとも、一年生に死を覚悟して戦えって言うんですか？親が不死鳥の騎士団だから？」

「いや、そういうつもりはないんだ。ただ、この時代だから、身を守るすべは覚えた方が良くなつて、それがD Aの本来の目的だから」

「必要ないですよ。7年生くらいの身を守る力がありますから」

「ああ、目くらし呪文使ってたね。一年生にしてはすごいけど、あれだけじゃ」

お節介だなと思いつつ、無言呪文でパトロナスチャームを使った。

「無言呪文でパトロナスを！？」

「すげー」

「防衛と攻撃は、それなりにできますよ。他は微妙ですけど」

「他に何が出来る？」

「手の内あかすわけじゃないじゃないですか」

「それだけの事ができるなら、やっぱり」

「嫌です。不干渉です。しつこいと、僕が先輩方の記憶消しますよ」

フィネガンさんとロングボトムさんが身構えた。

（やばい、成り行きで言っちゃったけど、強気すぎたかな。親からお墨付きはもらったけど、DAってたしか、かなりの修羅場を潜り抜けてきたはず。蛇軍団と戦って生き残ってるんだったよね。特に、ロングボトムさんは新進気鋭のオーラが出てる）

「2対1だよ。本気でやるきか？」

「シェーマス、落ち着け。不干渉なんだから、ほつといても大丈夫だろ」

「何言ってるんだ！ピンチになったらそっちにつくって事だぞ」

（え？そんな事、言ったかな。メリットとかの話かな？うん、どうやって逃げよう）

「ほら、黙ってるって事は、そういうつもりなんだろ」

「何か良いなよ」

（ロングボトムさんも、戦う気になってる。一年生相手に七年生が2人で戦おうって、イジメだよな。よし、こうなったら）

「先輩！さっきの技、使わせてもらいます」

「「？」」

無言呪文で床を破戒し、煙幕を使った。
ガチャ バタン

「ネビル！逃げたぞ。扉だ」

「分かってる」

ロングボトムさんとシェーマスさんが部屋から出て行った。

（危なかった、足じゃさすがに、7年生には勝てないからな。それにしても、単純な事ほど引くかかるね。目が使えないから耳に頼る

しかないからね。扉の音だけで、部屋から出たと思ったんだろうね。それにしても、疲れたな、本気の戦いには気迫も必要なんだな。まあ、僕には関係ないさ。寮に帰って寝よう)

新人生の悪夢5（前書き）

まず、注意とおわびを申し上げます。

本編にはマクゴナガル先生を誹謗中傷する場面と魔法界が狂っていると主人公が持論を展開します。

もうひとつなのですが、本編に、番外編の主人公の名前を入れて話を進めていて、番外編の方に名前を出し忘れていました。番外編主人公名アレックス・クープです。どこかに、書き足しておきます。本当は、名前出さない事を何かの伏線にしようかと思ってましたが、本編ですごく絡んでいる為、無理でした。ご迷惑おかけします。

新人生の悪夢 5

「あー、眠い。今は、9時30分。早く起きたな。ティータイムでも行こうかな」

そう思つて、部屋にあるバスルームに行つて、目を覚まさせようとした。

ハツフルパフのバスルームは、そこそこ豪華で、マイペースなハツフルパフ生には良く合っている。脱衣所には、忘れ物用に、洗面用具からお風呂セットまで、全てが用意されている。

風呂から脱衣所に行くにはトンネルを通らなくちゃいけないで、そこでは、シャワーを全身に浴びせられる。

風呂は、先輩が言うには監督生の風呂よりは一回り小さいが設備はこちらのが優れているらしい。ジャグジー風呂や、香り風呂、牛乳風呂、多種多様な風呂がある。男子に必要なものかと思って思つけど、そこそこ騒ぎながら楽しんでいる。

僕が一番好きなのは、シャワーの一部に食べ物やドリンクが出るものがあるのだ。シャワーを捻ればオレンジジュースや、百見ビーンズ蛙チョコ、ファイヤーマシユマロなんかが出てくる。寮生のお気に入り、ファイヤーマシユマロをココアに入れて、内緒でブランデーを少し入れる事だ。

ヘルガ・ハツフルパフの時代は違法じゃなかったんだろうけど、今は違法だ。でも、今までの寮監達も、慣習として見逃しているそう。ただし、魔法で個人に合わせて、酔わない程度に調節してるらしい。ただ、お祝いの日、二日酔いにならない程度に出しているらしい。

もちろん、風呂で酒を飲むんだから、酒の回りが速くて悲惨で大変

になるらしい。

・・・何が大変なのかは聞かなかった事にしておいた。記憶に残したくない。教えてくれた先輩は通過儀礼さと謎の発言をしていた。

（お祝い日は風呂はみんなとは別に入ろう）
そう心に誓った。

着替えも終わり、ティータイムという名のブランチをとりに行った。

「いつも悪いね、ドビー」

「いえ、お役に立てて光栄です」
そういつて、揚げ物やパン、サンドイッチなどを置いた。

「ドビーはハリーポッターが好きなんだよね？」

「はい。あの方は、すばらしい方にございます」

「暗黒の時代を終わらせたから？」

「はじめてお会いなさるまではそうでした。ハリーポッター様は気高く慈悲深くそして、とても勇気に

あふれたかたなのでございます」

「それはそうだろうね。こんな時代に、頑張ってるんだから。ドビーはハリーポッターの事をヒーロー扱いする事が怖くないの？」

「ドビーめはハリーポッター様のためなら命などおしみません」

「そう・・・ドビー、もしハリーポッターが負けたら、僕の家で働きなよ。ホグワーツにいるよりは、ましな生活できるはずだから」

「もうしわけございません。ドビーめは仲間の屋敷しもべ妖精を裏切るわけにはいきません。それにハリーポッター様は負けません」
そういつて、ドビーは意見した事に対して、自分を罰しようと机に頭をぶつけようとした。僕は、それを止めて、言った。

「止めて。僕が悪かったよ。ごめんね、もう行くね」

悶々とした気持ちの中、廊下を歩いていると、ドンッと何かにぶつかった。

見上げると、笑顔で憤怒のオーラを出すスプラウト先生がいたのだ。

「こんなところで何をしているのかしら？」

「・・・お茶」

「え？まさかとは思いますが、あなたは、ホグワーツに来て以来、カリキュラムの半分しか授業に出ていませんけど、その時間、お茶を飲んですごしていたと？」

（間違いない。ここで、不用意な発言をしたら、マンドレイクの世話をさせるといわんばかりの危険なオーラが見える）

「いえ、その・・・」

「はい？」

逃げようそう思い立ち、走り出そうとした瞬間、バシッと音を立てて何かが身体に巻きついた。

「悪魔の罌？」

「正解です。ハッフルパフ5点減点。では、悪魔の罌の特徴は？」

「湿気と暗いところを好み、日の光に弱い。今は昼なんですけど、どうして、活動ができるんですか？」

「さてなぜでしょうね」

スプラウト先生をよく見ると、腕とロープの隙間から蔓が出ていた。（一部しか出てないから活動は可能だという事だろうか。それよりも、どうやって悪魔の罠を使ってるんだろう。身体に寄生させているのか。この光景どこかで見た事があるような、たしか、箱の中の勇者が見せてくれたアニメだったような気がする。あれは、種の状態で持っておき魔力を注ぎ込んで一気に成長や変形をさせるものだったな。たしかレイガン！！）↑違います

「種に魔力を注いで一気に育て上げたのでしょうか」

「意味が分かりませんね」

「もしかして、身体に巻きつけているんですか？」

「ふふ」

（先生怖い・・・それでそんなにふくよかな身体をしているんだろ
うか。実はナイスバディのモデル体形か！！！！）

「何か・・・」

「いえなんでもありません」

「では、授業に行きますよ」

そのまま、授業に連行された。

「カップを金に、カップを金に。あゝうゝ」

「まだやってるんですか、授業は終わりましたよ。何をうなってるんですか」

「この、昼でも活動する悪魔の罠に身体をイスに縛り付けられていてきついんですよ」

「逃げようとしなければ、きつくしまりませんよ」

「それはそうなんですけど。杖を握るだけで腕を締め上げるもんですから、腕も上げあげられないんですよ」

「それは、困りましたね。カップを金には変えられないようですね。」

では、この紙に呪文をかけて動くようにしてみてください」

「マグゴナガル先生、話し聞いてました？」

「甘やかさないでとスプラウト先生にきつく言われているので、頑張ってください」

僕はため息をつき、懇親の力で腕を上げ、何とか呪文をかけた。

「噂どおり見事ですね。ロングボトムのいっていたとおりですね。今は4年生の呪文です」

「先生、はめましたね」

「攻撃防御呪文に長けてると聞いたので、どのくらいの实力があるのか知りたかったので、金に変えるのはできないのに、攻撃に応用できるものはできるのですか？」

「一通りはできます。変身術だったら、ガーゴイル動かすのが限界ですが」

「そんな事まで・・・あれだけ過酷な訓練を受ければ当然ですね」

「？」

「ご両親から聞きました」

「そうですか。たしか先生も不死鳥の騎士団でしたね」

「不干涉だそうですね」

「はい」

「17歳未満なのでから当然ですね」

「不満そうですね」

「そんな事ありません。ただ、向こうにはつかないでほしいですね」

「今は、大丈夫ですよ」

「あなたは、ハリーポッターが敗れると思っているのですね」

「子どもに世界の命運を託す方が異常ですよ」

「異常？」

「不死鳥の騎士団の原動力ってハリーポッターあってこそですよ」

「そうですね」

「くだらないですね。ハリーポッターの為と言いながら、自分達の為じゃないですか。ハリーポッターが希望だ。ハリーポッターは英雄だ。そういつて、彼をその運命に追いやり、自分達は三食満足な食事し暖かいベットで寝る。子どもを犠牲にする事でしか存続できない希望なんて捨ててしまえばいいんですよ」

「ハリーポッターは、もう成人です」

「先生、本当にそう思ってるんですか？ついこの間まであなたの生徒であり、本来なら今年も学生であるべき学生が世界の命運を託された大人だと言っんですか？」

「それは・・・」

「僕、聞きましたよ。」

一年生の時、彼は、僕と同じ11歳で蛇の人に立ち向かった。たしか、あなたは、彼らが助けを求めた時に追い払ったそうですね。

2年生の時、彼はバジリスクと戦ったそうですね。たしか、その時も、彼はあなたに、自分を信じてほしいと言ったそうですね。あなたは、自分には判断できないと言ったそうですね。

3年生の時、シリウスブラック逃亡時、あなたは、迂闊にもハリーポッターが隠れているときに、シリウスブラックがジェームスポッターを密告したと言ったそうですね。

4年生の時、学生のほとんど全てがハリーポッターに疑いの目を向けていた時、あなたは、苦しんでいる彼に救いの手を差し出さぬばかりか、自分のせいでセドリックディゴリーが死んだと思っている彼の側にいてやらなかったそうですね。

5年生の時、蛇の人に操られそうになって、疑心暗鬼になっている彼に、あなたは優しく接しましたか？あなたが、彼の心の拠り所になれたかもしれないのに。

6年生の時、彼は数々の危険な任務をさせられたそうですね。そして閉心術、あなたも教える事ができるのでは？もしくは、彼に優しく諭す事ができたのでは？彼が蛇の人に蝕まれていくのを黙ってみてたんですか」

「私は生徒を特別扱いは・・・」

「してるじゃないですか！学校ぐるみで、世界ぐるみで、彼が戦うのが当然だと、それが彼の運命だと！！」

「それは・・・」

「7年生！！今年彼は、今まで異常の危機に晒されています。あなたは、今まで彼に何もしてこなかった。いや、あなたは彼に絶望しか与えていない。今年もあなたは何もしないんですか。今年も17歳を迎えてばかりの彼に泥水を飲むような生活をし、私達の希望の為にその運命を全うしろ、そして戦って死ね。そう、言うんですか？」

「ハリーポッターが死ぬことなど」

「死にますよ。学生の年齢で魔法省を支配した、強大な敵に立ち向かって、勝てるわけあるわけじゃないじゃないですか」

「ハッフルパフ30点げ・・・」

「減点しますか？良いですよ、僕はご立派なマグゴナガル先生に暴言を吐いたんですから。でも、間違いは認めませんよ。この世界は狂ってるんですから」

「あなたのご両親も含まれているのですよ」

「両親は好きですよ。でも、どうしてなんでしょうね、僕に戦いを教えたのわ。どうして不必要なほどの戦闘呪文と防御呪文、まるで僕が戦いに参加する事が決まっているように準備させたんでしょうか。・・・僕の命よりハリーポッターの方が大事って事ですよね」

マグゴナガル先生は、何も言わず、杖を振って僕の身体から悪魔の畏を外した。

「・・・行きなさい」

僕はすぐにその場を後にした。マグゴナガル先生の顔をうかがう事はできなかったが杖を持つ手は震えていた気がした。

（言いすぎた。絶対言いすぎた。ホグワーツデのイライラとハリーさん万歳なパパとママ。僕に魔法をこれだけ教えたって事は、やっぱり僕にも戦えって事なんだよね。でも当り散らす事じゃなかったな）

「聞こえていたぞ」

「スネイプ先生・・・」

「我輩が保護呪文をかけなければ、学校中に聞かれていたぞ」

「別に聞かれたって・・・」

「あれでは、ハリーポッター擁護派か闇側にしか聞こえないが」

「・・・そういえば、先生、死食い人でしたよね」

「そうだが」

「・・・あの」

「校長室に來い」

（やばい、どうしよう。連れて行かれる。これが、地獄への一本道
ってやつなの？ 干渉決めてたのに、それでもこうなっちゃうの）

「セブルス・スネイプ、その子をどうするきですか？」

そこには、凜と立つマグゴナガル先生の姿があった。

（マグゴナガル先生！！）

「教授に失礼な態度をとったのだ罰則を与えるのは当然だと思うが」

「まさか、カロリー兄弟に？」

「我輩が個人的に指導しようと思うのだが」

「その子連れて行かせるわけにはいきません」

（マグゴナガル先生――！！あんなに酷い事、言つたのに、教師の鑑か！！こんな先生に迷惑かけるわけにはいかないな・・・）

「何を言つて・・・」

「マクゴナガル先生、僕、大丈夫ですよ」

「何を言ってるんですか」

「校長室に行くだけですから、いざとなったら、ダンブルドアの肖像画もありますから、助けを呼びますよ」

「しかし！」

「先生、あなたは、あなたの信じている者のために生きてください。軌道に乗ってしまったのなら降ろす事はできません。それなら、軌道に乗せてしまった人達がそのために尽くすのがせめてもの罪滅ぼしです」

「・・・わかりました」

「・・・貴様達は何を言っているのだ。説教をするだけだ」

「「え？」」

「ははは・・・いざ行こう天の彼方、校長室へ」

「引つ張るな馬鹿者」

「恥ずかしいんですよ。いつくも早く、この場から立ち去らなけ

れば」

マグゴナガル先生のほうを見ると、先生もかなりの速さ、いや俊足とも言える競歩でその場を後にしていた。

新人生の悪夢5（後書き）

もつじき、本編と合流します。本編では、しばらく相変わらず意味不明に騒いだ後、すぐくシリアスになります。

本編でアレックスは主人公と攻守交替でツツコンです。

追伸

作者はマクゴナガル先生が一番好きなキャラクターです。

また、ハツフルパフ寮のバスルームは創作です。アナグマとかを寮のシンボルにする人は尋常ではないマイペースに違いがないと思っ
ているわけです。だから、寮の中はきつと大変な事になっているはず。
それにすら気がつかない、ハツフルパフ寮生なわけです。

妄想ですがハツフルパフ寮の人は気付かず大変な事をしているとい
うイメージがあります。

新人生の悪夢 6

「それで、貴様は、反省する気はあるのか？」

「ええ、もちろん。反省しています。ハリーさんなんて、糞虫、いや、英雄気取りの偽善者ですよ。まったく、もって、我が君にはかなうはずありません」

「・・・貴様は馬鹿か」

「なんですとー。あつ・・・いえいえ、世界を制するのは我が君の御一派ですよ。とってもすばらしい」

「もう、良い。今は、そんな事を問題にしてはいない。下らぬ、能弁はしないでよい。それよりも、貴様のハリーポッターに関する考えが聞きたいのだ」

「クサレ、ハリーさんのですか？・・・どういった事をお聞きしたいのでしょうか？スネイプ校長先生様」

「貴様が、いうと嫌味にしか聞こえんな。正直に答えなければ、退学に思うと思え」

「ええ！？退学にしてくれるんですか！！本当ですね！約束ですよ！！嘘じゃありませんよね！！！！？」

「貴様は、退学になりたいのか。それより、そんな、嬉しそうに詰め寄るな、校長として、どう考えてよいかわからぬ」

「いやいや、とつと退学にすれば良いんですよ」

「貴様の思い通りになどさせるか。いい加減に、ポッターについて話せ、でなければ、我が君に貴様のことを話すぞ」

「あつ！はい！わかりました。すぐに、ハリーポッターの事を話すので、それだけはご勘弁を！！」

「それで、貴様はハリーポッターが運命の上に死ぬといていたな・
・何を知っている？」

（何を知っている？どういう意味だろう。返答を間違えるわけにはいかない。僕に、不死鳥の騎士団が持っている情報を教えるといっているんだろうか・・しゃべる、しゃべらないにしても、関わりを持つ事になってしまうよ。ここは、探りを入れてみるしかないか）

「どうしたのだ。早く喋らぬか」

「僕に何を聞きたいのですか？セブルス・スネイプ校長？ハリーポッターの未来の話ですか？それとも、過去？彼の生まれる前のことをですか？ああ、たしかハリーポッターの両親は、あなたの御学友でしたね？」

（反応した！？両親の話か。）

「彼の父親のジェームズポッターはあなたの天敵、母親のリリーポッターはあなたとは仲が良かったそうですね？」

（え？何か、悲しそう。っていうか、顔に出すぎだろ。閉心術はどうした。ここは、コールドリーディングでも試すか）

「あなたは、リリーポッターに事を好きでしたね」

（これなら、友としても、愛としても、どっちともとれる）

「・・・」

（おい。愛か、愛なのか。っていうか今もか？もし、今もなら、たいたストーリーカーだよ。もう死んでんでしょ。その、一人息子のハリーポッターのことをしつこく聞いてくる。なおかつ、この人は、蛇の人の軍勢。そして、二重スパイとして活動していた。まさか・・・いや、まだ早計だ。確かめなくては）

「リリーポッターの息子であるハリーポッターは、今年中に死にますね」

「!!!?」

（うわー・・・もう、この人完璧にハリーさん側だよ）

「あなた、まさか・・・」

「な、なんだ」

（どうようしている。間違いない）

「あなたは、ハリーポッターをリリーポッターの代わりにしようとしている!!!」

「!!!」

（おい、マジか。マジなのか。マジで正太郎さんコンプレックスか。ハリーさん南ー無。この人に引き取られていたら、うん。間違いない、児童保護だね。っていうか、もう絶対あれだよ。好きな人を虐めなくなっちゃう精神で闇の軍勢に着いたんだよね。どんだけ、この人子どもなの。それで、ハリーさんピンチになったら、颯爽と駆けつけて何事もなかったように助太刀するんだろ。これで、ハリーポッターの心は我のものだとか思っちゃうんでしょ。中二、

中二、中二病だ。）

「貴様、閉心術を解け」

『何ですか』

「その目は何だ。人のことを薄目でできるだけ視認したくないと言わんばかりの態度は、貴様が何を考えているのか覗かせてもらおう」

『やめろ、変態』

「誰が変態だ」

『・・・』

無言で指を刺すと、変態さんが机の上にあるものを投げつけてくる。

（これだから、中二は・・・）

そのとき、突然、扉が開き、頭からマントを被った、黒ずくめの何者かがなだれ込んできた。

「急ぐんだ、行くぞ」

「ちょ、待って」

「時間がない！急ぐんだ」

「そんな、黒ずくめの人に言われても」

黒ずくめの人たちは、僕を肩に担ぐと、部屋から出て行った。

一方、部屋に残されたセブルス・スネイプは呟いた

「何故、ダンブルドアとの計画を知っているんだ。アレックス・ク
ープ、やつはどこまで知っているのだ」

「あの、降ろしてください」

(やばい、吐きそう)

「もうすぐだから」

僕は、どこかで聞いた声だなと思いながら、必死で嘔吐感と戦った。

「着いたぞ」

そういつて、肩から僕を下ろした。僕は、深呼吸をして嘔吐感を和らげた。

「危なかったな」

そう、僕に話しかけてくる、黒ずくめは、頭からマントを取った。

「ロングボトムさん。いったいどういことですか？」

「君が、スネイプに連れて行かれるのをジニーが見たんだ」

「ジニー先輩？」

「ジネブラ・ウィーズリーよ。ジニーって呼んでね」

「ルーナよ」

そう言って、二人は手を差し出した。

（女子だ。めんこい女子だ。綺麗すぎる。握手して良いのかな？ 手汗かいてるし、拭けば良いか）

「ネビルの言った通り、協力的じゃないのね」

二人は手を引いた。

（しまった、色々考えていたら、勘違いされた）

「あの、えっと」

「ああ、お礼は良いよ。君が闇側についたら、大変だし、ホグワーツの生徒を守る事もD Aの仕事だからね」

3人は、自慢げに頷いた。

（うさんくせー、やっぱり、顔は綺麗でも残念な人たちだ。先輩なんて言って損した。さんだ、さん、ウィーズリーさん、ラフグットさん。うん、決定だ）

「ありがとうございました。それでは、さようなら」

「ちょっと待って」

「まだ、何かあるんですか？」

「君に聞きたい事があるんだ」

「聞きたいこと？」

「校長室の合言葉を聞いたでしょ？それを教えてほしいの」

「校長室の合言葉ですか・・・」

「そう、お願い。合言葉がないと校長室に入れないの」

（ウィーズリーさん可愛いな。やっぱりお姉さんは良いです。実に良い。あれ、うん？校長室に入れない？）

「さっきは、どうやって入ったんですか？」

「「え？」」

「えって・・・さつき校長室に入ってきたじゃないですか」

「あー、どうしたんだっけ？」

「私が言っただよ」

「ルーナ？！何で合言葉知ってるんだ？」

「スネイプに連れて行かれるのつけてたから、その時、聞いたんだよ」

「あー、うん、そうか」

「そ、そうね。これで、校長室に入れるから、うん、大丈夫ね。それで、合言葉は何だったの？」

「リア充爆殺」

「どっという意味だ？」

「さあ、でもきつとスネイプの事だから、酷い言葉に決まっている

わ

「僕、もう帰りますね」

そう言つて、走つて、逃げ出した。

（意味・・・校長先生、かなり引きずつてゐるんだな。でも、それで、正太郎さんコンプレックスにはしられてもね。ハリーさん、残念無念また来週。勝つても負けても地獄です。っていうか誰が教えたんだろつ、教えた人ナイスです）

新入生の悪夢 6（後書き）

スネイプ先生はアレックスの知っている情報を勘違いしています。
スネイプ先生に合言葉を教えたのはもちろん、本編の主人公です。

新人生の悪夢7（前書き）

お知らせ

番外編の最下部に本編でアレックスと本編の主人公が会うまでのアレックス視点を乗せておきます。

本編はしばらく意味分らない事しているので、読み飛ばせるようにすしときます。一様、伏線があるのでできれば読んでほしいですが、本編がシリアスになるまでは、ついていけない人がいると思うので

新入生の悪夢7

「クープ様！クープ様！」

「どうしたのさドビー」

「今日は、特製のシチューを作りました！」

「え？本当に！？僕はシチューが大好きなんだ。何のシチュー？」

「ビーフシチューでございます」

「やった！一番好きなシチューだ。ドビー大好き」

そう言って、ドビーに抱きついた。

「クープ様！服が汚れてしまいます」

「良いの良いの。ドビーたち屋敷しもべ妖精が汚れてるのは、頑張
って仕事してるあかしなんだから、とっても綺麗な汚れなんだよ」

「綺麗な汚れでございますか？」

「そうだよ！とっても綺麗な汚れさ」

「嬉しゅうございます」

ドビーはそう言って、ピョンピョンと飛び跳ねた。

「ドビーがホグワーツにいてよかった。ドビーがいなかったら、心の支えがなくて、きっと寂しくてロングボトムさんに擦り寄っていたかもしれない」

そのとき、とても低い地の底からするような声がした。

「ハリー様の見方をしないものめ」

「誰？」

「クリーチャーめです」

「ああ、クリーチャーね。今はハリーさんLOVEになったんだってね」

「ハリー様は、ご主人様です。ハリー様に見方しないものめ」

「クープ様、怒らないであげてほしいのです。クリーチャーはハリーポッターにおつかええできなくて寂しいのでございます」

「怒らないよ。ご主人様が地べた這いずり回ってるのに、他の人に仕えなきゃいけないなんて、クリーチャーにとってみたら嫌な事だもんね」

「クリーチャーは、今日のシチューのジャガイモを切りました。ドビーと二人でシチューを作りました」

「うわ！嬉しいな。クリーチャー、ありがとう」

「ハリー様の敵がクリーチャーに抱きついてる」

「別に敵じゃないよ」

「見方か」

「それも違うけど」

「離れる」

「いちよう、僕も純潔なんだけどな」

「家名は」

「クープだよ」

「クープ家の者が。だが、魔法使いはこんな恥知らずな事をしてはならない」

「良いじゃないか。嬉しい時は嬉しいんだよ」

「恥知らずな魔法使い」

「ドビーめは嬉しゅうございました。クープ様、シチューがさめてしまいました。温めなおします」

「あつ、忘れてた。あれ？でも、そんなに冷めてないよ」

「クリーチャーめが温める」

そうって、クリーチャーは、どこかに行った。

「クリーチャーめも嬉しいのでございます」

（ツンデレ妖精も何か良いね）

シチューを待つ間、パンを食べて過ごした。

「ドビー、このパンは、ここで作っているの？」

「はい。そうでございます。お気に召しましたでしょうか？」

「とっても美味しいよ。ライ麦パンだね？」

「そうでございます」

「今度レシピを教えてください？」

「わかりました。レシピを書いておきます」

「おねがいね」

「クリーチャーめがシチューを温めた」

「ありがとう。クリーチャー」

笑顔で言つとクリーチャーはフンツとそっぽを向いた。

（本当にツンデレなのこれ？）

「シチュー・・・信じられないくらい美味しいんだけど」

「クリーチャーめがクープ様の為に6時間煮込みました」

「そんなに！？本当に嬉しいな。しもべ妖精の鏡だね」

「クリーチャーは、その間、野菜を切り続けた」

「ええ！？すごいな。疲れたでしょう。二人とも頭が下がるよ」

「魔法使いが頭を下げてはいけない」

「それにしてもほんとに美味しいな」

お代わりあるかな、そんな事を思っていたとき、突然、厨房の扉が開いた。

「やばかったな」

「ああ本当にな」

（どうして、フィネガンさんとロングボトムさんが入って来るんだ）

「あっ！お前は！！」

「どうもです」

「シェーマス、ほつときなよ。アレックスは多分大丈夫だよ」

「名前乗ってないはずなんですけど」

「有名だからね。姿を見せない実力者としてね」

「なんですかそれは？」

「授業にほとんど現れないのに、魔法レベルは7年生並みって噂になってるよ」

「誰が噂流してるんですか・・・」

「主にスプラウト先生とD Aのメンバーかな」

「D Aの人は諦めます。どうしてスプラウト先生が噂を流すんですか？」

「噂流さなきゃ、授業の成績を貰えないからじゃないかな。先生方が興味を持って、テストする順番決めてるらしいよ。ああ、変身術の評価は有名だよ」

「意味わからないですね」

「しょうがないでしょ。サボるんだから」

「あら、ネビルまた、怪我が増えたわね」

「ジニー、君も来たんだ」

（ウィーズリーさんまで来るとわ）

「怪我が増えてるね。階段で転んだの？」

（うわー、ラフグットさんもか）

「今日は、ここでD Aの集まりでもあるんですか？」

「D Aの集まりのために食べ物をもらいに来たんだよ」

「そうですか」

（あの、怪我は闇の魔術かな？何か痛そうだな）

「ああ、この怪我かい？アミカスカラーにやられたんだ。一年生に磔の呪をかけようとしていたからね。止めたんだよ」

（偽善者も行き過ぎると、ドMになるんだな）

「心配しなくて良いよ。名誉の勲章さ」

（うぜー）

「あれ、何食べてるんだ？」

（フィネガンさんが、見ればわかるだろうに）

「シチューですよ」

「とってもおいしそうね」

「良い匂いにするね」

「あー・・・食べますか？」

「食べようかみんな」

「ドビー・・・まだある？」

「はい、ございます」

「じゃあ、おねがい」

（僕もまだ、食べてる最中だしな。まあおいしいものを好きなやつに悪いやつはいないか）

しばらくするとドビーたちが食事を運んできた。

「美味しいね」

「ほんとに美味しい」

「しわしわずのスノーカックにも食べさせてあげたい」

「ルーナ、また、変な事いつてるよ」

（しわしわずのスノーカックって何だよ）

「痛で、しみるなー。味が良く分からないや」

（なんだと！こんなに美味しいものを食べて味がわからないだと。ああ、ドビーそんなに申し訳なさそうな顔しないでよ）

「大丈夫ネビル？」

「カラーがまだ探してるから、マダムポンプリーのところに行けないしな」

「血の味がするの？」

（血の味だと？このデミグラスソースに、そんな味を混ぜるな）

「あーしみるな。しみない食べ物にすればよかった」

「そうね、変えてもらおう？」

「それが良いよネビル」

「痛いのは我慢しちゃ駄目だよ」

「そうだね」

（なんだと！僕のために一生懸命作ってくれたものを横取りしておいてよくもぬけぬけと言ってくれる。それに、そんなこと言ったらドビーが自分を罰しちゃうじゃないか！）

「ロングボトムさん！！ドビーたちが6時間かけて一生懸命作ったものに、何てこと言うんですか。食への感謝は無いんですか」

「6時間!？」

「そうですね。一生懸命作ったんですよ」

「そんな事、言っただって痛いんだからしょうがないだろ」

「もう良いです。ロングボトムさん傷を見せてください」

つかつかと、ロングボトムさんの前まで行き言った。

「何言って」

「黙っててください。ほら、口開けて」

傷の状態とかけられた呪文を推測すると杖を取り出した。そして、無言呪文で呪文解除と傷を治す呪文を唱えた。

「終わりました」

「え？」

「もう痛くないはずですけど」

「本当だ」

「どうしてヒーラーの呪文ができるの？」

「練習したからですよウィースリーさん」

「そんなに簡単にできる事じゃないだろ」

今度はフィネガンさんが聞いてきた。

「母がヒーラーだったんですよ」

「それでもすごいね」

「やっぱり君、DAに入りなよ」

「お断りしたはずですよロングボトムさん」

「じゃあ、せめて呪文を覚えてくれない？教えてくれたら助かるんだもん」

「一年生に呪文習ってるようで、D Aなんて存続できるんですか？」

「なんだと！」

「落ち着いてシェーマス」

「ねえ、その呪文があると助かるんだけどな」

「図書館にでも行って、自分で調べてくださいよ。それに、応急処置くらいできないんですか？」

「D Aは戦闘が専門だからね」

「ハナハツカくらい持っていてくださいよ。怪我する事前提で戦闘しないでするんですか」

「言い返せないね・・・」

「それに、僕の呪文だって、ヒーラーの真似事ですから、応急的なものですよ」

「それでも良いんだ。教えてくれない？」

「しつこいですね。僕に教えるメリットが無いんですよ。何で教えなくちゃいけないんですか」

「教えてくれたら、君を守ってあげる」

「必要ありません」

（この人たち、ほんとに偽善者だな。こういう時には、身の安全を取引材料にするなんて。大体、パパとママから呪文以外にもベゾール石にマンドレイク、フェリックス・フェリシス、それにえら昆布とか色々持たされてるから必要ないんだよね）

「私達、あなたの事が心配なのよ」

「心配する必要ないですよ」

「あなたが、それなりにできる事はわかってるけど、それでも死食い人に狙われたら危ないわ」

「どうして、僕が死食い人に狙われるんですか」

「あなたの両親、不死鳥の騎士団でしょ？」

「それが？」

「あなた、人質にされるわよ」

「人質……」

「そうよ。私達も、もうすぐ潜伏するわ」

「そういえば、ネビルのおばあさんは、うまく逃げれたみたいね」

「おばあちゃんは、大丈夫だけど……」

「デーンも捕まったみたいだしね……」

「心配ね」

「ディーンならきつと大丈夫だよ」

「とつとと国外に逃げれば良かったんですよ」

「は？」

「国外に逃げれば良いって言ったんですよ。イギリスになんて潜伏しているから捕まるんですよ」

「なんだと！ディーンはハリーと共に戦う為に残ったんだぞ」

「また、ハリーさんですか。もう良いです。帰ります」

「お前、あんな事言っておいて唯で帰れると思うなよ」

「やめなよ、シェーマス、一年生だよ」

「ディーンを馬鹿にされて黙っていられるか。お前、この前みたいに逃げられると思うなよ」

「ハリーさんとかのために意味わかんない事してるからですよ。だから、みんな死ぬんですよ」

（全員が怒りの表情を見せた、頭に血が上ったやつとのが逃げやすいんだよ）

そう思って、ルーモスを一瞬だけ最大限発光させた。まばゆい光で相手は僕を見失う。

「オブスクーロ、フィニート」

（さすが、歴戦の猛者ウィーズリーさん。ならば！）

「エイビス、オパグノ。エイビス、エンゴーシオ、オパグノ」

（二段攻撃だ。どうする？）

「エクスパルソ」

（爆風で全部やったか。判断が早いな。それに、呪文対策は、ウィーズリーさんとラフグットさんが、攻撃はロングボトムさんとフィンガンさんを見た。陣形もチームワークも凄くうまいな。戦いなれてるんだな）

「インカーセラス、オブスクロー、エンゴーシオ、ジェミニオ」

（目隠しと縛りの二段だ、それに、巨大化したから、視認もできないはず。そしてつみだ。ジェミニオ、ディシリューション、プロテゴタラム）

「インセンディオ」

（二重できたか。だがもう遅い）

「もう観念したらどうなの？」

「・・・」

「何とか言え」

「・・・」

「何かおかしいんだもん」

「・・・」

「インカーセラス」

「・・・」

「やられた・・・」

「どういうことだよ」

「呪文を言ってたのは伏線で無言呪文で自分の分身を作って目くらましを使っただんだよ」

「頭の良い子ね」

「だけど、厨房の扉は開いてないだろ？まだ、近くにいますじゃないか」

「姿が見えない状態で私達に攻撃してこないのよ。姿を見失った時点で、私達の負けよ。4対1だったわけだしね」

「だけど、こんな卑怯な手で諦められるか」

「魔法の応用がうまいのね。本気の戦いだったらやられていたわ」

「今だって、杖をあげたら、魔法を放ってくるはずだもん。確実に一人はやられるよ」

「ああ、そうとう実践訓練をつんだんだろうな、僕らみたいな練習じゃなくて、本当の戦いの実戦形式の訓練だったんだろう」

「くそ！」

そう言って、部屋を出て行った。

「ふう、あぶなかった。ディフィンド」

「危険な賭けでしたね」

「黙っててくれてありがとうね」

「最初から、ご自分を消して逃げればよろしいものを、どうして、自分が分身のふりを？ 攻撃呪文だったら大変でした」

「まあね、いちようプロテゴ使ったからね。プロテゴの目く

らましかけたしね。なんかあの人たちだったら、自分の分身と入れ替わるだけだったらバレちゃいそうだったからさ。怪我させるような事はしないだろうって思ったなら何か悪戯したくなってね」

「あのように、恐ろしい賭け事は、もうおやめ下さい。アレックス様にご飯を作れなくなってしまいます」

「ありがとう。もうしないよ。それで、悪いんだけど、ドビー、僕をハッフルパフまで送ってくれない？外でまた会ったら今度は逃げられそうにないから。ほとほりが冷めるまで隠れてたいんだ」

「わかりました。唯ひとつ言っておきますがドビーめもハリーポッターのために命をかけます」

「悪かったよ。さっきのは逃げ出す為に仕方なくいったんだよ」

「そうでしょうとも。あれではまるで敵対派のようでしたから」

「悪かったって」

ポーンと音がして、ハッフルパフに向かった。

以下本編でアレックスと主人公が会おうまでです。

その日の夕食時、とても変なテンションの、わけの分らない人が現れた。

とても、残念な方としか説明できないけど、その人が出した、料理はとても美味しかった。

すき焼きという料理らしい。

変人さんは、どこの寮でも自由に出入りするらしい。どうも、生徒という扱いではないようだ。

どこの寮でも出入り自由なのに、ハッフルパフに出入りする事が多いようだ。

どうも、どの寮でも彼についていけないらしく、ハッフルパフの誰が来てもマイペースを貫くハッフルパフの寮風が格好の標的にされ、

押し付けられた。

ある朝、起きると何故だか、僕のベットで彼が寝ていて、少し焦った。とうとう、僕は落ちるところまで落ちたかと思ったが、彼からお酒の匂いがしたので、きっと酔って間違っただろうと思う事にした。

また、ある日の昼、何かと僕に話しかけてくるしつこいロングボトムさんをあしらっている、トイレからものすごい音と共に、彼が飛び出してきた。その後から、憤怒のオーラをまとった、ラフゲツトさんが出てきて次の一撃を放とうとこまえた。

ロングボトムさんが、それを止めて、名無しの変人さんに駆け寄ると、わが生涯に一片の悔い無しとすばらしい言葉を呟いた。ラッキースケベだと言っておいた。

その日の夜も、夜食を食べにキッチンに向かうと、名無しの変人が今だ横たわっていた。

死んでるんだろうか？そんな事を思っていると、何か良く分からない事を言いながら、置きだした。

新人生の悪夢7（後書き）

気付けば、こんな時間に、明日（今日）は7時に起きなければいけないのに・・・

電車で寝てしまう。

お知らせです

しばらくしたら、本編再開します。

あの、もしかしてアレックスの話のが良いんでしょうか？

アレックスの話になってから、見に来てくれる人が多くなったような気がするんですが・・・

本編の主人公も、そのうちどうにかなるので生暖かい目で見守ってくれると嬉しいんですが

まさか、アレックスが主人公じゃなくなったら、見に来なくなるとか・・・止めてくださいよ・・・まさかね・・・

アレックスと主人公のからみが多いので楽しんでいただければ良いんですが・・・

ホグワーツ強行編入 本編再開（前書き）

本編再開しました。

ホグワーツ強行編入 本編再開

ホグワーツに行こうと思い立ち、現在、ホグワーツにいます。

「貴様、何をしている」

「お茶飲んでるんだけど。飲む？緑茶」

「何故ここにいるのだ」

とか良いながらお茶飲んでる。

「暇だったから来たの」

「この子は誰かのセブルス？」

「あっ！生ダンプルドア」

「生ではないの、肖像画じゃし」

「この子は・・・なんだか良く分からない子です」

「その言い方ないでしょ！」

「フオフオフオ。君は敵か味方が・・・はたまた何かな？」

「どっちかというと味方かな。だけど、誰も死なせる気はないから」

「ヴォルデモートもかの？」

「・・・」

「よいよい。悩めば宜しい」

「スネピー！お願いがある」

「何だ？」

「しばらく、ここにおいて」

「ホグワーツにか！？」

「よろしい！」

「校長！！」

「もう校長は君じゃよスナイプ校長」

「わかりました。では、君を生徒にしよう」

「本日よりホグワーツで御世話になります。山田太郎です。もちろん偽名」

右から左へ教師人も、生徒もぽかんと口を開けている中、ヘラヘラと笑顔でいた。

「あゝ、うむ。この者に組み分け帽は不要だ。好きな時に好きな場所でする事になった。みな、存分に注意して対応するように」

わしの出番は！！！！というような古びて乾燥した燃えやすいような声が聞こえたが誰も聞かなかったことにして食事を続けた。

「へっへっい！！！！今日はグリフィンドール」

声と共に席にねじ込むと、どこかでドスンという音と共に「ぎゃーフォークが刺さったー」という声が聞こえ、ねじ込んだ席の隣の生徒はそちらを向くが「どうかした？」という声が聞こえたと共に自然と食事を取り始めた。

「イギリスの食事って、焼いただけって本当だったんだね。あゝ脂っこい！！！」

そう言いながら、少年は手を振って、何かをしだした。

少年が何かをしだすと廻りの数人が、興味深そうに頭を上げ何をしているのか見ようと体を乗り出した。

それに気付いた少年が

「うん？料理だよ。食べる？」

そう言って、テーブルの上に鍋を乗せた。

廻りの数人が見つめる中、少年は「すき焼きだよ」

そう言って、鍋から自分のさらに料理を取り分けた。

「やっぱ和食は美味しいな。食べたかったら食べて」

どうやら、各寮のテーブルにも同じ物があるようで、他の寮の生徒も突然現れた料理に不思議そうにしていた。ハッフルパフからすき焼きやバ旨！と叫ぶ声がしてどうやら安全らしいと思い、教師人を見ると、同じような鍋を食べているようなので、安心して他の生徒も手を出した。

ホグワーツ抵抗組み（前書き）

注意

この小説はルーナさんキャラ崩壊します。

ホグワーツ抵抗組み

食事が終わり、ホグワーツのあちらこちらを見上げながら堪能している時だった。

突然、手が伸びてきて、ヒュッと体を掴み引き寄せた。

「何がしたいんだ？」

顔を見ると傷だらけの少年がこちらを睨む様に見ていた。

「ネビルやめて」

見覚えのある顔があった。よく見ればジニーだった。

息につまり振りほどこうとしていると少女が行った。

「自分の知ってることなんて少ないんだもん。知ってることを、考
えるんだもん」

そう言って少女が少年の掴んでる手を握ると、呼吸ができるようにな
った。

「目的は？」

呼吸を整えながらネビルという少年に聞かれ、応えた。

「最善の未来の為」

「どついう意味？」

「ハリーを殺すつもりはないよ」

すこし考えてから、ネビルが応えた。

「ついてきて。君の真実を見分ける。それで良いだろう？ ジニー、ルーナ？」

そう言つて、少女達は同意した。

3人に伴つて歩いていくと、身の丈三つ分以上もある大きな扉の前で3人は止まり入った。

中に入ると、部屋の中央に大きな鏡が置いてあつた。

「これは？ みぞの鏡？」

「良く知ってるわね。もちろんどついうものは知ってるわよね？」

「自分の望みが写るんでしょ？」

「そうだよ。でもちょっと違うんだもん」

「何が？」

「みぞに鏡には、自分の一番幸せな姿が写るんだ。この、みぞの鏡は特殊で、廻りの人間にも何が写っているか見えるんだ」

「ふん。って事は、もしかしてここが必要の部屋？」

「そうよ。でもどうして分かったの？」

「みぞの鏡って、レア物でしょ？それが、生徒が簡単に入れるところに置いて置くわけないから、必要の部屋に願ったんじゃないのかなって思ったんだ」

そう言いながら、鏡の前に促がされた。鏡に映し出されるものが現れると、3人が小さな叫び声をあげた。

鏡には、まずヴォルデモートが写り、続いてはハリーが写った。

その横や後ろに、これまで、あってきた人皆が写り、皆が笑顔でいるのだ。

一番驚いたのが、ハリーとヴォルデモートが手をつないでいること

だった。

「どういうこと？」

「意味が分からないわ」

「これって、和平って事だと思っもん」

3人の目が小さな少年に集まった。

「そうだよ。これが、僕の幸せだよ」

黙ったままの3人を満面の笑みで見返すとネビルが口を開いた。

「なんていうか」

「予想外ね。敵か味方が見分けようとしたのに、全員救済いつて」

「素敵なことだもん。でも傲慢な神様気取りだもん」

「ルーナさん。天然毒舌ってすばらしいですね。もっとキャラ崩壊させてくださいよ。天然腹黒プリーズ」

「ぶっ殺されたいのかもん？」

笑顔で見詰め合う二人に若干引き気味にジニーが呟いた。

「二人ともキャラ違う・・・」

3人は気付いていなかったが、みぞの鏡には少年の姿はなかった。

ホグワーツ抵抗組み（後書き）

この先もルーナさんはキャラ崩壊します。

そして、ルーナさんには、もんって言わせとけばいいかという作者の怠惰があります。すみません。

おはようございます。そして、買い物へ

「おはようマグゴナガル先生」

「ええ、おはようございます。ところで、どうして朝起きたらあなたが私のベットの枕元でクッキーを食べているんですか？」

「ハッフルパフで起きたんですけど、お腹へって。だけど朝食には時間があるし、厨房はきつと朝食の準備で忙しいだろうから、そう
だマグゴナガル先生に部屋に行こうって」

「意味のわからない思考回路ですね」

「そうそう、ハリーたちは元気だったよ」

「！！？」

ガバツと布団が勢い良く持ち上げて驚愕の表情を見せた。

「え？どうしたの先生」

「ハリーポッターは今どこに？いえ、それより危険に巻き込まれて

「はいませんか？」

「危険？彼らはいつも危険だと思うけど、彼らはグリフィンドールだから」

「それもそうですね。元気ならとても良い知らせです」

「あー！！！！しまった！！！！」

「どうしたんですか！？ハリーポッター達に何かあったんですか！？」

「殺されるー！！」

「まさか！急いで不死鳥の騎士団に連絡を取らなくては」

「ご飯届ける約束を忘れてた！！！」

「はい？」

杖を振りかけた腕を止めマグゴナガルが声を出した。

「急いで届けなきゃ本気で殺される」

突然走り出す少年を見ながらマグゴナガルの思考回路は停止してしまった。

走り出した少年の先には窓があった。

「とうっ」

そう言っ、窓に向かってスーパーマンのごとく飛び窓を突き破った。

「痛いー！ガラスが突き刺さったー！！！」

そう言いながら落下していく少年その声がぷつりと止んだ。

マグゴナガルはしばらくのあいだ窓を見つめた後、杖をふり窓を直した。

「朝食でも食べ行くとしますか」

ドスン

「ぎりぎりセーフ」

フウツと額を拭う。

「君って子は何してるのかな」

「え？」

「あっリーマスさん。もしかして、その手に持っているのはパン？」

「ああそうだが。それより」

「お腹減った」

「・・・わかった。ご飯を食べようか」

「わーい」

「はあ。とりあえずテーブルから降りて」

こっちに移動した時にテーブルの上に着地した様だった

テーブルの上の朝食は形をなしていない。

「ああ！！！僕の朝食が！」

「君のじゃないよ。私の朝食だよ。また作れば良いさ」

「じゃあ僕も作る」

キッチンに向かったリーマスについて行った。

「君は今、何してるの？」

「卵割ってる」

「そうじゃなくて、今までどこにいたの？」

「さっきまでホグワーツにいたよ」

「そう・・・なんで？」

「戦うなら地理覚えておいたほうがいいかなって思って」

「戦う？」

「え？」

「うん？」

「リーマスさん。ベークン焦げるよ」

「ああ」

炒める手を再開しだす。

「それで？」

冷や汗だらだら少年に、笑顔でにっこりしてくるリーマス。

「ごめんなさい。言えない」

「まあ、分かってたよ。卵焼こうか」

「うん。ありがとう」

「ところで、君はこれからどうするんだい？」

「ハリーたちに届け物をする予定」

「居場所を知ってるのか！？」

「知ってるっていうか行けるよ」

「私も連れて行ってくれ」

「だめ」

「なぜだ？」

「そのうち会う時は来るよ」

「予言かい？」

「そんなところ。お腹すいた、早くご飯食べよ」

「そうだね」

朝食を食べ終えて、大型スーパーに買い物に來ていた。

「ここが、マグルのスーパーというものなのかい？」

「そうだよ」

「ずいぶんたくさんの物が並んでるんだね。それで何を買うんだい

「？」

「レトルト食品。売り場はあっちだね」

大きなスーパーは迷路のようで、迷ってしまいそうだった。

「あれ？売り場が分からなくなっちゃった。店員さん」

「どうしたの僕？お父さんと買い物？」

リーマスは東洋人親子だと間違われたのに、不思議に思いふと少年のほうを見ると姿がリーマスを小さくしたような容姿になっていた。

「え？どうなって」

「この方が良いかと思って、それにリーマスさんが買い物についてきてくれたからサービスサービス」

「まったく君という子は」

レトルト食品売り場に案内されながらリーマスは、自分の子どもの

ような容姿をした子どもに微笑ましさを感じずに入られなかった。

「これだこれだ。とりあえず、さ。うのご飯さんにカレーさん、粉末のコーンスープに」

どんどんとかごが一杯になっていき、次は冷凍食品だ、次はカップメンだ、次は真空パックだと言いながらカートが三つにもなってしまった。

レジに行くと店員も衝撃的な顔で見えて急いで他の店員も駆けつけた。

値段はリーマスの食費の一年分にはなるだろう値段になっていた。

衝撃を受けたリーマスだったが、それを事も無げにカードを渡して素通りしてしまった事にも驚いた。

「今のは？」

「え？うーんなんていうんだろう。銀行に入っているお金をカードを使って後払いするみたいなものかな」

「マグルの世界は不思議だね」

「そっくりそのまま返すよ」

「お腹すいたね。もうお昼の時間だ」

「ほんとだ。もうこんな時間だね。リーマスさんと一緒にいると時間が流れるの早いや」

「この近くに美味しい店があるんだ」

「へーマグルの店を知ってるなんて意外だね」

「・・・うん・・・まあね」

どうしたんだろうと思いつながら荷物に魔法をかけ、重さをなくし道を進むと、あったのは

マックドナルド・・・。

リーマスは何も言わず入り、店員に親しげに「やあ」と言い、なれた雰囲気注文を済ませた。それに続き注文を済ませると席に着いた。

リーマスはじつと射殺するものがあるかのように一転を見つめていた。ビームでも出るのかと感じたほどだ。

何を見ているのかと思えばゴミ箱を見ていて、不思議に思っていると突然立ち上がった。

「お客様、トレーはこちらです 氷はこちらに流してください」そう言っ
て席に戻ってきた。

「・・・リーマスさん？」

「聞かないでくれ」

バイトか？と小さな声で言うとリーマスはグウと一声上げ、ハンバーガーを口にした。

いざ、救いの食事を届けに・・・何故か瀕死の重態

「ちわゝ来来軒です。出前届けに参りました」

「・・・君か」

「暗!!..!どうしたのさ」

「ロンが出て行ってしまったんだ」

ハリーがそう言うのと、ハーマイオーニは俯いて啜り泣きを始めた。

「え？ホークラックスは封じたよね？」

「君が言っただろ、平常心を保てるかどうかだつて。まともなご飯が食べれてなくて、イライラしてたんだ。そこに漬け込まれたんだと思う」

「腹減ったから喧嘩したの？」

「まあ・・・」

「一足遅かったか」

そういつて、大量のレトルト食品をドサッと置いた。

「それは？」

「レトルト食品・・・」

ハリーのジト目でこちらを見る。ハーマイオニーは般若の形相をしている。

正直言つて怖い。

「あゝうん・・・ご、ごめんなさい」

秘儀、猛虎落地勢を披露し、その場を取り繕った。

持ってきたシチューの元を使い、料理を振舞った。言つまでもなく、たった一人で料理を作った。

「おいしいね」

「ロンも、これさえあれば一緒にいられたのに」

「うっ」

罪悪感をあおる手腕さすがですと言いたくなるくらい、上乘せダメージを浴びせてくるハーマイオーニーに見事と思い、心の中にメモしたことは、墓まで持っていこうと誓った。

「君、どうしてるの？」

「ホグワーツにいるよ」

二人が盛大に噴出した。

「何で？」

「そつだホグワーツに行こう的な？」

「何で疑問系！それに意味分らないよ」

「学校の皆はどうしてるの？」

「元気だよ」

「ジニーは？」

「元気だったよ」

「あなたよくホグワーツにいられるわね。スネイプが今校長でしょ？」

「説得したよ」

「説得って」

「何でもありすぎて、逆に引くわ」

「そうそう、これ」

「そういえば、リーマスさんにも会ったよ。こっちに来たがったよ」

「リーマスが？..どうして？」

「まあそのうち分かるよ。じゃあ僕は帰るからね。バイチャ」

少年が帰った後、二人がため息をついたのは言うまでもない。

現れた瞬間、盛大にぶん殴られた。

確か、ルーナの天然毒舌を味わおうとして、ルーナの魔力のところに飛んできたんだけど、あつ、空が回ってる、あんなところにダンブルドア先生がいる。やつほー。そんな事を思っているとルーナの声がした。

「何してるんだもん？」

「ルーナさんの魔力のところに飛んだんだ」

「ここどこだか分かるもん？」

周りを見回すと、壁、壁、壁、何かの個室？あれはトイレトパー、ルーナさんが個室に入ってる。

どこですかここは、僕はだれですか。

「女子トイレじゃ、ボケー！！！」

「ルーナさん口ちょ！！」口調と言いかけたところで、盛大に吹っ飛ばされました。ちなみに壁ぶち抜きました。

あっあんなところに、シリウスさんが、あっちにはハリーに激似のジエームズさんが二人がグッドのポーズを言った。

「そういう時は我が生涯に一片の悔い無しというんだよ」

突然、体が揺り動かされ、また現実に戻された。

「大丈夫？口から血でてるけど」

ネビルさんが顔を覗き込みながら、聞いてくる。

「わが生涯に一片の悔い無し」

ラッキースケベだ。そんな声が聞こえた気がした。

いざ、救いの食事を届けに・・・何故か瀕死の重態（後書き）

ルーナは、主人公が嫌いです。彼女って原作でもけっこう毒舌ですよ。ね。

今ホグワーツ決戦を書いている最中なんですが・・・

ハリーポッターたちって貝殻の家にどのくらいいたんですかね。一週間以上は滞在してますよね。グリンゴッツ襲撃からホグワーツ決戦までって、2日くらいですかね。

原作の記憶がおぼろげです。

あつ、ちよつとしたアイディアなんですけど、原作とはかけ離れた話って大丈夫ですか。ホグワーツで決戦のみ原作と一緒になんですけど・・・
・こんな、話を書いという今更ですが

残念な人と無念な人

アレックス登場

「知らない天井だ」

目を覚ますと医務室に・・・違った。床が冷たい。どうやら廊下に放置されているようだ。

「酷い。酷すぎる」

周りに赤いコーンが置かれていて、『このもの変態につき。動かすな。触れた者、処刑』
そう書かれていた。

某、動物が通っている小学校の、頬に靴下を詰めている熊の台詞が浮かんだが、言わないでおいた。

「何してるんですか？」

「何がですか？」

どうやら熊の動きだけはしていたらしい。突然声をかけられ、動揺したが無かった事にしておいた。

「誰？」

「一年生のアレックス・クープ」

「僕は」

「いいですよ、どうせ偽名なんでしょ？」

「もちろん」

「即答した・・・」

「アレックスこそ、こんなところで何してるの？」

「夜食を食べに厨房に」

「夜食って、そういえば暗いね。今何時なの？」

「夜中の一時です」

「一時！？本当にほっとかれたんだね・・・」

「そりゃ、ラッキースケベなんですから当然ですよ」

こいつだったか。そう思っていると、お腹がなった。

「名無しさんも一緒に行く?」

「うん行く」

「かるいな」

「何これ!?!おいしい!特にこのキャッセロールにコーニッシュパステイ、ベイクドビーンズ。極め付けにライスプディング」

「イギリスの食事も伝統料理は美味しいんですよ。単純な料理が多いですけど」

「素朴な味を極限まで高めると、これほどの味になるのか。良い勉強

強になった」

「嬉しいな、そんなに褒めてくれるなんて」

「うーん、これをのせてあれをかけると」

「どうしたんですか？」

「いや、キッパを僕の母国の料理と融合させたら、美味しいんじゃないかと思って」

「ふーん。作ってみてくださいよ」

そう言われて、鍋を借りて出汁をとり始める。

この繊細な作業は、イギリス料理に慣れた屋敷しもべ妖精ではできないだろうと思った。

「それにしても、こんな時間に屋敷しもべ妖精はよく起きてるね」

「ああ。夜中に僕が来るって知ってるから交代で準備してるみたいですよ。そっだよな？」

「はい！！クープ様のために準備しております！！！」

「いつもありがとう」

そういつてアレックスは、屋敷しもべ妖精をなせた。

「身に余る光栄です」

そう言つて高揚に満ちた面持ちでふらふらと去っていった。

「アレックスは変わつてゐるって言われるだろう？」

「よく言われますね。でも、美味しいご飯を作ってくれる屋敷しもべ妖精に、礼を尽くすのは当たり前ですよ？食への感謝です」

クックと笑いながら、出汁を火から外し、魔法で出した茶碗に持ったご飯とその上にのったキツパーの上にかけた。

アレックスは、口に運び開口一番。

「旨い……！」

そう言つた。

バクバク食べる姿を見ながら、今度はひつまぶしでも食べさせてやろうと思った。

箱の中の勇者は大変な者を教えていきました（前書き）

休日の夜なので更新します。

箱の中の勇者は大変な者を教えていきました

良い朝だ。そう思ってから起きると部屋には誰もいなかった。今日はハッフルパフで寝たはずだ。時間を見ると日が昇っていることから昼の2時だった。

・・・寝すぎた。

そう思い階下へ降りた。何人ががいたが、一瞬目を向け逸らした。

昼食も無いだろうと、厨房へ向かった。階段を下りていると、緊迫した声が聞こえた。

「テメー待ちやがれ」

「待てと言われて待つやついますか」

アレックスとシェーマスが追いかけてここをしていた。仲が良いなと思ってみていると、どうも様子が違う。

アレックスが妨害呪文を後ろに向けて弾幕を張りながら走っているのだ。

よくまあ、あれだけ無言呪文を打てるなと思っていると、こちらに向かってきた。

やあ、とっ手を上げると、アレックスはすさまじい剣幕でこちらに杖を向けた。

「名無しさんですか、先手必勝です」

問答無用とばかりに迫ってくるアレックスの攻撃呪文を避け、こちらにも、アレックスから逃げる為に自転車をだし逃げ出した。

「アレックス！どうして追ってくるの」

「知りませんよ。名無しさんが、僕の前を走っているからですよ」

「なんだ、その横暴な理由は！それに、いい加減、呪文打つのやめて」

「僕、もう打ってませんよ」

「「じゃあ・・・」」

後ろを振り向くと、シェーマスを先等にコリンクリービーやネビルを始めとした、DAのメンバーが呪文を打ちながら追ってきていた。しかも、男ばっか。なぜか一番後ろにスネイプがいた。

アレックスは恐れをなして、自転車の後ろに飛び乗った。

「アレックス、何したの？」

「DAの人が話してるのを聞いちゃって、今度校長の部屋に……
っうわ」

「それ以上、しゃべってみる唯じゃおかないぞ」

「シェーマスさん、言いませんってば」

「それで、追われてるの」

「それだけじゃないと思います」

「ハリーさん、ハリーさん、言ってるので、ただならぬ関係だと言
ったら、ブチギレちゃって、やっぱり年頃の男子が寮でいたら当然
の成り行きですよって言ったら、追われる事になりました」

「それは、怒るよ。っていうか意味わかってるの？」

「男子が仲良すぎたら、そう言えって言われたんですけど」

「誰に!？」

「箱の中の勇者に」

「意味わからない。それで、校長が追ってきてる理由は？」

「えゝわかんないです。スネイプ校長先生の事なんて言っていないですよ」

「本当に？」

「ハリーさんのことを狙ってるのは、あなた達だけじゃないですよ。なんたって、シヨタコンほいほいですからねって言っただけですよ」

「本当に意味わかってないんだよね・・・」

「子どもを愛するのが好きな人のことですよね。時には金と権力を駆使してでも自分のものにするんですよね？」

「それも、箱の中の勇者に？」

「見つけたら、心を開かずジト目をしろって言われました」

「その人どういうひと？」

「ニートっていう、仕事しながら、ひきこもりっていう活動をして、箱の中で勇者として世界の平和を守ってるらしいですよ」

「そ、そう」

「あっそれが、本場のジト目ですね！僕も練習しなくてはいけませんね。コツってあるんですか？」

「この世で最も醜悪な者を想像して、軽蔑する心を持って見るんだよ」

アレックスは試行錯誤しながら練習しているようだった。

「できてます？」

「上手い上手い。いまは何を想像しているの？」

「ハッフルパフの男子風呂です」

「うん・・・そっか・・・気になるけど聞かないでおくよ」

「それにしても、後ろの人たちしつこいですね」

「そうだね。あんなに、焦ったら本当のことみたいだね」

「本当なんじゃないですか」

「・・・ジ・・・」

二人で後ろを見た瞬間、呪文の数が倍増した。呪文は主に、オブジェクトだったが、あたれば、記憶が全て消失するレベルのものが多かった。何故だか、明らかにさっきより人数が増えている上に女子が多数いた。たまに、レジリメンズが飛んできている気がする、話の中身を知りたい人がいるらしい、そして、何だかはあはあという変な息遣いが聞こえるが気にしては負けだ。

「何とか逃げ切ったね」

「そうですね」

「お腹減ったな。そう言えば起きてから何も食べていない」

「ずっと寝てたんですか？」

「良く知ってるね」

「え、だって名無しさんがいつも寝ているベッドは僕のベッドですから」

「そうだったの？」

「そうですね。いつも、起きると勝手に僕のベッドにいるんですから、とうとう落ちるところまで落ちたかと思いましたよ」

「やけに広いベットだとは思っていたけど、ダブルだったか」

「ああ、あれは、僕が空間を拡張させたんですよ」

「アレックスはずいぶん力が強そうだね」

「過酷な修行をしたので」

「それだけじゃなさそうだけどね」

「どういうことですか？」

「なんでもないよ。それより、お腹がすいたからご飯を食べに行こうよ」

「そうですね。僕も運動したからお腹がすきました」

「アレックス様、・・・それから」

「この人は名無しさんで良いよ」

「はい、名無し様」

困った顔をした、ドビーにアレックスが助け舟を出した。

「ドビー、シチューある？」

「ございます。今日はビーフストロガノフをご用意しました」

「ドビーは本当に料理の名人だね」

「ありがとうございます」

ドビーはとっても嬉しそうに言った。

「じゃあ、僕もそれをもらえる？」

「はい、わかりました」

ドビーは走って厨房の奥へ行き、料理を運んできた。

「うわー、美味しそう」

「本当だ、良い匂いだね」

テーブルにすわり食事をしだすと、アレックスが言った。

「日本にもビーフストロガノフあるんですか？」

「日本人は何でも食べるからね。日本の場合は、ほとんど、ご飯にかけてあるけどね」

「ご飯にですか？カレーアンドライスみたいですね」

「そんな感じだよ」

「僕は今みたいにマッシュポテトと食べるのが好きですね」

「こついう、味付けなら、マッシュポテトのが美味しいかな」

「味違うんですか？」

「日本人好みにしてあるからね」

「日本人はアレンジ上手なんですね。今度、日本料理食べさせてくださいよ」

「良いよ」

「あれ、あのミシュランに載ってたやつ食べさせてください」

「ミシュランに載ってたやつ？」

「コース料理のやつですよ」

「ああ、種類が色々あるけど、任せといてよ」

「コースに種類があるんですか？」

「目的が違つんだよ」

「目的って食べる事じゃないんですか？」

「そうなんだけどね。専門職でもない限り、違いなんて分からないから良いよね」

「おいしければ、何でも良いですよ」

「ああいう料理も美味しいけど、田舎料理や家庭料理も結構美味しいよ」

「名無しさんのお勧めはなんですか？」

「うーん、猪鍋、肉じゃが、饅頭かな」

「どんな料理なんですか」

「猪鍋は字のとおりだけど、肉じゃがはビーフシチューを基に作られた日本料理。饅頭は、そうだな、使われているのがジャガイモじゃないけどマッシュポテトを丸くして、汁をかけたものかな」

「ビーフシチュー日本バージョン、肉じゃが食べてみたいです」

「ビーフシチューとは大分違うんだけどね」

「そうなんですか？」

「デミグラスソースじゃないしね。醤油だから」

「ソイソースですか。あれって、カナッペとかブルスケッタに使うと美味しいんですよ。スモークサーモンとチーズのカナッペにソイソースが最高です」

「それは、醤油と合いそうだね。話変わるけど、アレックスの家って金持ち？」

「え？どうなんでしょう。普通なんじゃないですか。どうしてですか？」

「その年で、食べ物をよく知ってるなと思ってね」

「他家との交流は多いですね。両親は旅行も好きですから、旅先でご飯も食べますしね」

「やっぱ、金持ちなんだね」

「マルフォイ家以下ウィーズリー家以上ですよ」

「極端すぎて分からないよ」

「まあ良いじゃないですか。ご飯が食べれば良いんですよ」

「好きだねー。ご飯が食べれば、誰が魔法階を支配しても良いってこと？」

「そうですよ。食こそ正義です」

「変な考え方だね」

「名無しさん程じゃないですよ」

「ひどいな。そういえば、不干渉なのに、僕と仲良くして良いの？」

「名無しさんは、強いから良いんですよ」

「弱かったら仲良くしないの？」

「それは、もちろん。それに、名無しさんは、ハリーさんLOVE
だけど、他の人とは違う感じがしますし」

「そうだね」

「名無しさんは、ハリーさんに勝ってほしいんですね？」

「うん。勝つとか負けるとかって事ではないんだけどね」

「どっいつ事ですか？」

「みんなで仲良くできればいいなって思ってる」

「何か偽善者みたいですね」

「そうかもね。でも、そうすれば、みんなでご飯だって食べられる
よ」

「そのために、自分の身体を傷つけても人を助けるんですか？」

「よく知ってるね」

「両親が不死鳥の騎士団なんですよ」

「そういう事か。そうだね、みんなが楽しく生きるために頑張ってるよ」

「ホグワーツとかでバーベキューできたら良いですね」

「それ楽しそうだね」

「できたら良いですね。バーベキューだけは参加させてもらいます」

「なんかズルイな」

「ご飯は、みんなで食べた方が美味しいんですよ」

「まったく。僕に呆れさせるとは、なかなかの実力だね」

「今度、お菓子あげますから」

「お菓子で釣るとは、いくつだと思ってるの？」

「年齢不詳ですよね？」

「不詳じゃない。15歳だよ」

「日本人って、凄いですね」

「二・・・ニホンジンナンテダイタイコンナモノサ」

（にほんの皆さんごめんなさい）

「まあ年齢知ってましたけど」

「そんな意味のわからない、嘘をつくんじゃない！」

「はは、名無しさん面白い人ですね」

「年上をからかうんじゃない」

「・・・」

「どうしたの？」

「こついつ時も、ただならぬ関係なんですかね」

「そういう事言うな！」

「ベッドも共にしたわけですし」

「変な言い方しないで！」

「ハッフルパフの伝統」

「止める！そんなわけの分からん伝統など存在しない」

「え？だって先輩が、お祝いの日にはお風呂でお風呂でお酒飲んで
××××××××××するらしいですよ」

「聞こえなかったんだけど！え？何か規制入ったよ」

（作者さんアザーツす）

（良いつて事よ）

「なにボーっとしてるんですか？」

「とにかく、変な言い方しないで」

「勝手にベッドに入ってくるの名無しさんですよ」

「わかった、もう入らないから、自分のベッド出して寝るから」

「別に入ってきてても良いんだからね」

「なんでそこでシンデレレ」

「男子にはこうしろって箱の中の勇者さんが」

「そいつ絶対一発殴る」

「殴っちゃ駄目ですよ。勇者さんなんですから」

そうして、二人の一日は終わった。

その夜、アレックスのベッドに名無しの姿はなかった。アレックスは、久しぶりの一人のベットにホッとしたが同時に寂しさも感じたとか感じてないとか

一方、別の部屋で困惑の声が上がった。

「何故、我輩のベッドにこやつが。まさか、我輩はクープの言ったとおり……」

そんな声が上がったとか上がってないとか

その後、少年は薬臭いし加齢臭が臭いという理由で別のベットへ向かった。その途中、飲酒をし続けたため、また誰かの被害がでたらしい。

箱の中の勇者は大変な者を教えていきました（後書き）

まず、BL小説じゃないですからね！うほっな展開はありません。

アレックスと主人公の関係が薄かったので話を増やしました。

これで、仲良くなったって納得できますか？

ハリーポッターって原作でも仲良くなるのが速すぎるって気がするんですよ。

ハリーは明らかに幼少期を引きずってるからでしょうが、他の人も、早いような気がするんですよ。

シリウスとか、さっきまで殺人鬼扱いしといて、もう仲良くなるの
かっと思ってたんですよ。

吊橋効果なんでしょうか。

みその鏡

「貴様はこんなところでなにをしている？」

「何をとは？座っているだけだけど？」

「そういうことを聞いているんじゃない」

「何を聞いているの？」

「今は闇の魔術に対する防衛術の時間だ！それを教えるのは我ら力
口ー兄弟だ。貴様は我が君を裏切ったであろう」

「いや、アミカスは、マグル学でしょ？」

「黙れ！貴様の対策の為だ」

「そうだ！我が君からのご命令で貴様には関わるなと言われている
んだ」

「そっか。それで何が言いたいのか？」

「「出て行け！」」

「嫌。禁じられた呪文使うんでしょ？そんな面白そうな授業出ないわけにいかないじゃない」

「我が君は偉大だ！貴様の行動を予見してある物を我らに与えてくださった」

「？」

「くられ！」

そういつて懷から取り出した、手紙を開け放ったのだ。

「ここであつたが百年目！我が恨みを貴様に身に刻むがいい」

吼えメール特殊な呪文がかけてあつたのか、そこらじゅうに呪文が放たれた。

「パピー！！！！ちょっと待ってよ！！いきなり呪文の応酬って卑怯すぎでしょ！！ってか闇の呪文連発すぎ！！！！」

「貴様のような餓鬼は教育せねば」

「死ぬ！死ぬ！やばいよ！！！」

そう言いながら、避けては、呪文を返し、呪文を放っては相殺されながらのバトルは続いた。

後輩には結界を張っておき、見学時間にさせた。

やっとの事で反撃して、手紙を消失させた。

「はあ、疲れた」

「大丈夫ですか？」

「アレックスか。すまないけど連れ出さしてくれ」

「しょうがないですね。僕も、お腹すいたのでキッチンに行きまし
よう」

「シチューある？」

「はい、ございます」

「じゃあ、それおねがい」

「僕はビスケットと紅茶でおねがい」

「はい、かしこまりました。クープ様、山田太郎もちろん偽名様」
しもべ妖精が走っていった。

「・・・うん」

「めんどくさい事するからですよ」

「自業自得だけどさ」

「名無しさんは、どうしてめんどくさい事に、首を突っ込むんですか？」

「は？」

「いや、あっちへバタバタこっちへバタバタ。僕の親、不死鳥の騎士団の協力者なんで、情報は入ってくるんですよ」

「何で。うーん、成り行きかな」

「成り行きですか」

「ふーん。君は成り行きに身を任せられないみたいだね」

「え？何で分かるんですか？」

「魂が振り回されてるからね。不死鳥の騎士団に入った親が関係してるのかな」

「閉心術してるんですけど」

「それとは、あまり関係ないかな。アレックスの魂の端っこを掴んでるようなもんだからね」

「何か怖いですね」

「まあ、アレックスがどうするかは自由だよ。全ては終わりに向かってるんだから」

「良く分らないですね」

「あつ、シチュー来たみたいだよ」

「やった！ビーフシチューだ」

「僕のは・・・ビスケットじゃなくて、クリームティ。むしろアフタヌーンティになってる」

「屋敷しもべは、サービス精神旺盛だからね」

アレックスがありがとう、とっても美味しいよと言うと、屋敷しも

べ妖精は目を輝かせていた。

「そういえば、この前変な物を見つけたんですよ」

「変な物？」

「何か、鏡っぽいものなんですけど、何も映らないんですよ」

「みぞの鏡かな。それで、何も写らないって？」

「何かむかついたんで、呪文打ち込んだんですよ。そしたら、呪文が吸い込まれて、鏡に大量の呪文が渦巻いてるような感じで映し出されたんです」

「アレックスも凄い事するね。それで、大量の呪文ね」

「なんか、呪文の光線みたいなものが混ざり合ってるっていうか」

「一度、見てみなきゃわかんないね。必要の部屋だよな？」

「はい」

「そういえば、何でそんな事を僕に？」

「先生たちに言ったら、めんどくさそうですし、D Aの人に言っ
て分かるようなものじゃないかなって思
つて。あの人たち意外だとあなたが一番詳しくそうだなって思ったか
らですよ」

「今の状況だったら、先生達も切羽詰ってるだろうからね」

「ご飯も終わったし、行ってみようか」

「はい。あっスコーン食べて良いですか？」

「・・・まだ、食べるのか」

「え？食べちゃ駄目ですか？」

「・・・どうぞ食べて」

「どうですか」

「たしかに、何も写らなくなってるね」

「変ですよね」

「それで、アレックスは、何の呪文使ったの？」

「悪霊の火です」

「・・・ああ・・・そうか。っていつか使えるんだ」

「まあ。そこそこですけど」

「そこそこで、ぶっ放したんだ」

「もう良いじゃないですか」

そう言って、アレックスは、みぞの鏡に向けて呪文を放った。鏡は

呪文を余すところなく飲み込み、呪文は渦を巻くように、他の今も渦を巻いている呪文の中に飲み込まれていった。

「これ、なんだろうね」

「呪文を封じてるんですかね」

「封じてどうするんだろう」

「どうするんでしょうね。でも、こんなに中に入ってる呪文って危なくないですか？もしこれを、開放する方法があったら、蛇の人、一撃で倒せそうじゃないですか」

「不干涉はどうしたのさ」

「不干涉ですよ。これって、不死鳥に騎士団にも、蛇の人にも、渡れば決定打になりますよね」

「そうだね。それにしても、これだけ強力なものを、どうして、生徒の手の届くところに置いておいたんだろう」

「置いておいたわけじゃないんじゃないですか。ここ、必要の部屋

ですし」

「それは、そうだけど、みぞの鏡はダンブルドアが管理していたはずだからね」

「考えてもしようがないですよ。今、目の前にみぞの鏡があるんですから、ただそれだけですよ」

「冷めてるね」

「こんな時代ですからね」

「僕も呪文打ってみようかな」

「会話の流れぶつつりですね」

呪文を放つと、普通とはいえない現象が起こった。

「うわ！何だこれ、魔力を吸い取っていく」

「え？やばくないですか？」

次の瞬間、魔力の吸い取りが止まり、今度は引力のような力で鏡のほうへ身体を引き寄せ始めた。

「これ！引つ張られる」

「何がですか？」

「アレックスは引つ張られないのかよ！！」

鏡のふちに手を置いて力の限り、抵抗していたが、足は鏡の中に吸い込まれていた。あまりの引力に腕を話してしまい、何かを掴もうとあたりを探った。

「ちょっと、掴まないでくださいよ」

「冷たすぎでしょ！同じ釜の飯を食った仲でしょ？」

「知りませんよ。それより、僕は引つ張られてないんですから巻き込まないで下さい。心中はごめんです」

「君たち何してるんだ！」

「ロングボトムさん！いえ、ネビル先輩、助けてください道連れに
されそうなんです」

「何が起こっているの」

ネビルと共に入ってきた、ジーやルーナが戸惑っていた。

「早く助けなきゃ！」

そういつて、3人がアレックスの手をつかむが、その瞬間、5人は
今までよりも強い引力に引かれて鏡の中に吸い込まれた。

残されたのは、静寂だけだった。

みぞの鏡（後書き）

DAはいつから、必要の部屋の部屋に籠ってたんですかね。

そういえば、シェーマスって映画だと大活躍ですけど、原作だとあまり印象にないんですね。作者の印象は、映画で他の人の顔がえらく成長するのに、シェーマスだけ、顔変わらないって感じですね。あれも、童顔なんですかね。ロンも童顔ですね。

最奥の部屋

「いったー、どうなってるの」

周りには、4人が倒れている。

「アレックス起きて、今日のご飯はステーキだよ」

「う・・・ステーキよりシチューが良い」

「さっき食べただろ」

「ってよくも道連れにしてくれましたね」

「しょうがないだろ、緊急事態だったんだから。それより、他の人を起こすの手伝ってよ」

不服そうにアレックスはエネベールトを唱えていった。

「どこどこ？」

「部屋だもん」

「鏡の中の部屋？」

「あの壁なんか書いてあるよ」

ホグワーツ、我らが守りし学び舎に危機が迫り来る。
我らの死した後、危機はどうやって乗り越える
願え、願我らの学び舎を犯せしものに滅びを
さすれば、古の守り与えられん

「この、我らって誰かな？」

「誰だろう」

「もう死んでる人って事だよな」

「創設者じゃないですか」

「私もそう思うんだ」

「古の守りって何だろう？」

「わからないけど、かなり強力なものじゃないかな」

「創設者、お墨付きだからね」

「これに書いてある通りに願ったら、どうなるのかな？」

「願ってみれば良いんじゃないかな」

そう言った瞬間、新たな字が浮かび上がった。

学び舎を守りし勇敢なものたちよ、その願いのために覚悟を示せ。
試練の道を行くがいい。道は開かれた。

ゴゴツという音と共に壁が開き奥へと続く道が現れた。道は5つに

別れ、それぞれに名前が浮かび上がっていた。

勇気の道	知性の道	やさしさの道	狡猾の道
強さの道			

「これって、寮の言葉よね？」

「でも強さの道って何かな？」

「一番危なそうだもん」

「これは、寮どおりに進めって事かな？」

「スリザリンはどうするの？」

「スリザリンに、信頼できるやつっているか？」

「校長先生は駄目ですか？」

「スナイプ？駄目に決まってるだろ」

「裏切り者よ」

「大丈夫だと思うんですけど」

「とにかく駄目だ」

「5人いるからそれぞれ、進めば良いんじゃないか？」

「そうね」

「僕やりませんよ」

「」「え？」「」

「言っと思った」

「何でよ？」「」

「ホグワーツが危ないんだぞ」

「腰抜け」

「食欲馬鹿」

「シヨタコンホイホイ」

「ハツフルパフの真実教えなさい」

「・・・何か、変な事聞こえたんですけど。それは良いとして、試練って、何でそんなめんどくさい事をしなきゃいけないんですか。不干涉です」

「せっかく、目の前に例のあの人を倒す事ができるかもしれない力があるのに」

「残念ですね。別の人探してください。部屋さん、この部屋から出してください」

退く者よ、行くが良い。恐れもまた大事なり

すると、浮き出た文字の反対方向から光が差した。

アレックスは、光の中に入っていった。

「彼以外のハツフルパフ生に心当たりある？」

「アーニーマクラミンは？」

「優秀だけどアレックスほどの力はないわね」

「アレックスは強いからね」

「今日は終わりにしようか」

「そうだね」

夜遅くに、食堂に行くと、そこにはアレックスがいた。

「やっぱり、ここにいた」

「なんかようですか、名無しさん」

「僕も夜食に来たんだよ」

「そうですか」

「不貞腐れてるね」

「手伝いませんかね」

「アレックスの自由だよ」

腕をスツとふって、いつもの晩酌セットを出し、イスに座った。

「酒ですか」

「そう、酒だよ。飲む？」

「ちょっとだけ」

そう聞くと、すぐにもう一つ、杯を出した。

「お酒って案外美味しいんですね」

杯から酒を流し込んで早々、アレックスが言った。

「飲むのは初めて？」

「日本の酒は」

「そっか」

「・・・何も言わないんですか？」

「何を？」

「弱虫とか・・・」

「必要ないよ」

「僕、魔法界にはついていけませんよ。ハリーだ、蛇の人だ、疲れちゃいますよ」

「そっか」

「何で、僕がハリーさんのために命をかけて戦わなくちゃいけないんですか。どうして、パパとママは僕にそんな事させたいのかな。僕の事、大事じゃないのかな」

「どうだろうね」

「こういう時、普通は優しい言葉かけません？」

「君にそれが必要だとは思えない」

「いつもと感じが違いますね」

「これも僕だよ」

しばらくすると、アレックスは寝てしまったので、部屋に転送しておいた。

もう少し飲もうかと、月明かりの下で月見酒をしていると、突然声をかけられた。

「こんなところで何をしているんですか？」

「マクゴナガル先生、一緒に飲む？」

「そんな事、聞いていないのですが」

「どうぞ、日本のお酒だよ」

「はあ」

そう言って、マクゴナガルは隣に座った。

「ずいぶん、美味しいお酒ですね」

「上物だからね」

「いつもと、雰囲気が変わりますね」

「何故だろう。僕もあなたと同じで魂を揺さぶられているからかな」

「魂ですか。そういえば、あなたはクープと仲が良いそうですね」

「ああ、アレックスも魂が揺れていますから、気になる」

「そうですね。彼も迷っているのですね」

「マクゴナル先生は何を迷っているの？」

「あなたには、かないませんね。ハリーポッターに期待をしすぎて
彼を死に急がしっているとわれまして」

「アレックスですか」

「私達のやっている事は、クープをも死に追いやろうとしているのでしょうか」

「どうだろう」

「私は、グリフィンドールから不死鳥の騎士団のメンバーが出るところを期待しています。それは、命を懸けて戦えと言っている事と同じなのでしょうか」

「それでも、先生はホグワーツを離れる事ができないでしょ。自分のやるべき事は分かっているから」

「私のやるべき事・・・」

「そう」

「私はここに留まり、生徒を守ります」

「大変だよ」

「覚悟の上です」

「心は決まったみたいだね」

「ええ、お酒おいしかったです」

そう言つて、マクゴナガルは立ち上がった。

「お酒は没収です」

去り際にお酒を持っていた。

「ひどいな」

一言呟くと、新しいお酒を出した。

最奥の部屋（後書き）

ルーナとジニーはもうすぐ退場しなければいけないのに、忘れてて、グリーンゴッツ襲撃の時点で、何故かホグワーツにいたという意味わかんない展開になってしまった。

どうしよう。修正しようか、オリジナル展開で進めるか。ルーナは誘拐されてもされなくてもストーリーに支障はないはず・・・

それぞれの試練

歳奥の部屋に呼ばれ、今後の話をする事になった。

「それで、どうしようっ..」

「とりあえずは、できるところだけやっておきましょう」

「そうだね、勇気の道と、知性の道はやれるんだもん。強さのみちはどうする？君、やってくれる？」

「いいよ」

「軽い...」

「それで、やさしさの道と。狡猾の道はどうしようね」

「後で考えればいいんだもん」

「...ルーナのそういうところ、見習いたいね」

「はい！決まりー！！じゃあ、レッツゴー」

「ほんと・・・どういつ思考回路なの」

4人はそれぞれの道へ歩みだした。

二人が扉を開け中に入ると、そこは、草原だった。

そんな、明るい雰囲気とは明らかに違うものがそこにあつた。

獅子だ。そして、獅子の前には、ハリーとジニーの母であるモリーがいた。

「ハリー、ママ」

「ハリー、パパ」

ジニーとネビルは同時に呟いた。どうやら、二人の目には違うものが見えているようだ。

「これ、どうなって・・・」

その時、獅子が言った。

「選べ、どちらを生かす」

二人は、沈黙した。

どちらかなど、選べるはずはなかった。

「では、聞こう、どちらがホグワーツを守る戦いに必要だ」

ハリー、それは、間違いなくハリーだ。だからといって、肉親を切り捨てろというのか。二人には、そんな事ができるはずがなかった。

「覚悟の必要がない戦いなどないぞ」

獅子は、言葉を迫った。

最初に口を開いたのはネビルだった。

「ハリー。ハリーを助ける」

ネビルにとっても自分の口から出た言葉は意外だった。自分とまともな会話をした事はない父でも、かけがえのないものだった。それでも、自分の口から出た言葉が、ネビル自身を突き動かした。その目には、凜とした真っ直ぐなものがあつた。

ジニーはネビルの目を見て、その覚悟を悟った。一見、その考えはスリザリンのようにも思えた。しかし、ジニーは悟ったのだ。この戦いに、寮は関係がない事を、そう、ハリーを守る戦いなのだ。ハ

リーが闇の手に落ちれば、戦いは負けたも同然。希望は潰えるのだ。

「わ、私も、ハリーを選ぶわ」

震える、声で言った。自分の身体が動き出してしまわないように、自分の手で自分の身体を縛るように抱いた。その光景は、自分の心が碎けないように守っているようにも見えた。

「そなた達の、覚悟、受け取ったり」

獅子はそういい、父そして母を噛み砕いた。

声が出なかった。二人は、覚悟はしていても、自分の肉親が殺されるという事には覚悟が幼すぎたのだ。

その時、ハリーの辛い覚悟を知った。ハリーは、友でありライバルでもあった、ゼドリックを自分のせいで死なせてしまった。そして自分の浅はかな考えで唯一の肉親といっても過言ではないほどのシリウスを失った。そして、唯一の理解者であった、ダンブルドアさえも。

「人の死ってこういうものなのね」

「覚悟が足りなかった」

獅子が言った。

「勇気だけでは戦えぬ。次へ進むがいい」

二人は無言で進みだした。

ルーナはスキップをしていた。第一、第二の試験は難なく突破し、最後の第三の試験は目前だった。日頃から、寮の絵との謎解きをしている、ルーナにとっては、第一、第二の試験の問題など朝飯前だった。いつもと、違うのは、間違えたら呪をかけられるというものだったが。

第三の試験の扉を通ると、驚がいた。

「どうぞ、こちらへお嬢さん」

そこには、机と椅子があり、アフタヌーンティーが用意してあった。

ルーナは促がされるように座った。

「どうぞ」

そう言って、お茶をルーナのカップに注いだ。ルーナは、お茶に口をつけ、サンドウィッチを食べた。

「あなたは、どうして、サンドウィッチを食べたのですか？」

「サンドウィッチがおいしそうだったからだもん」

「そうですか。では、ここであなたに問います。魔法ってどうしてできたのかしら」

「魔力があるからだよ」

「魔力はどうしてできたのかしら」

「必要だったからだよ」

「ほう、では、必要のないものはできないと。では、非魔法族には

魔法が必要がないというのですね。
では、なぜ、魔法族と非魔法族ができたのですか？」

「魔法族でも魔法が使えない人はいるよ」

「分ける必要がないということですね」

「違うんだもん。魔法族と非魔法族の定義がないのに、違いなんて言えないんだもん」

「見事な返しですね。これなら、この最後の問いを受ける資格がありそうですね」

「最後の問い？」

「ええ、では、これを、飲んで下さい」

そう言って、鷲はどこからともなく小さな小瓶を取り出した。

「これなに？」

「強力な毒です。この世で、最も苦しい痛みを与え、一瞬で死にい

「ざないます」

「嘘だもん」

「なぜですか？」

「一瞬で死ぬんだつたら、問いに答える暇はないんだもん」

「そうですね。じつは、先ほどの食事に少しの解毒剤を入れておきました。この毒を飲んでも10分は存命できます。その間に、この空間のどこかにある、解毒薬を探して下さい。ヒントはハッフルパフです」

「ハッフルパフ・・・」

「どうしますか、この試練は止めますか？」

「やるんだもん」

「そうですね。では毒を飲んで下さい」

ルーナは小瓶をあけ、一滴残らず毒を飲んだ。そして、ルーナはお

もむろに先ほどのサンドウィッチを
食べ紅茶を飲んだ。

「なにをしているのですか？」

「さっき、これに少し解毒剤が入ってるって言ったもん。これを食べれば、また、毒で死なない時間が延びるでしょ？」

「死の前で、なかなか冷静ですね。たしかに、その方法なら少しは伸びるでしょう。それでも、早く見つけなければ死は免れませんよ」

「薬は、もう見つけたんだ」

「ほう」

「あなたが持つてるんだもん」

「なぜそう思うのですか？」

「こんなところから、10分で探すなんて無理なんだもん。それに、解毒薬を料理に入れたんなら、あなたが、持つてなきゃおかしいんだもん」

「冷静ですね。では、私から奪って下さい」

「奪う？」

「知恵だけでは、戦いできません」

そう言って、鷲は巨大化し、とても大きな翼を広げた。

「強さの道開かないんだけど」

ドンドンと扉を叩くがまったく動く気配がない。術を使ってみてもうんともすんとも言わないのだ。

しかたないので、別の扉に行こうとスリザリンの扉を開けると超巨大な蛇が確実に目が合うように微動だにせずドアの真ん前で目を最

大に開けていた。どう考えてもバジリスクです。入ってきたやつを、速殺する気満々です。邪眼の力をなめるなよとも言いたげです。扉を開ける瞬間に、気配を感じて結界を張ってなかったら、確実にOUTでした。今も、結界に顔を貼り付けんばかりにガン見してます。

「あの、どいて」

「シュー」

「どいてよ」

「シューシュー」

「僕には、その言葉分らないんだって」

「シューシューシュー」

「だから、そんなにガン見されても困るんだけど」

すると、バジリスクは、ショックを受けたように目を見開き、頭を地面につけ拗ねたようにシューシュー言っていた。

「ごめん、先に行くから、悪いんだけど君を踏んでいくね」

この、先に進むには、道の幅もあるバジリスクに退いてもらうか、バジリスクの上を行くしかなかった。多分、パーセルタングの人専用の道なのだろう。

ごめんと思いながら、地面にへたり込んでいるバジリスクの頭に上り歩いていった。

それぞれの試練（後書き）

第一話にあらすじとキャラクター解説アレックスによるを載せました。

それぞれの、戦い。一部除外

「ジニー、気をつける。そっちに行つたぞ」

髪の毛を少し焦げながらネビルが言った。

「分かつてるわ」

こちらに向かつてきた、獅子に身構えた。

獅子は、口から炎を吐きながら、こちらに突っ込んでくる。

炎を呪文で相殺すると、右後ろの方で何かが動いた。とっさに左にステップを踏むが、腕を何かが掠めた。鋭い痛みと時間差をつけて、熱い物があふれ出した。

「ジニーー!!」

「大丈夫よ。アレックスの言うとおりね、応急処置の呪文くらい覚えておいたほうが良かったわ」

獅子は目の前まで迫ってきており、避ける事はできなかった。自分の自嘲がとても愉快に感じた。

その時、ネビルの呪文が炸裂した。獅子は、顔をネビルの方に向けると咆哮して、威嚇した。殺気、これが本当の死を目の前にすると

いうことかとネビルは思った。身体が硬直して動かなかった。強くなったそう思っていたのに、身体が硬直して動かないのだ。練習して練習して練習して、死食い人とだって戦った。それが、何の意味もないことだったのか。その時、アレックスの言葉を思い出した。ヒーローごっこ。彼はそう言っていた。

「違う！！僕は、戦わなくちゃいけないんだ！！！！ロングボトム家の・・・父さんと母さんの誇りにかけて！！！！！！」

次の瞬間、ネビルの身体の硬直がとけ、獅子に向けて渾身の呪文を放った。獅子は呪文の直撃に一瞬の油断をみせた。

「ジニー！今だ！！」

「分かってるわ！第一の課題の答えは撤回よ。私は、自分の愛するものを全て守ってみせる！！！！」

ジニーの呪文が獅子の後頭部を直撃し、獅子は動きを止めた。

獅子はゆっくりと後退し、止まった。

「そなた達は、幼いな。だが、その覚悟見事なり。この、勇気の関門は突破したこととする。我もまだ、甘いな」

獅子はにやりと笑った様に見えた。次の瞬間、獅子はその姿を変え、丸い玉に変わった。

「終わった？」

「そうみたい」

「あー疲れた」

「そうね」

二人は、腰をドスンと地面に降ろした。

時間は戻り、ルーナは大鷲と共に疾走していた。

ルーナは、呪文を放った。しかし、何度やっても、ルーナの呪文は、鷲の大きな両翼で起こされる風に弾かれてしまう。打つ手がない。だけど、まだかすかな勝機があった。しかし、問題は時間だ。ルー

ナに残された時間は、5分もなかった。

「エイビス、オパグノ」

アレックスの、やり方を真似て全方位から襲わしても、大鷲の回転により発生する、竜巻に全てが無に帰すのだ。

「残念ね。やはり、あなたは知恵がまわるだけ。それだけの愉快な女の子よ」

愉快な女の子。そう、そう言われ続けてきた。でも、私にはそれだけで充分だった。私の信じるものは私が決める。それだけなのに、どうしてみんなは理解してくれないんだろう。いつしか、その思いすらもなくなつた。そんな時、出会つたのがハリーポッターだった。彼は、私の話を聞いてくれた。みんなとは違う、そう感じた。最初は聞いてくれたからそれだけの関係だったのが、DAを通して仲間としての絆、友としての絆を感じさせてくれた。

仲間達は、わたしがおかしいと思われる事を言っても、否定はするものの、そこには愛があつた。だから、こそ、友が窮地に立たされ、それを助けられるかもしれない力が手に入るかもしれない状況で、手を拱いているわけにはいかない。

「知恵があるだけ？そんな事、関係ないの。私は、大事な人たちのためにあなたに勝たなきゃいけない！！！」

ルーナは真正面から突っ込んだ。大鷲は驚いたもののすぐに、風を発生させるかまえをした。

「知恵さえ忘れたか。愚か者。毒を待たず死ぬがいい」

ルーナは、風によるカマイタチで体中から血が噴出し、風による力で前に進めなくなった。足が崩れそうになったとき、ルーナは渾身の力で自分にレビコーパスを使い身体が反転する力を使い、大鷲の翼を駆け上がり、そのまま顔面に蹴りをあびせ、怯んだところに逆さまになったルーナがオブスクローを唱えた。勝負は決した。

「甘いですね。目隠しなどと、決定打を放つ場面でどうしてこんな呪文を使ったのです？」

「あんたみたいな、でかい鷲にステューピファイが効くか分からなかったからだもん。頭ならもしかしたら効くかもしれないけれど、やっぱり確実に効果のある目隠しにしたんだ。これで、後は効く呪文を試していけばいいんだもん」

「そうですね、なかなか機転が利く。それに、まさか肉弾戦を仕掛けてくるなど思いもありませんでした。ただ、一つ忠告しておきます。私がこのまま身体を回転させて竜巻を起せば、あなたは切り刻まれ死んでいました」

「そんなことしないんだもん」

「なぜです？」

「さっき、私の身体に傷ができたときに、あなたの風は力を弱めた。

私もホグワーツの生徒だから？」

「ふふ。無意識に力を弱めてしまったようですね。それでも、二度とあんな危険な賭けはしないことにしてください」

「わかったもん。それで、毒消しは？」

「ああ、時間ぎりぎりですね」

そう言って、大鷲は小さくなった。

「私の羽根を一本抜きなさい。それを噛めば毒は消えます」

ルーナは、言われたとおり、羽根を一本抜くと噛んだ。

「これで、大丈夫ですね」

「羽根は大丈夫？」

「羽根はすぐに、再生します」

「そっか。よかった」

そう言って、ルーナは倒れた。

「ちょっと、やりすぎちゃいましたか」

ルーナの頭に最後に響いた言葉だった。

時間はさらに戻り蛇の上を歩く少年へ

「蛇の道、歩きづらいな」

そう言って、空中に浮き出した。ビュンビュン進むと、壁にぶち当たった。地べたを転がりながら止まると、そこは湖畔だった。

「それにしても、どうして狡猾の道だけあんなに長かったんだろう？途中で今12キロ地点頑張りましょう（笑）」って書いてあったし」

それにしても、綺麗な湖だな。池に月が写って、酒を飲むにはうってつけだ。そう思って、酒を飲みだした。魚がどこかで跳ねた音があった。穏やかな時間、それが何よりも酒を美味しくした。小一時間酒を飲むと、寝た。

「記憶が見えんな。いや、この感覚は……ないのか」
何かが、そう呟いた。

それぞれの、戦い。一部除外（後書き）

ネビル、ジニー、ルーナの3人の戦いは終わりです。この先、どうする？ となる？

主人公寝てるだけっていう・・・

BLフラグは大抵勘違い

アレックスは、フィネガンに腕を引っ張られていた。どこに連れて行かれるんだそう思った。まさか、とうとう、僕に魔の手を及ぼせる気が。そうはさせるか。そんな誓いを立てた。

「フィネガンさん、いくら、ハリーさんがいないからって、こんないたいけな一年生を捕まえて何しようって言うんですか？」

「誤解をまねく様な言い方するな」

「みなさん、聞いてください。この人は、愛するハリーさんの変わりに、僕を手籠めにしようとしています」

「バカ！違っぞ、違っからな」

周りの生徒に焦りながら否定をしている。周りの生徒は見事なジト目の使い手らしい。おそらく免許皆伝だと思われる。一部を除いて。

「あんまり、乱暴はするなよ。優しくだ優しく」

「後で、報告しなさいよ」はあはあ

「萌えるわ」

そんな、声が一部から聞こえる。ホグワーツ終わってるな、そう思わざるをえなかった。

フィネガンさんは、僕を空き教室に連れ込み、僕を壁によせ逃げられないように両端の壁に手を付いている。顔が近い。まさか、これは、マジですか。ちょっとマジで勘弁して下さい。どんどん、顔を近づけないでくださいよ。息臭！何食ったんだよいったい、トロールの鼻くそか？

「ア、アレックス」

「・・・なんですか？フィネガンさん」

「じ、実はさ」

（この、雰囲気止める。静まり返った教室でって、どこのBLだ。まさか、このまま、僕は手籠めにされて、なぜか知らないけど付き合ってしまうというお決まりのパターンなのか？それだけは、駄目だって箱の中の勇者に言われたんだ！嫌だー、せめてもっとカッコいい人にしろー。違う違う、そんな事じゃないよ。よし、こうなったら、チューだ。チューまでは我慢して（臭いけど）その間に、杖で呪文をぶっ放し記憶を消す。それで、愛の妙薬を使ってネビルさんとかくつつければ良いのさ。ふふ、計画通り進めてやる）

「ネビルがないんだ」

「は？」

「ネビルも、ジニーも、ルーナもないんだ」

（なんだよ、勘違いさせやがって、僕の覚悟を返せ。っていうか、あの人たちが行くところってあそこしかないよな）

「必要の部屋は探しましたか？」

「探したよ」

（え？違うのか）

「3人の居場所は知らないのか？」

「あー、知りませんね」

（確証はないし）

「わかった。手を引っ張ってすまなかった」

「あっはい。大丈夫です」

（なんか、せつなそうな顔しすぎ。こっちが罪悪感にかられるじゃないか）

「僕も、探してみますよ」

「本当か？ありがとうございます」

（何この人、可愛い）

「じゃあ、探してきますね」

必要の部屋に向かうと、やはりみぞの鏡はあった。手を触れると、中にすり抜ける事が出来るようなので入った。

「え？何これ」

そこには、傷だらけの、3体の遺体が・・・

「死んだか・・・」

「死んでない」

「ああ、ロングボトムさん。ご無事でしたか」

「ああ、何とか。だけど、動けないんだ」

「どうしてですか？」

「ちょっと、頑張りすぎてね」

「じゃあ、これ飲んで下さい」

アレックスは、母に持たされた魔法薬をネビルに手渡すと、ジニーとルーナを見に行った。ルーナが、あまりにも傷が多い事を目にするとうすぐさま、応急処置を施す為の準備を始めた。

「ルーナさんが、危ないので、ジニーさんの傷は、これをロングボトムさんが傷に塗ってください」

手早く、ローブの中の拡張された空間から魔法薬を取り出し、ハナ

ハツカの小瓶をネビルに放った。アレックスは続いて、ルーナに呪文をかけながら、もう一つのハナハツカを霧状にしてルーナの全身にかけた。

「ルーナは、大丈夫？」

ジニーの傷に薬をたらしながらネビルが聞いてくる。

「命は、大丈夫だと思います。ただ、これ以上は僕にはどうしようもないです。名無しさんに頼むしかありませんね。マダムポンプリーのところには行けないでしょう？」

「そうだね」

「ところで、名無しさんは、どこに？」

「強さの道に行ったはずだけど」

「まだ、クリアできてないんですかね」

「大丈夫かな？」

「名無しさんなら、大丈夫ですよ」

「それはそうだけど」

「名無しさんが帰ってくるまで、必要の部屋で休んでいて下さい」

「わかった」

「じゃあ、僕にできる事はもうないので、帰ります」

「きみは・・・」

（ロングボトムさん顔が近いですよ。そんなにまじまじと見ないでください。イケメンだよ。イケメンだけでもさー。駄目だ、ダークサイドには落ちてはいけない。あつ、でも、マジでイケメンだ。ワイルド系イケメンだ。

・・・駄目だ。僕、早く何とかしないと）

「な、何ですか？」

「君は、本当に生粋のハッフルパフ生だね」

「？」

「こついつ時には、放っておけないから」

「そんなんじゃないですよ」

そう言つて、アレックスはその場を後にした。

部屋に帰ると、アレックスのベットに、彼が寝ていた。

「名無しさん。どうして、ここに・・・」

彼は夢に夢中で起きそうにないので寝かせておく事にした。

にいちゃん、ポツリと呟いた声に反応してアレックスは言った。

「どうして、そんな悲しい顔で泣いてるんですか・・・あなた強いんじゃないんですか？」

静寂の中、アレックスの声だけが響いた。

B Lフラグは大抵勘違い（後書き）

アレックスがどこまで理解してるかは作者にもわかりません。イギリス男子だから、知ることはもう知ってるんだろっか。

この後、追加する話があればギャグ（ルーナ最強伝説、ルーナの拳）が入って、その後シリアスの話が続くと思います・・・多分。

ルーナの拳と教師の苦悩そして悪巧みへ（前書き）

ふへへ、お気に入り登録が増えてやがる。

はっ！しまった。自分を見失っていた。

新規のお気に入り登録ありがとうございます。これからも、よろしくお願いいたします。

ルーナの拳と教師の苦悩そして悪巧みへ

クリスマス休暇が来た。

眠りに、ついていると、お腹に突然衝撃が来た。みるとアレックスが、腹に頭を押し付けていた。

「フォアグラシチュー」

「いったい、どんな家に生まれ育った・・・」

引き離そうとするが、アレックスはグイグイと力を強め、離さなかった。

「アレックス止めて、人に見られたらどうするんだ」

「グヒヒ、ローストチキンより北京ダックが良い。どっちも食べる」

「だから、どんな金持ちだ！」

「ハムハム」

「噛むな！そんなところ噛むんじゃない。僕は食べ物じゃない。やめてー僕は思春期真っ只中なんだぞ。目覚めたらどうする気だ」

「あひゅー」

「いい加減にして」

術で壁に叩きつけておいた。

「あつ名無しさん。おはようございます。ところで、僕の北京ダックは？」

「そんなものないよ。夢だよ夢。」

「ええ？たしかに噛み応えはあったんですけど」

「・・・夢だって」

「そうですか。そういえば、他の人がいませんね」

「いつもの事ですよ。寝坊常習犯なんだから」

「それは、名無しさんもじゃないですか」

「そうだけどさ」

「お腹すいたので、ごはん、食べに行きましょう」

「そうだね」

廊下を歩いていると、マクゴナガル、フリットウィック、スプラウト先生達が楽しそうにお喋りしていた。

「先生たちご機嫌ですね」

「あら、わかりますか」

にっこりと、スプラウト先生が言った。

「クリスマス休暇中はホグワーツにカロー兄弟がいないんですよ」

「本当に、嬉しい事だ」

アレックスはキョトンとしていた。

「クリスマス休暇？」

「そうですよ。今日、ホグワーツ特急で帰りました」

「ええ!？」

「どうしたんですか、クープ」

「僕も帰るはずだったんですけど・・・忘れてました」

「そうでしたか。それでは、ご両親に迎えに来てもらうしかありませんね」

「無理ですよ。今、外に出れませんから」

「ああ、そうでしたね。フルーパウダーも監視されてて使えませんね」

「連れ添い姿くらましでは、守人の呪文は通過できないからの」

「クープは家への行き方を聞いてないのですか？」

「両親が隠れたのは、ホグワーツに来てからですから、連絡とってないです。多分、何らかの方法で94/3に迎えに来るつもりだったんだと思います」

「このご時世に、ふくろつ便も危険ですからね」

「ああ！僕の北京ダック！！！」

「「「はい？」」」

「気にしたら負けだよ先生」

「名無しさんは予定ないんですか？」

「クリスマス休暇？何かあったような」

「また、例のあの人の所にいく気じゃないでしょうね？」

怪訝そうにマクゴナガル先生が聞いた。

「そっち系だったような。たしかホグワーツ特急が・・・」

「ホグワーツ特急！！？」

「うん。ザ・クイブラーが」

「ラブグッドのお父様が出している本ですね」

「あっ！ルーナさらわれるんだ！！！」

「「「え！？」「」」

「それは、忘れちゃ駄目でしょう」

その時、狼狽しながらロランダ・フーチが走ってきた。
「大変です！！ホグワーツ特急が襲撃されました」

「ラブグットはどうなったんですか？」
マクゴナガルがフーチに聞いた。

「なぜラブグットの事を？」

「説明は後です。早くラブグットの事を教えて下さい」

「ラブグットは死食い人相手に大立ち回りをして3人を回し蹴りで倒し、二人を肘鉄で倒し、窓を破って逃げ出したそうです」

「ルーナ・・・ランボー顔負けだな」

「ラブグットは、いつそんな技術を学んだんですか」

「DAはそんな事も学んでいるのですか」

「さすがは私の寮の生徒だ」

「ルーナさん、恐ろしい子」

「噂によると、ルーナラブグットを狙っていることを理由にゼノフイリアスラブグットを脅しているそうです」

「ああ、そうなるんだ」

「どういっことですか？」

「まあ無事だよ、ピンチになったら助けに行くから大丈夫」

「名無しさん。お腹すいたんですけど」

「わかった。わかった。ご飯食べに行こう」

「あなたたちは本当に・・・」

「あきらめましょうポモナ」

「はあ」

二人を見送りながら、皆からむなしいため息が聞こえた。

厨房でテーブルに着いたアレックスがドビーに聞いた。

「今日の晩御飯はいつたいなんだろう」

「はい、クープ様。今日はクリスマス休暇なので特別なディナーをご用意します」

「シチューは？」

「現在、各種作っております」

「やったー」

「アレックス、今もシチュー食べてるじゃないか」

「これは、試食です」

「お味はいかがでしょうか」

「もう少し煮込んでいけばもっと美味しくなるよ。あとこれに、トマト入れた方がよいよ」

「わかりました」

「そうだ。アレックス、後で、魔具開発に付き合っしてほしいんだ」

「なんですかそれ？」

「魔法をかけた道具なんだけど」

「そうですか。何を作るんですか？」

「この前、パピーが手紙に魔法をかけて呪文を封じていただろう？」

「そんな事もありましたね」

「それで、あれって、僕の魔力に反応するようにしてあったと思うんだけどそれを改良してあるものを作りたいんだ」

「あるもの？」

「地雷」

「地雷って、マグルのあれですか？」

「そう！マグルのは爆発するけど、僕が作るのは、呪文を込めて踏んだら呪文が炸裂するようにしたいんだ。死食い人限定でね」

「卑怯！愚劣、そして狡猾！なんて考えてるんですか。そんなことしたら、圧勝するじゃないですか」

「そうでもないと思うけど。でも、突っ込んで来たらどんどん倒れていくって面白くない？」

「それは、笑えますね。でも名無しさんだったら、そんな事しなくても一掃できませんか？」

「最近、調子悪いからね」

「風邪ですか？」

「そうじゃないけど、何か体だるくてさ。だから、もしもの時の予防線を作っておこうかと思ってね」

「そうですか、だったらホグワーツのふくろう達に仕掛けをして空襲できるようにしましうよ」

「何と！それは思いつかなかった。おぬしも悪よのう」

「いえいえ、お代官様ほどでは」

「はっはっはっはっ」

「クープ様！気をたしかにお持ちくださいー」

そんな、哀れなしもべ妖精には解決できない出来事であった。

ルーナの拳と教師の苦悩そして悪巧みへ（後書き）

ふくろうの空襲ってパクリとかになってませんよね？デジャブですよね？

それと、ルーナって捕まってなきやいけないような進行上で必要な理由ありましたか？なかったと思うんですけど

そして、クリスマス休暇からイースターまでの4ヶ月間の話かいてない。キンクリしてもいいですか？

それとも、このままホグワーツでござせるか、また放浪のたびにいかせるか。どっちにしても、グダグダになりそうです。

ハリーたちって今頃、ゴドリックの谷の辺りの時系列ですね。

今書いてるシリ阿斯展開に心折れそうです。

食べ物の恨みは人を間違った方向へ進化させる

「名無しさん。そろそろ休憩にしましょうよ。ディフォデュオ」

地面に穴を開けながら、アレックスが言った。

「さっき休憩したばかりでしょ」

「えーあれから、10分も経ってるじゃないですか」

「10分しか経ってないだろ」

「体力バカ」

「どこがだよ！」

「そんなところに穴掘って何悪さたくらんどる」

「デカ！」

「なに、はじめてみましたみたいな反応してるんですか」

ハグリッドの登場によくわからない反応をしたことに対して言った。

「ハグリット、かたぐるまして」

「なんで、俺がお前のかたぐるましなきゃならんのだ」

「名無しさん、キモイ」

「今、どのくらい埋めてあるのか見ただけだよ！ハグリット、ハリーを守るためなんだよ」

「ハリーをか？なら、どんとこい」

そうやってハグリットは、肩に少年を乗せた。

「なんだか、こうしておると、ハリーが入学した時の事を思い出す」

「ハリーが？」

「ハリーはこんなにちびっこかったんだぞ」

そう言って、指でサイズをあらわしてきた。

「そんなにちっちゃいわけ」

「名無しさん、夢を見させてあげてください」

「わかったよ。突っ込みはなしだね。ハグリット、あっちの方に真っ直ぐ歩いて」

「おう、わかったぞ」

のしのし、歩いていくハグリットを、あっちへこっちへと歩かせていた。

まっすぐ、歩かせれば、すこし横にずれ、また来た道に戻ったり、斜めに歩かせたり、ジャンプしながら行かせたりしていた。

「名無しさん、何してるんですか？」

「ハグリットの歩いたところを見てみなよ」

そう言われ、アレックスがハグリットの通ったところを見ると、ハグリットの足跡が地面に穴のように残っていた。

（デIFOデオで地面をもろくして、そこをハグリットを歩かせることで穴を開けさせる。なんというハグリット田植機！いや、地雷埋機か！！）

「名無しさん、何て事をさせてるんですか」

「ジャ。ネット。田もビックリだろう。なんたってプライスレスなんだから」

「非道、鬼だ、悪魔だ、新世界の神だ」

「残念だが、そのセリフを言ってやることはできない。そのセリフは死亡フラグだからね」

「僕だけ、おかしい人みたいになっちゃうじゃないですか」

「あんた、おかしいよアレックスさん!!」

「デプリモ!!」

ズン、その音と共にハグリットの体が半分埋まった。

「・・・この術使えば一朝一夕だった気がするんですが」

「これだから、魔法族は、労働の価値を知らない」

「ハグリット、オンリーだったじゃないですか」

「おい、おまえら、そんな事より俺をここから出しちくれ」

アレックスは浮遊呪文をかけてハグリットを出すと言った。

「もう、終わったんだからご飯食べに行きましょう」

「まだ、駄目」

「もう疲れたー。ご飯食べたい、ご飯食べたい、ご飯食べたい」

「シレンシオ」

「プロテゴ」

「ご飯！ご飯！ご飯！ご飯！」

「うるさいーうるさいーうるさいーうるさいー」

「ステューピファイ」

「そこまでののー！アレックスさんー！」

「エクスペリアームス、ステューピファイ、タラントアレグロ」

アレックスの術を防ぎながら言った。

「おかしいですよ、アレックスさん。ステューピファイ」

「なんの、エクスペリアームス」

「くそ、杖をとられた」

血に飢えた獣のように、アレックスは校庭を見回し、騒ぎを聞きつけて、近くに來た生徒に言い放った。

「トチ狂って友達にでもなりに來たのかい？」

「ちょっとアレックスマジでおかしいよ」

「裸にでもなつてやりましょうか!!」

ヒッパハー状態のアレックスが生徒から杖をぶん取ると、課外授業をしていたグリフィンドールとスリザリンの生徒に突っ込み、あらかたの生徒から杖を取り上げ、こちらに迫ってきた。下手な鉄砲数打ちや当たると言わんばかりに、杖をとられては新しい杖を掴みと

いう事を繰り返した。

被害にあった生徒の中には、D Aのシェーマスやネビルが含まれていた。

哀れな生徒達を見ながら、何かに目覚めてしまった、アレックスを元に戻すには、ご飯という最終手段をとるしかなかった。そうして、ホグワーツで起こった、ご飯戦争は多数の被害者を出しながら、肉まんという交渉手段により終結した。

食べ物の恨みは人を間違った方向へ進化させる（後書き）

すみません・・・調子に乗りました。

おそらく、追加がなければ最後のおふざけの話です。

ドビー（前書き）

あんなにふざけた事を書いてしまったので、お気に入り登録減るか
と書いていたら増えちゃうっていうビックリな結果になりました。

すごく嬉しいです。これがカテ公パワーですね。今度、紫野郎ネ
タでも出そうかな。いや、デコネタにしようかな。

・・・できるだけ調子に乗らないようにします。

ドビー

イースターの休暇の日またも寝坊したアレックスが家に帰りたい病を発症する中で、アレックスと毎度おなじみのティータイムをしていると、突然パトロナスが現れ、ドビーに告げた。

「ハリーポッターが危ない」

ドビーはすぐさま、ハリーポッターの元へ向かった。

「名無しさん、ドビーはハリーさんのためなら死ぬこともいとわな
いって言っていました。ドビーに死んでほしくありません。助けてくだ
さい」

「分かった」

そう言って、すぐにドビーの後を追った。

ついしてみると、ピーターが銀の手で首を締め上げているところだった。
た。

ハリーとロンが必死に引き剥がそうとしているところに割って入っ
た。

「どいて！言葉は力、われの言霊を聞き解き放て」

しかし、何も起こらなかった。

「呪術返しが効かない。いや、著しく弱まっている、パパの技を破るほどの力が残っていないのか」
他に何かできないか考え一つの策を思いついた。

「痛いけど我慢してね。私の言葉の前に、空間あり。私の言葉を聞き、空虚なる力を持って空間よ消えよ」

ピーターの腕と銀の腕の接合部分を消した。ピーターはゼイゼイ呼吸をしながら、痛みに耐えていた。
それを見たハリーたちは、急いで階段を駆け上がった。

「ピーター大丈夫？少し我慢してね」

ピーターは、頷いたが、痛みに汗をかいていた。

「傷つき魂よ、傷つき身体よ、肉体の記憶を再生しろ」

ピーターの腕は元に戻ったところを見届けると体が揺らいだ。ピーターは治った腕で、支えると言った。

「大丈夫ですか？」

「ありがとう。少し無理をしたただだよ」

その時、上の階からガシャンと大きな音が聞こえた。まずい、そう思った矢先、パチンと音が聞こえた。

急がなくては、そう思い、すぐに後を追った。

「ドビードビ―！」

叫び続けるハリーポッターを見て、すぐに状況を察すると、駆け寄った。

「君は・・・そうだ！君なら助けられるでしょ！」

「傷つきし気高い者よ、魂の記憶と共に肉体の記憶を再生しろ」

しかし何も怒らなかった。

「どういう事！？治ってないよ」

（くっ、さっきので治すだけの力がなくなったのか）

「治せるでしょ。君なら、人を生き返らせる事だってできるんだから」

「今の僕に生き返らせるほどの力はない」

「ドビ―！ドビ―！お願いだよ。死なないで。何でもするからドビ―を助けてよ」

（死なせたくない、死なせたくない、死は駄目だ。絶対に駄目だ。そうだ・・・僕の身体をあげよう）

「魔力が駄目なら・・・我が肉体よ、傷つきしものの糧となれ」

身体の一部が消失したような痛みと共に、ドビーの身体の傷が癒えていった。だが完治を見る前に意識が遠のいた。

目を覚ますと、ベットに寝かされていた。

（力は、少し回復したか。ホグワーツを離れると回復するという事はやはり）

「起きたかい？」

「リーマスさん」

「まったく、無茶をするね」

「無茶？あつそうだ！ドビーは？」

「・・・」

リーマスはとても辛そうな顔をしていた。

「そつか・・・僕は助けられなかったんだね」

「傷はいえたんだ。しかし、もう遅かったんだ」

「僕がもっと早く気付いていれば」

「君のせいではないよ。ドビーは自分の意思でハリーを守ったんだ」

その時、アレックスの言葉が頭をよぎった。狂っていると。

「食事ができているよ。来るかい？」

「・・・」

「わかった。食事を持ってこよう」

しばらくして、食事を持って現れたのはハリーだった。

「ハリー・・・」

「食事ここに置くね・・・君のせいじゃないんだ。僕は君に頼りすぎたんだよ。ごめんね」

何を言われるよりとても辛かった。罵ってくれたらどれだけ気が楽だったか。

（ハリーごめん。ごめん。ごめん。助けられなくてごめん。ハリーを悲しませてしまった。ハリーに何もしてあげられない）

怖くてその場から逃げた。

「ここは・・・」

どこかの寮の一室のようだった。

「あつ、名無しさん。大丈夫ですか？しばらく帰ってこないから心配したんですよ」

ちょうどアレックスが部屋に入ってくるところだった。

「アレックス・・・」

「でも、元気そうですね」

「アレックス・・・ドビーが」

「そうそう、今日は名無しさんの快気祝いにはぱつと美味しいもの食べましょーよ」

「アレックス！！聞いて・・・」

「聞きたくない！！！！」

「ドビーは……」

「だから、ハリーポッターなんて助けなければ良いんだ。あいつが早く捕まれば、ドビーは死なずにすんだのに……!」

「アレックス……」

「分かったって言ったじゃないですか。ドビーを助けてくれるんじゃないかったですか」

「ごめん……」

「嘘つき!」

そう言って、アレックスはいちべつすると去っていった。

泣いて、泣いて、泣き続けた。誰か、助けて、僕を一人にしないで
そう願った。

気付けば寝入っていたようで、知らないベットで寝ていた。

ドビー（後書き）

シリアス路線突入しました。

ドビーファンの皆さんごめんなさい。作者もドビー大好きで生存ルートも考えたんですが、この先の事を考えるとドビーには尊い犠牲になってもらいました。
愛してるよドビー！！

セブルススネイクと密談

「セブルス？」

目を覚ますとセブルスがベットの横のイスで本を読んでいた。

「ああ、起きたか。貴様にセブルス等と呼ばれると虫唾が走るな。そんな事よりこれを、飲め」

部屋の奥に行き、なにやらしてから戻ってきて、手に持っていたタンプラーをズイツと顔の前に指し出された。

「これは？」

「飲め、少しは回復するだろう」

「苦い・・・砂糖・・・」

「どこかの獣のようなことをいうな」

「もつからない」

「駄目だ全部のめ」

「・・・」

「飲め」

仕方なく、全部飲むことにした。

「あまり、心配をかけるな」

「心配してくれたんだ」

「ふん。貴様は、我が君が殺す事になっているからな」

「スネピー優しいんだね」

「どうしたら、そういう結論になるのか、一度、貴様の中を覗きた
いものだ」

「変態？」

「誰がだ・・・」

無言で指をさすと本が飛んできた。

「同じ事をした一年生がいたが、貴様と組んでいたのか」

「誰？」

「クープだ」

「アレックスか・・・」

「貴様、まさかと思うが、やつに何かを告げたか？」

「どういうこと？」

「ポッターの運命を知っているようだったのな・・・我輩とポッターの関係もな」

「言っていないけど」

「そうか、ならばいい」

「スネピーさ」

「何だ」

「リリーが死んだ時、自分を責めたよね？」

「・・・」

「どうやったら、その気持ちは晴れたの？」

「晴れる者ではないな」

「今もなの？」

「そうだ」

「・・・」

「ただ、別の使命ができた」

「使命？」

「ポッターだ」

「そうだったね」

しばらくの沈黙の後、セブルスが口を開いた。

「屋敷しもべが死んだそうだな」

「うん・・・」

「だが、ペティグリューは生き残った」

「知ってたの？」

「やつも死食い人だからな。我が君が不思議がっていたぞ、銀の腕のあの程度の術があやつに破れぬわけではないとな」

「よくわからないけど、力が制限されてるんだ」

「制限されている？」

「どうしてかは、確証がないからしないけど」

「ピーターどうしてる？」

「あいかわらずだな。我が君もやつに構っている場合ではないの
な」

「ああ、杖が手に入ったんだね」

「そんな事まで知っているのか・・・それだけではないがな」

「え？」

「そこまでは、知らないらしいな」

「どづいつことっ」

「我輩も詳しくはわからぬ。ただ、貴様の対策に、何かを手に入れ
たらしい」

「ふーん」

「何とも思わんのか」

「対策っていわれても」

「死ぬ気か・・・」

「考えた事無いよ」

「だが、貴様は死にたがっているようにしか見えんぞ」

「そうかなー」

「子どもらしくない。いや、子どもすぎるのだな」

「スネピーにいわれたくないよ。初恋相手の子どもものに死ぬ気なんて」

「まったくもって、虫唾が走る程の情報通だな」

ふんと唸るセブルスに、懐から札を出してスネイクに渡した。

「これあげる」

「これは？」

「お守りかな？」

「なんの効果がある」

「これを持つてる間はハリーがリリーに見えるように術がかけてあるんだよ」

「そんな、気色悪いものいらんな」

「ジェームズに似ているハリーとリリーに似ているハリーだったらどっちが良い？」

「・・・リリーだ」

悔しそうな顔で呟いた。

「安心してよ、自分の望むときに発動するようになっているからさ」

「そんな物渡してどうするつもりだ。取引か？」

「薬のお礼だよ」

そう言って、部屋を後にした。

セブルススネイプと密談（後書き）

スネイプ先生はツンデレだと作者は思っています。

スネイプ救済ルートあれば良いなとは思ってます。どうなるかはわかりませんが。

できれば、大団円にしたいですが。

ホグワーツ決戦は映画と原作が入り混じった展開になると思うので、よろしく願います。原作のマクゴナガル先生もカッコいいけど映画のマクゴナガル先生もすごくカッコいいので、カッコいいシーンを書きたいと思いました。そのせいで、少し普通の小説っぽくなっているので携帯のかたは読みにくいかもしれませんが。

それと、できればアンブリッジぶっ飛ばしたいのですが、あのひと最終決戦の時どこにいたんですかね。もしかして、デイメンターにやられたのかな。それとも、ハリーを逃がした罰で処刑とかですかね。

みなさんに紹介したい映像があるんですが、もう知ってるかもしれないですね。不死鳥の騎士団の未公開映像にアンブリッジをガン無視するトレーロー二先生がいるんですが・・・最高ですよ。

後書きってこういう使い方するの間違っていますか？

偽善（前書き）

この話は、ネビルの両親救済の話です。嫌な人は読まない事をお勧めします。

偽善

ホグワーツの廊下に行く当てもなく歩いていた。酒を飲む場所を求めていたのかもしれない。あるいは、眠る場所を求めていたのかもしれない。何を探しているのかも分からなくなった時、後ろから声をかけられた。

「あれ、こんなところでなにしてるの？」

そこには、ネビルがいた。

「ネビルこそ何してるの？」

「2年生がカロー兄弟に捕まってたから、助けてたんだ」

「頑張ってるね」

抑揚のない声で呟いた。

「ああ、そうだ。ディーンが無事に保護されたよ。ジニーは帰ってこないけど」

「ジニーは安全だよ。家族のところにいる」

「そうだとはい、思ったけど」

「うん」

「どうしたの元氣ないね。元氣爆發藥を飲んだら」

「やだよ、あんなの恥ずかしい」

おどけるように言った。しかし、ネビルはそれを見抜いたように口を開いた。

「話したい事ある？」

「大丈夫だよ」

「心配だな」

ネビルの心配そうな表情に、苦笑いで言葉を続けた。

「ネビル、優しすぎるよ」

「僕が？」

「うん」

「考えた事ないよ」

「ネビルはさ、どうして、そんなに頑張れるの？」

「どうしてだろう。父さん達の影響かな、ばあちゃんも、誇りにしてくれてるしね。でも、それは君も一緒だろ？ ロンのこと聞いたけど、どうして、自分の身もいとわず人を助けられるの？」

「そうか、ネビルのパパとママは・・・そうだったね。僕が人を助ける理由・・・どうしてだろう。なんでなんだろう。わからない」

「僕の両親の事知ってるんだね」

「うん」

「時々、思うんだ、今、僕のやってる事を見てくれたら、褒めてくれるんだろうかって」

「褒めてほしいの？」

「それは・・・そうだよ。ちゃんとしゃべりたい」

「叶えてあげようか？」

「え？ネビルのパパとママを元に戻してあげようか？」

「・・・できるの？」

「少し、時間はかかるけど」

「たしか、対価がいるんだよね・・・何でもするよ！だからお願い。助けて！」

「・・・何でもするよ！だからお願い。助けて！・・・」

（なんだろう、この感じ・・・前にもどこかで）

「助けてくれるの？治してくれるの？」

ネビルは、沈黙が不安だったのか懇願するように言った。

「良いよ。時間はかかるけど。対価は要らないから」

「でも、それじゃあ、君の身体に傷がつくってジニーが言ってたよ」

「大丈夫、今は、万全の状態だから。それに、あの状態を元に戻す対価は大きすぎてネビルには払えないよ。その代わり、僕が傷ついた時に、君の身体の一部を頂戴ね」

「一部・・・」

「爪でも、髪の毛でも良いんだ。僕の身体を治すのに必要なんだ」

「そんなの、どうって事ないさ」

「じゃあ、すぐに、聖マングに向かうね」

「ありがとう」

「一緒に行く」

「良いの？」

「良いよ」

飛ばうとした瞬間、気配を感じ後ろを振り返ると、アレックスが睨むように立っていた。

その目も、口も、体中で言っていた。

・・・偽善者・・・

そう、言っていたのだ。

「ここだよ。父さん、母さん。久しぶり」

返事はなかった。

「今日は、僕の友達を連れてきたんだ」

「こんにちは」

やはり、返事はない。

「どう？できそう？」

ネビルは、震える声で聞いた。

「大丈夫だよ」

少年が、手をかざすと、足の下に、何かの文様のようなものが現れた。風をまとうように、服が浮き立ち、これから魔法という概念では考えられないような神々しい事が起こる事は予想できた。ネビルは、その光景に全身が震えた。

「ネビル、君も一緒に来る？」

少年は、突然口を開いた。

「どこへ？」

「お父さんと、お母さんの心の中に、君も来てくれるほうが早くすむと思うよ」

「わかった」

その瞬間、ネビルの視界は光に包まれた。

「ここはいい」

「お母さんとお父さんの心の中だよ」

「父さんたちはどこにいるの？」

「この先に」

二人が先に進むと、そこには、ブランコや滑り台等があった。

「ここは、公園？」

「そうみたいだね」

遠くにあるシーソーで二人の子どもが遊んでいた。

「あれは」

「誰だと思う」

「父さんと母さん？」

「きみがそう思うのならそうだよ」

ネビルが二人の子どもに声をかけようとすると、子ども達は駆け出してどこかへ行ってしまった。

「どうなってるの？」

「まだ、早いんだよ」

「何が？」

「先へ進めばわかるよ」

そうして、二人が先へ進むと今度は城に着いた。

「ここは、ホグワーツ？」

「そうかもね」

白い影が行きかう中にはっきりとした人間の形をした、少年少女がいた。

「あの、白い影は何？」

「僕らが知る必要のない人だよ」

「あの、人たちも僕の両親？」

はっきりとした少年少女を指差し言った。

「ネビルがそう思うのなら」

「父さん、母さん」

ネビルが声をかけると、今度は二人はこちらを向きにっこり笑うと、まだどこかに駆け出した。

「いつまで続くの？」

「必要なだけ」

二人はまた、歩き出した。次についたのは、家だった。

「ここは、僕の家？」

「そうなんじゃないかな」

ドアを開けて中に入るとそこには、なかむつまじくしている二人の大人がいた。

ネビルには、もう確かめる必要がなかった。

「父さん、母さん」

男は女性の方に手を回し、女はおなかを撫ぜ、笑みを浮かべてネビルを指差した。

すると、また、二人はどこかに消えた。

「またか」

「気長にいこうよ」

二人が進みだすと、今度は森に着いた。

黒い影が白い影を円をくんで包囲していた。

「あれは？」

「見せたくないんだろうね」

ネビルには、意味がわからなかったが、次の瞬間唐突に理解した。黒い影が白い影に光線を浴びせているのだ。声もなく激しく揺れ動く白い影に両親の苦しみを見た。

光線が放たれるたびに、白い影は大きく波打ち、ぐらぐらと揺れた。しだいに、白い影は動きを止め形すら成さなくなった。最後に一瞬強い光を放ち消えた。ネビルは涙した。その光に、自分への思いを強く感じたのだ。

「行こう」

ぽつりと呟いたネビルに敬意を込めるように言った。

「ネビルは本当に強いね」

二人が先に進むと、そこにはネビルの見慣れた部屋があった。

「ここは、聖マンガ？」

「そうかもね」

そこには、風に揺れるカーテンの向こうに二人がいた。

「父さん、母さん」

二人はにっこり微笑み、おいでと言いたげに腕を開いた。

ネビルは、走って行き二人の手の中へ飛び込んだ。ネビルは泣きじやくり、二人は優しく微笑んだ。

「ネビル、そのままだね」

ネビルには、そんな言葉など聞こえていなかった。

そういった、少年はゆっくり目を瞑り、手をスツと振ると元の現実の世界で目を開けた。

少年の目には先ほどと同じ慈愛に満ち溢れた笑みでネビルを包む優しい光景があった。

偽善（後書き）

妄想ですいません。

もうじき、ホグワーツ決戦に突入します。

魔力の暴走

アレックスは、目に見えておかしくなっていた。誰とも口を聞かず、ただ、射るような視線を人に向けていた。DAのメンバーには、それに無言呪文を放つという敵対振りがうかがえた。かといってスリザリンが声をかけても無視をしていたし、闇の陣営の誘いにもものろうとはしなかった。ただ、屋敷しもべの冷遇に関しては怒りを爆発させていた。特にドビーが死んだ事を揶揄されると、魔力の暴走が起こるようになった。その顕著なものに、中庭でネビルとドラコが言い争った時にドビーが死んだ事を言われ、ドラコはおろおろしながらあんなものと言ってしまったのだ。それを中庭のベンチで聞いていたアレックスがいきなり魔力を暴走させドラコに突っ込んだのだ。魔力の暴走で木々は枯れアレックスの周りでバチバチと火花が散っていた。心配したネビルがアレックスの方に手をかけた瞬間、弾かれるように吹っ飛ばされ壁に激突した。騒ぎを聞きつけ、スプラウトやマクゴナガルが駆けつけてきたが近づく事すらままならなかった。しかたない、そういつて二人は、呪文を放ったが教授二人の呪文がアレックスに届く前に消失してしまった。

そこに、スネイプとあの子どもが走ってきた。

「アレックス、アレックス！。なんだ、この暴走の仕方は、いったい何が起こってる」

「マクゴナガル教授、何があったのだ」

スネイプは、魔力の暴走の余波を防ぐように手で顔を覆いながら、マクゴナガルを見て言った。

「わかりません。私たちが来た時には、もうこのような状態で、魔法もまったく聞かないのです。ロングボトムもこの有様に」

見ると、ネビルの後頭部からおびただしい量の血が出ていた。

「傷つきし身体よ。無垢なる魂に祝福を」

ネビルの傷を治すと、アレックスに向き直った。アレックスはこちらを見ていた。

「治せるじゃないか・・・どうしてドビーは助けてくれなかった！
！！」

「やめなさい、クープ」

スプラウトが制止しようと走り出すのを止めいった。

「先生さがって」

その時、猛烈な魔力が爆発したのだ。結界を張り何とか防いだが立ってられないほどの力を使ってしまった。結界の中はアレックスの魔力が渦を巻いていた。

「マクゴナガル先生、スプラウト先生は生徒の非難を。セブルスはネビルをお願い。ドラコは後で投げるから、受け止めてね」

「さて、その状態であの中に飛び込むつもりか」

先ほどのネビルの傷を治した影響で、足腰がおぼつかなくなっている事を指摘されたのだ。

「今行かなきゃ中庭ごと吹っ飛ぶよ。アレックスもドラコも無事じゃすまない」

「ばか者が」

そう言つて、セブルスは手を離れた。結界の中に入った瞬間、体中に傷がついた。それを見て、結界の外から短い叫び声が聞こえた。傷がただけではおさまらず、アレックスの敵意がズブズブと体の中に進入してきた。

「アレックス！アレックス！！」

「こつちへ来るな！」

アレックスの声と共に助けてという小さなドラコの声がした。

「アレックス、そつちへ行くよ」

「来るな！！」

アレックスの敵意はいつそう強くなった。

「君が拒んでも僕は行くよ」

「うあああああああ」

その声と共にアレックスの魔力による強い一撃が体にあたった。

膝を突きながら何とかアレックスの魔力の中心まで来るとアレックスは猛つていた。自分の怒りをすべて吐き出すように魔力が体中から放たれていた。

まず、ドラコを掴み外に投げはなった。受け取ったぞというセブルスの声がした。

そして、アレックスの前に座り言った。

「アレックス。迎えに来たよ」

「どうして来た」

「さっき言ったでしょ。アレックスを迎えにきたんだよ」

「頼んでない」

「頼まれてないけど来たんだよ」

「あんたのそういうところがむかつくんだ」

「良いんだよ。それで」

「ドビーはどうして死んじゃったの」

「ごめんね」

「僕は許さない。ドビーを殺したこの世界の全てを許さない」

「それでも、アレックスはこんな事の為に力を使いたくないでしょう。こんな事続けたら学校ごと破壊しちゃうよ。そしたら、しもべ妖精も危険な目に合うんだよ」

「でも、止められないんだ。体の中から出て来るんだ。ドビーを殺したやつらを許せないんだ」

アレックスの敵意がどんどん膨らみ、結界でも押さえられなくなっていた。

「アレックス聞いて、僕の手を握って、後は僕に任せて、止めて見せるから」

途切れそうになる意識を必死で繋ぎ止め、アレックスの手を握った。

「怒りを全て僕に向けるんだ。そうして、僕と繋がった君の心を静めるからね」

「でも、僕の魔力の余波でそんなに、傷ができてるのに、真正面から受けたら死んじゃうよ」

「アレックス。ドビーを助けられなかったのは僕だよ。そんな、僕を傷つけられないなんて、この世界全てを許さないんじゃないのか。そんなんじゃないドビーの敵討ちなんて出来るはずない」

「名無しいiiiiiii」

「さんをつけろやデコすけが!!」

「お前なんか死んじゃええええええ」

ドンとアレックスの敵意が注ぎ込まれる中でアレックスの敵意を掻い潜り一気にアレックスの中に入った。

そこは、真っ白な空間で、何も存在していなかった。ただ一つをのぞいては。

「出てきなよ」

「気付いていたのか」

「あなたは・・・アレックスの先祖か」

「そうだ。クープ家、第一代目に当たる」

「どうして、こんな危険な力を残した」

「危険な力だと？」

「これは、アレックス一人の力じゃない。10人いや、それ以上の多くの力を感じる」

「ご明察の通り、これは、我がクープ家に伝わる家伝の魔法で、一族の最も血の濃い者に力を授ける事ができるのだ。つまり、先祖から、永遠と続く力の流れが世代をおうごとに足されていくという事だ」

「経験と魔力ということ？」

「ふむ、力という概念で受け継いでいるからな、受け継いだ者にしかわからぬ感覚だな」

「そんな、家系がどうして有名ではないの？」

「秘伝のものだからな、知られないようにしている。それに、目立つ事も避けるのだ」

「それにしても知られないのはおかしい。いや、この血の濃さは・・まさか」

「気付いたようだな。そう、我らは他家の血は入れぬ。一族のみで血縁を紡ぐのだ。そうでなければ、力を受け継ぐ事はできぬ」

「だから、婚姻しても秘密が漏れないのか。他家から娶っても実家に情報が渡らない。そんな、常識外のことを知らせれば、自分自身の恥になってしまうから言えないというところか」

「婚姻すれば、敗れぬ誓いも立てねばならぬからな。その覚悟のあるもののみが婚姻を許されるのだ」

「あなたは、どうしてそんなものを子孫に残したのですか」

「我が生きた時代は混迷していた。非魔法族の力はいちじるしく顕著になっていった。いずれ、やつらの力は我らの遠く及ばぬようになるだろう」

「理由になってないよ」

「私の両親は非魔法族だった。あの時代、魔法は禁忌だった。私の両親は山で隠して育ててくれた。慎ましくも楽しい日々だった。だが、ある日、子どもの泣き声が聞こえた。不思議に思っただけで、どうも、山で遊んでいて迷子になったらしい。怪我もしていたから治して家まで送ってやると、次の日、私の親を伴って村中の大人が山を登ってきた。感謝でもされるのかと思っておいたら、両親はごめんねというのだ。私は両親に売られたのだ。そして、私の目の前で両親は焼き殺された。その時の魔力の暴走で山は焼かれ、大人達は死んだ。大人たちのいなくなった集落で数少ない子ども達と外界と接触せずに暮らす事になった。それが我らクープ一族の始まりだ」

「ようするに、非魔法族から引きこもりたくて、もしもの時に自己防衛があるようにするためということ？」

「引きこもりではなく中立だ。何事にも干渉せん」

「アレックスの両親、干渉しまくってるよ」

「それは、時代の流れというものだろう。だが、我らの最後の子孫は干渉を守っておるようだ」

「それも、あなたが差し向けているの？」

「そうとも言えるし、そうでないとも言える」

「どづいつこと？」

「潜在概念に介入するようにしてあるが、逆らう事はできる。本当は、この力の継承は成人し、器として認められたときに行う事にしてある。だいたいは、渡すがわの死の直前だがな。しかし、なぜかこの子に限っては１１歳で受け継いでいる。力の半分ではあるがな。それが、幼き子の強く精神に干渉しているのだろっ」

「これで、力の半分なのか・・・すごい力だね」

「ふん。我等クープ家の力をもつてしても貴様には遠く及ばんがな」

「僕の場合、枠外系列だからね。それよりも、アレックスの暴走を」

止めてくれない？」

「もう、止まっておるはずだが」

「そ、そうか」

「お前が、この空間に入ってきた時点で一時、魔力が絶たれたのでな」

「そうだろうと思っていたぞ」

「さっきまでと口調が違うが」

「アレックスは、無事なんだね」

「この空間から出ればわかるだろう」

「もう、会うこともないだろうけど、アレックスをよろしくね」

「それはこちらの言うことだ。クープ家のものをよろしく頼むぞ」

少年のいなくなった空間で一言呟いた。

「会うこともないか・・・」

魔力の渦がおさまり、二人の眠る傍らでセブルススネイプは言った。

「どうやら、無事のような」

「ええ、そうですねセブルス」

「まったくこの子達と来たら、次から次へと問題を起こして」

「あら、ポモーナ。クープを天才だと言っていたのは誰だったかしら」

「それを言うならミネルバだって、教師生命始まって以来の逸材だと言っていたでしょう」

「そういえば、校長もスラッグホーン先生から渡された魔法薬学のレポートを見てずいぶん褒めていらっしやいましたね」

「我輩は、理論が完璧だと言っただけだ」

「それにしても、ずいぶん楽しそうに寝ているわね」

「ええ本当に」

「どうせ、食い物の夢でも見ているのだろう」

「あたっているかもしれませんね」

「こんな時代に生まれてこなければ、こうして楽しくいられたのでしょうね」

「ポモーナ・・・」

「子どもの癖に無理をするからだ」

「死食い人も子どもには優しいのですね」

「ふん」

そんな、教師陣の会話の外で二人は手をつなぎ幸せそうな顔で寝ていた。

魔力の暴走（後書き）

どうして脇役に主人公級の設定をつけてしまったんだ！！
ちよっと後悔しています。

両親二人から力を受け継いだバージョンもあつたんですけど・・・

別バージョンの文があつたので、訂正しました。

ホグワーツ防衛前半戦（前書き）

長いです。せつかくなので分割せずに掲載します。

P V 138 / 674 アクセス ユニーク 19 / 724 人
これ、覚えておいてください。

ホグワーツ防衛前半戦

「知らない天井だ」

「また、それですか」

「アレックス、ここはいつたいどこ？」

「見てわかるでしょう。医務室ですよ」

「僕は何日寝ていた？」

「僕が起きたのが一週間まえだから、あれから2、3週間経ってるんじゃないですか。どうでもいいですけど」

「まずいな。まさか、もう終わってるとかないだろうな」

「ホグワーツ決戦ですか？」

「そうだよ」

「そうですか」

「え・・・なんで知ってるの？」

「あなたの行動で何となくは気付いていました」

「でも、ホグワーツ決戦なんて事をどうして知っているの？決戦っていうからには、推測では言えないよね？」

「名無しさんは、能力だけで本当に頭が悪いですね」

「なんだよ、それ」

「名無しさんは、僕の心に入ったでしょう。一つ忘れていませんか？」

「だから、何を？」

「僕の心に入ったのに、僕がそこに居なかったんじゃないですか？」

「そういえば、そうだね」

「僕は、その時、名無しさんの中に居たんですよ」

「僕の中？」

「そうです。あなたいったい何者ですか？」

「僕が何者か？」

「名無しさんの記憶、あなた流に言うなら魂がずいぶん欠けていました。あなたの中にあなたの存在を知るものがなかった。唯一わかったのは、あなたがこの世界の人間ではないこと、この世界の本来あるべき道筋をあなたが知っていること、そしてあなたに兄がいたこと」

「僕の兄ちゃん」

「あなたの兄の記憶でさえとても欠けていました」

「僕には兄ちゃんが居た。それで」

「それで?」

「それで・・・どうだっけ」

「どうだっけて」

「わからない。思い出せないんだ」

「あなたの記憶、封印されていたというより欠けていましたからね。あなたの中にないんですね。それでも、ゆっくりと復活しているようです」

「大事な記憶だった気がするんだけど」

「そうですね」

「なんかアレックス雰囲気変わったね」

「それは、我が説明しようかの」

突然、そこにあった空間が歪み、人の形になった。

「初代様、かつてに出てくるのは控えて下さい」

「良いではないか、我は暇なのだ」

「こんな感じで、この一週間、ご先祖様が勝手に実体化するんですよ」

「実は、あの魔力の暴走から、こやつクープ家の力をコントロールするようになったの。昏睡中に、我に会いに来るほどになったのだ。クープ家が始まって以来の天才だ」

「でも、僕の中の力って本来のクープ家の力の半分でしょう？」

「それでも、コントロールできるやつなど、そうめったにおらん」

「それで、雰囲気が変わったのか」

「ご先祖様たちの思いみたいなものが突然分かるようになりましたからね。そうそう、初代様の初恋の相手って」

「こら、止めぬか」

「えー良いじゃないですか」

「頼むから止めておくれ」

「まったく、初代様は恥ずかしがり屋ですね」

「人の思いを知られるようにしておくのではなかったの」

「そうですよ。自分の両親の恋愛話とか知りたくなかったですよ」

「もういい、わかったから、アレックスの力が強まったという事だよね」

「まあそんな感じですね」

「うむ、そんな感じだ」

「血が濃いな」

「そうですね。初代様がひきこもりで鎖国したいからって変な家訓残すからですよ」

「ばか者、引きこもりではない。戦略的自衛だ」

「アレックス、まったく気にしてないのか？」

「気にしてますよ。落ち込んでますよ。だけど、僕、今を生きてるんですから、昨日でも明日でもない、今日を生きてるんです」

「強いアレックスは」

「カッコいいこといいましたけど、本当は鎖国ジジイのせいで、僕の人生振り回されてたまるかって思ってるんです」

「すまん」

「ずいぶん素直だね」

「悩んだ者は多くいたのだが、それでも子どもが真実を知ったことはなかったのだ。子どもの泣き顔は嫌いなのだ。あれだけ泣かれては、さすがの我もひどいことをしてしまったと思ったのだ」

「アレックス……」

「止めて下さい。今は、ドビーの復讐しか考えてないですから、それに、ここで戦いが始まるのなら復讐するやつがこぞってここに集まるんです。飛んで火に入る夏の虫です。その前にしもべ妖精たちの避難が最優先ですけどね」

「それにしても、記憶が漏れるとは想定外だったな」

「そのおかげで、ハリーポッターを放っておけば良いってわかりましたから良いんですけど、知らなかったらハリーポッター倒しに行っていましたから」

「それは、困るね」

「それにしても、ずいぶん静かですね」

「そうだね」

その時、扉が勢いよく開かれ、マダムポンプリーが驚愕の表情で何をしているのかと言った。

「なにがですか？」

「すぐに避難しなければ」

「まさか・・・」

「ホグワーツが攻められます」

「蛇の人にですか？」

「そうです」

「何か、凄い展開だね」

「いわゆる、キンクリってやつですね」

「そういう事いうんじゃない」

「キンクリついでに言っておきますけど、僕はやさしさの道クリアしましたからね」

「もう、どうなってんのさ」

アレックスは、クリアした証として黄色の玉を渡してきた。

「これ、他の人たちのも集めておいた方がいいですよ」

「わかった」

ふとアレックスはマダムポンプーリを見た。

「ところで、マダムポンプーリ、もしかして僕達忘れられていますか？」

「そ、そんな事はありません」

（忘れられてたんですね）

「では、僕はホグワーツの守りの準備をする」

「僕も避難しに行きます」

「急いで下さい」

二人は医務室を後にした。

アレックスと一緒に途中まで降りると、アレックスは厨房に向かった。

僕は、城の外に出ると、マクゴナガル先生とスプラウト先生が居た。

「気がついたのですか？」

二人は驚いて聞いてきた。

「うん。今から僕もホグワーツ防衛のために魔法をかけます」

あらかじめ、埋めておいた魔法の地雷を発動させる為に、地面に手を着き呪文を放った。

「どんな守りを？」

「死食い人が踏むとステューピファイが放たれるように仕掛けをしたんだよ」

「よく、意味はわかりませんが守りがどこされたのですね」

「そうです。じゃあ、僕は別の用があるので行くね」

「ポッターを頼みます」

「まかせて」

そう言つて、その場を後にした。途中ネビルを見つけて赤色の玉をもらつておいた。

ハリーを探していると、後ろから声をかけられた。

「やあ、ひさしぶりだね」

「あれ、リーマスさん」

「あれから会いにきてくれないから、忘れてしまわれたかと思ったよ」

「いろいろ、準備があつて忙しかったんだよ」

「心強いね、君が参戦してくれるなら、勝つたも同然だね」

そう言つた、リーマスは言葉とは裏腹に震える手を押さえるように

握っていた。

「怖いのか？震えているよ」

「ああ、少しね」

「大丈夫、勝ってみせるよ」

「本当に心強い」

「じゃあ、ハリーを探しに行くから」

戦々恐々とする中で、ハリーを見つけた。ハリーはこちらを見ると一目散に走ってきた。

「ロンとハーマイオニーをしらない？」

「ああ、二人とも大丈夫なはずだよ」

「どこにいるの？」

「今は、秘密の部屋じゃないかな」

「どうして、そんなところへ？」

「バジリスクの牙だよ」

「そうか！」

「ハリーは自分のすべき事をしなよ」

「君はどうするの？」

「僕もホグワーツを守るために動いているんだ」

「そう、じゃあ、僕は行くから」

ハリーが去ると、大広間に人が入っていくのを見かけて、中に入った。

中に入りルーナを探すと、すぐに見つけた。あきらかに、周りとはオーラが違うのだ。ルーナ、その声をかけると振り向き言った。

「なに？」

「知識の道をクリアした時の玉ある？」

「これだ」

青色に光る玉を出した。

「ありがとう」

静かにその場を後にしようとした時、とてつもない歓声が響いた。ハリーポッターが入ってきたのだった。そうしていると、あの声が響いた。

「お前達が戦いの準備をしているのは分かっている。ハリーポッターを渡せば誰も傷つけはしない」

その、恐ろしい声に反応して、スリザリンの女子が金切り声を上げた。

「ハリーポッターはあそこよ。誰か捕まえて」

その瞬間、グリフィンドールの生徒が立ち上がり、続いてレイブンクローとハッフルパフの生徒が立ち上がった。

マクゴナガル先生は、スリザリンを外に出し、続いて未成年の子どもや防衛線の参加者意外を追い立てた。

必要の部屋に着くとアレックスが居た。

「アレックス、避難しなさい」

「嫌です」

「ここは危険なのですよ」

「しもべ妖精たちが残るって言うてるんです。見捨てていきません」

「しかし」

「それに、僕を戦わせる為にこの力を僕に与えたんじゃないんですか？」

「何を言っているの。その力は、あなたが危険に巻き込まれたときに助けになるようにしてほしくて与えたのよ」

「そうだ。戦いの為に与えたわけではない」

「僕ずっと、パパとママが戦いの為に僕に修行をつけたんだと思ってました」

「そんなわけないでしょう」

「ここから、避難するんだ」

「あなたが、アレックスの両親？」

「あなたは？」

「この人ですよ、あの子どもですよ」

「ああ、この子が、君も早く避難しなさい」

「僕は大丈夫ですよ」

「何を言ってるのですか。子どもの出る幕ではありません」

「何を言っても無駄だ」

スツと空間が歪み男が現れた。

「初代様！」

「お前の息子はクープ家の力をものにしたのだ、我を実体化させる
ほどにな」

「そんなバカな」

「事実だ。それに、心配ならば我がこやつについておるので安心す
るのだ」

「しかし」

「こやつは、この部屋からださん。それで、良いであろう」

「それならば」

「初代様よろしくお願いします」

アレックスの両親は部屋を出て行った。

「アレックス、お願いがあるんだ」

「なんですか？」

「君は、僕の中に入ったときに誰が死ぬか見たはずだね。その人たちに、これを渡してほしいんだ」

そう言って、何も無いところから小さな札を取り出した。

「これは？」

「守りの術式が書いてあるんだ、これを持っていれば一度だけ呪文を無効化することができる」

「それくらいなら、良いですよ。対価はもらいますからね」

「わかったよ。後で好きなだけ付き合ってあげるよ。どうせ、ご飯でしょ？」

「はい！」

アレックス視点

アレックスは、部屋を出て、廊下を走った。

「愚かな、者たちよ。ハリーポッターをこちらに渡せ」

ホグワーツにいるもの達の頭の中に言葉が響いた。

「最後の通告だ」

その声は、恐怖と絶望に精鋭たちを陥らせるのには充分だった。アレックスが窓の外を見ると、トロールや巨人、オオカミ人間、ありとあらゆる闇を好む生き物、そして圧倒的な数の達死食い人たちがゆっくりと近づいてくる光景があった。それは、アレックスの知る本来の道筋よりもあきらかに数を増していたように思えた。

その近づいてくる様にジリジリと後退してしまったり、城のあちこちから恐怖の叫び声が上がった。

逃げよう、そんな声が聞こえた時、アレックスは校庭に出た。

校庭に出ると、人々はマクゴナガルを先等に立っていた。

闇の軍勢がゆっくりとこちらに向かってくる様は、人々に恐れを抱かせた。

一步、また一步と恐怖をあおるように近づいてくるのだ。それは、おそらく心理戦なのだろう。相手を圧迫する方法に長けている。じわりじわりと侵食されるような感覚を覚えた。

「あなた達の目に恐怖が見えます」

マクゴナガルは杖を振り、静かに全ての精鋭たちに語りかけた。

「人々は抗う勇気をなくす日が来るかもしれません。」

人々は闇に立ち向かう賢さをなくす日が来るかもしれません。

人々は闇を照らすやさしさをなくす日が来るかもしれません。

人々が闇に支配され、自由の灯が灯らない日が来るかもしれません。

しかし、それは今日ではありません。今日ではないのです。

あの闇に支配された俗物どもに我らの火が消えない事をしらしめるのです」

息を大きく吸い込み言い放った。

「ハリー・ポッターの為に」

その言葉を皮切りに大きな雄たけびが上がった。

そして、それと共にホグワーツでの戦いの火蓋は切られた。

闇の軍勢が一気にホグワーツの校庭になだれ込んできた。防衛隊も先陣を切ろうとしたがマクゴナガルは待ったをかけた。

次の瞬間、魔法が炸裂する膨大な音が響いた。走ってくる闇の軍勢がバタバタと倒れていくのだ。畏だと思い、別のところから侵入しようとした軍勢は、スプラウト先生の仕掛けた悪魔の罠や食虫植物

に捕まった。そしてスプラウト先生が杖を振ると、遠くの方でマンドレイクのけたたましい泣き声が聞こえた。これだけ、離れていなければ自分達も無事ではすまなかっただろう。

空から、来ようとした軍勢には突風が襲い簾を墜落させた。そして、風は地雷原や食虫植物のところに誘導するのだ。

その罠を突破した闇の軍勢もホグワーツに迫ろうとした時、マクゴナガルは杖を振った。すると、地面から銅像たちが出てきて、一気になぎ払った。そして、足を突かんで投げ返したりと闇の軍勢は侵入手段を経たれてしまった。

うしろにいた闇の軍勢の幹部達もお手上げ状態だった。

「地面を破壊しろ」

ヴォルデモートの命令が下ると、死食い人達は地面に向けて呪文を放った。膨大な量の呪文の数に、校庭は土煙が立ち、見えなくなってしまった。

ヴォルデモートは空を飛び風の結界を破壊しようとなにやら呟いていた。

アレックスは、その光景を見ると土煙の中に飛び出していた。

「クープ、待ちなさい」

そんな、マクゴナガルの声も聞かず、アレックスは土煙の中に消えた。

時間は少し戻りハリー視点

必要の部屋に入るとハリーたちは、さっそく分霊箱を探し始めた。

正直に言って、これだけのものが山済みになっている所から分霊箱が探せる事は無理ではないかと思えた。だが、ハリーには見つけれられるという確信があった。それは、彼がヴォルデモートとの心と繋がっているがゆえのものだった。自分を誰かが呼んでいるそんな感覚があったのだ。その、声に向けて突き進むと、やはりそこに自分を呼ぶものがあった。あれだ、そう確信したとき、ハリーの後ろで何かが動いた。

「プロテゴ」

何かの動きにとっさに反応して、防御呪文を唱えた。魔法の盾はパシオンといって誰かが放った呪文を防いだ。呪文を放ったのはマルフォイだった。

「ポッター、お前をあの方のところへ連れて行く」

杖を向けながら、ハリーに言ったマルフォイを赤い光線が襲った。ロンが山済みのガラクタの陰から呪文を放ったのだ。しかし、それはマルフォイの横にいたクラップにより防がれた。

お互いの呪文が交差する中で、ハーマイオーニはマルフォイ達の後

ろから急襲した

「ステューピファイ」

それを避け、怒り狂った、クラブが禁断の呪文を唱えた。

「この穢れた血が！アバダゲダブラ」

何とか回避したハーマイオニーだが、死の呪文がハーマイオニーに放たれたのを見たロンが怒りの突進を見せたのだ。

その間にハリーは、髪飾りを手にしようとガラクタを上り始めた。髪飾りを手にしようとした、その時、ガラクタと共に髪飾りが崩れ落ちた。

「逃げろ」

ハリーの焦りと共に聞こえてきたのはロンの声だった。

強大な炎がロンの後を追って燃え盛っていたのだ。ロンと共に走っていきハーマイオニーと合流した。ハリーは身近にあった箒を手にとると飛び上がった。マルフォイ達は火から逃れようと瓦礫の山の上に登っていた。その時、クラブが瓦礫を掴みそこね炎の中に落ちていこうとしていた。

ハリーは敵であったとしても長い月日をホグワーツで共にすごした同級生が死ぬという光景に眉をしかめた。突然、クラブの動きが止まった。絶望を目に宿していたクラブもあまりの事に思考回路が止まっていた。そんな、クラブの手をあの少年が掴んでいたのだ。

クラブを掴み、少年はハリーたちの箒にクラブを乗せた。マルフォイやゴイルもハリーたちの箒に乗った。

箒を発進させると、必要の部屋の入り口に急いで向かった。火は勢いを増し、グングンと追いかけてきた。背中に熱を感じる中で入り口まで後もう少しというところで、ハリーの箒は失速した。箒に火がついてしまったのだ。重量オーバーによる失速とあいまって、箒の限界を向かえたのだ。ハリーは走ったほうが速いと判断し、箒を降りた。

入り口が目の前にせまったとき、足が急激にふらついた。転ぶそう思ったとき、ハリーは突然背中を押された。勢いのまま扉を出て振り向くと、少年がにこりと笑っていた。少年の体の輪郭が猛烈な赤い色をした流動体に包まれそうになる瞬間、扉がぱたんと閉まった。言葉が出なかった、それは、その光景を見た、その場にいたためみんなも一緒だった。

「行こう」

そう言葉にしたのはハリー自身だった。ロンとハーマイオニーは黙って頷き去っていった。

その光景を影から見ていた誰かがいた。その手は何かを握っていた。影から見ていたものは杖を振り、その瞬間爆発が起こった。

時間は進みハリーへ

ハリーは絶望に包まれていた。何かがおかしいそう思っていた。ハッフルパフのカップやレイブンクローの髪飾りが、破壊された時、違和感をおぼえたのだ。その、違和感がなんだったのか、まるでわからない。むしろ、それが、破壊した事で起きたものだとに考えていた。

それが、こんな事態を招くとは思いつかなかった。あの分霊箱が全て偽者だった。

そして、最悪な事に、分霊箱のトムリドルが全て実体化していたのだ。つまり、3人のヴォルデモートが目の前にいたのだ。

自分は、全てをやったのけた。そして死を友として迎え入れる。それが、僕の最後の役目だった。蘇りの石で彼らに出会ったことで、死への恐怖も消えた。そういえば、その時、人影が見たけど、誰だったんだろう。僕を助けに来た人じゃないといいんだけど。

そんな自嘲の笑みもむなしく静かに思った。

自分は全てを見誤っていた。自分は何も成し遂げていない。全てが

絶望に染まる中、ハリーは、緑の閃光を見た。

ネビル視点

ハリーポッターは死んだ。

ネビルは、その恐ろしい声を聞くと、城を飛び出した。

ハリーの姿を探すと、ハグリットが誰かを抱えていた。あれは、いたい誰だろう。不思議とそう思った。

「あああああ！！！」

マクゴナガル先生が悲痛な叫びを上げたのだ。その、瞬間ネビルは理解した。あれは、ハリーなんだと。目の前が真っ白になった。ハリーを守る戦いで、ハリーは死んでしまった。何のために、戦えばいい。

その時、唐突にハリーの言葉が頭をよぎった。

あの蛇を殺して。

ハリーは確かにそう言っていた。ハリーの最後の言葉、それで何が

起こるかは分からない。でも、自分に残された最後のやるべき事は決まった。それには、やつに近づかなければならない。

やつは、僕の狙いに気付かず近づいてきた。

「貴様、名は？」

「ネビルロングボトム」

「ロングボトム家のものか。どうだ、こちらに来ないか」

「お前になんかに従わないぞ」

「両親に似て愚かだな。貴様も両親と同じようにしてやるぞ」

ヴォルデモートは、杖を振り振り分け帽子を呼び寄せ、ネビルの頭にかぶせた。そして、帽子ごと燃やしたのだ。

猛烈な熱さが体を焼き、ネビルは叫び声を上げながらも必死に意識を保とうとした。

その時、ネビルは懐かしい声を聞いた。それと共に、閃光が走りヴォルデモートとネビルを遠ざけた。

今だ！そう思い、足元に焼き捨てられた、古びた帽子から剣を引き抜き、ヴォルデモートの足元にいた蛇を切り裂いた。

「戦いはまだ終わっていない!!」

「よく言った! さすが我が子だ」

「私達も救援に駆けつけたわ」

そこには、ロングボトム夫妻がおり、その後ろには大勢の魔法使い達がいた。その様子からは、ヒーラーであったりヴォルデモートに恐れを抱いていた家の者たちだった。確たる歴史があり、ヴォルデモートの脅威をその身に味わってもなお立ち向かおうとする、ロングボトム家に人々は呼応したのだ。

「死にぞこないのロングボトムが。もう一回、同じ目めにあわせてやる」

ベラトリックスが喚いた。

「まあ、待て、ベラトリックス、この程度の軍勢など対した意味はないだろう。こちらの隠し玉も披露しようじゃないか」

そう言うと、ヴォルデモートの隣に二つの影が現れた。

「紹介しよう、我だ」

ハリーポッターは死に、3人のヴォルデモートまでが現れた。一人でも圧倒的な力を持つヴォルデモートが3人になった。対抗できる存在はダンブルドアだけだった。しかし、その彼ももういない。

その時、バシユツ、バシユツといういくつもの音が重なりロングボトム夫妻の後ろに大量の魔法使い達が現れた。

「ああ、来たか」

ヴォルデモートは言った。ヴォルデモートの援軍は異国の人や英国の人など色々混ざっているようだったが、その数は絶望的だった。

その、絶望的な光景に、その場にいた誰もが戦意を喪失してしまった。あのマクゴナガルでさえも、杖を降ろしていた。

「お前達の負けだ。無駄に血を流すな」

誰かが、ポツリと終わりだといった。そう、この絶望的な光景を見て戦意を起こせるものなどいるわけがない。先ほどまで先陣を切ろうとしていたネビル自身さえも、もはや戦うなどといった気力がなかったのだ。もしも、今、ディメンターが来たら、誰もがパトロナースを作り出すことができないだろう。

それを悟ったかのように、ディメンターがゆらゆらと近づいてきた。ディメンターの力が絶望に拍車をかけた。ディメンターたちは抗う者が誰もいないと分かると、大群で一氣にこちらに向かってきた。

まるで、闇のベールのように空間を覆いつくしながらこちらに迫ってくるのだ。何人かはパトロナースを出そうとしたが誰の杖からもパトロナースは出現しなかった。全ては終わったのだ。誰もがあきらめの色を見せ、逃げ出そうとするものもいなかった。その時、不可視の壁にぶつかるかのようにディメンターたちの動きが止まった。

「どこの誰が負けたって？」

大きな幼い声が響いた。声のした方を見ると、ホグワーツの城の上に少年が立っていた。少年の横には4つの影があった。

「よくも、我らの学び舎に攻め入ってくれた」

「おいたがすぎたようね」

「これは、いくら私でも許せないわね」

「ホグワーツに攻め入った罰は身をもってわからしてくれるわ」

5つの影は、風にロープをはためかせながら凜と立っていた。

ホグワーツ防衛前半戦（後書き）

防衛隊援軍、現お気に入り登録数。

闇援軍

総合ユニーク数

数考えるのめんどくさかったんでこんな感じをお願いします。

作者はマクゴナガル大好き！！マクゴナガルにどうしてもカッコいいセリフ言わしたかった。ちなみにセリフは映画指輪からネビル君も大好きです。

ちなみにスプラウト先生とフリットウィックのホグワーツの守りは妄想です。

映画のバリアもカッコいいですけど、ホグワーツ3教師の見せ場がほしかったので

ちなみに裏設定でジニー、ルーナ、ネビルは無双してます。もちろん最強は北斗のルーナです。

一文入れ忘れていたので改稿しました。

ホグワーツの守りの発動（前書き）

これ、別にハリーポッターの中の話とは関係ないので読まなくても物語り進行には関係ありません。

ハリーポッターのホグワーツ防衛線で熱くなりたい人は読まない方がいいです。

ホグワーツの守りの発動

時間は、必要の部屋が炎に包まれたところに戻り。

何もない真っ白な空間だった。

そこには、獅子、鷲、穴熊、蛇がいた。

「最後の試練だ」

獅子が言った。

「この試練は、もっとも過酷」

鷲が言った。

「そして、最も単純」

穴熊が言った。

「魂を見せてもらおう」

蛇が言った。

「魂？」

「だが、お前の魂は欠けている。それゆえに、我らの力で全てを紡いでもらおう」

そういつた瞬間、意識は遠のいた。

両親が死んだのは、いつだったか。いや、死んでないかもしれない。そんな事よりも、僕には兄さんがいればそれで幸せだった。寂しくない兄さんさえいれば、それで良い。そう見せていたのだ。叔父夫婦に引き取られた僕たち兄弟は、別にお話のように冷遇されるわけでもなかった。ありきたりに叔父夫婦には子どもがいなかったのだ。

兄さんとの毎日はとても楽しかった。お互いが寂しさを補い合うようにいつも一緒にいた。兄さんは、僕のめんどろを見ることで、寂しさを補い心を満たしていた。だから、兄さんは他の人を拒絶していた。友達を作る気がないようだった。僕も、兄さんを真似ていた。兄さんさえいればそれでよかったのだ。

「ずっと一緒だぜ」

「うん。ずっと一緒」

これが、僕ら兄弟の寝る前の決まり文句だった。叔父夫婦は身体がでかくなった事で別のベットを用意しようとしていたらしいが、必要ないと断った。兄さんと離れたくなかった。それは、僕が15歳になっても続いていた。

僕が15歳の時、兄に彼女ができた。もう、大学生なのだから当たり前の事だ。だけど、僕は許せなかった。僕は、兄さんに縛られて生きてきた。兄さんも僕に縛られて生きてきた。今更、それを覆そ

うだなんて、許されないと思った。その女が大きくなってまで兄弟で寝るのはおかしいといった。それを受け入れた兄さんも許せなかった。僕達の間に入ってくる何もかもが。

しばらくの間、僕は兄さんと口を聞かなかった。僕はソファで寝たし、家で会っても僕はすぐに兄さんから目を背けた。

ある日、兄さんが僕を買い物に誘った。悪気があったのか僕の機嫌をとるためだろう思った。それでも、兄さんが僕を気にかけてくれた事がとても嬉しかった。でも、買い物に行くと、兄さんは女性物の装飾品の店に入った。何をするのそう聞くと、兄さんは彼女のプレゼントをかうんだ、一人で入るのは恥ずかしいだと答えた。

許せなかった、僕は兄さんに気遣われていたのではなく、兄さんの彼女に買う装飾品の店に入るのに利用されたにすぎなかった。僕は、勢いよく店を飛び出した。涙でグシャグシャになった顔で走り続けた。

その時、大きなクラクションの音が聞こえた。ドンと体が宙を浮き、地面に落ちた。

痛みにつめきながら体を起こすと、最初は涙でよく見えなかったが誰かが赤い服を着て倒れていた。

兄さんだった。

赤い服、そう思ったのは血だった。血がべっとりと服を染め上げ、兄さんはピクリとも動かなかった。

「兄さん？」

反応はなかった。

周りがとても騒がしくなったが僕の耳には入らなかった。
気がつくとも僕は知らない家の前に居た。

「ここは、願いをかなえる店」

女はそういった。

「あなたには、願いがあるわね」

女は続けた。

「どんな願いかしら」

言っている意味がわからなかった、だけど、僕の口から出た言葉は違っていた。

「兄さんを助けて下さい」

「対価が必要よ」

対価ってなんだろうそう思いながらも口からは次々と言葉が出た。

「何でもします。だからお願い助けて」

「何でもなんて簡単に言わない方がいいわよ」

「何でもします」

「あなたの願い叶えましょう」

そう言つて、女は庭に出ると学生服を着た少年になにやら話し、大きな扉を出した。その間に、学生服の少年が大きなカバンを持ってきた。

女が手をスウつとあげると、風が吹き足元に不思議な造形をした大きな円ができた。

なにやら、言っているようだったが、よく聞こえなかった。しばらくすると、女はこちらを向き、終わったわと告げた。

「兄さんは無事ですか？」

「ええ、じきに目覚めるわ」

「ありがとうございます。早く兄さんに会いに行かなくちゃ」

「それは駄目よ」

「どうしてですか？」

「あなたは、何でもすると言ったわね」

「何をすればいいんですか」

「あなたの兄の命は、もともと助かっていたわ。ただし、意識は戻らなかったでしょう」

僕が黙っていると女は続けた。

「あなたの兄の魂を元に戻した。その対価は、あなたの魂に払ってもらっわ」

女は感情を感じさせない表情で静かに答えた。

目を開けると、影が4つ揺れていた。

「誰？」

「あら、私達を読んだのはあなたでしょう？」

「それにしても、これほど幼い者が我らを呼び出すとわな」

「ずいぶん強い力を持っていたようね」

「なかなか見所のある子どもだな」

4人はそれぞれ呟いた。4人の魔力は非常に強く、いったい誰だろうかと思い、もう一度聞いた。

「それで、あなたたちは誰？」

4人は、それぞれ見合わせると口を開いた。

「私は、ロウエナ・レイブンクロー」

「俺は、ゴドリック・グリフィンドール」

「私は、ヘルガ・ハツフルパフ」

「私は、サラザール・スリザリン」

予想外の出来事だったが、どうしてか冷静に聞き返した。

「ホグワーツの創設者？」

「そうだ」

グリフィンドールが答えた。

「そっか」

そっけない言葉に、グリフィンドールはムツとして答えた。

「呼んだのはお前だろ」

「ゴドリック、驚かなかったからといって子どもに腹を立てるとは見苦しいぞ」

「なんと、サラザール、久しぶりの現世だからって子どもに媚を売りたいのか？」

「貴様！」

二人の口げんかを尻目にレイブンクローが言った。

「ごめんなさいね。あの子達、いつもああだから」

「そう、ゴドリックは古の守りが創設者達でしたって言って驚かせたかったのよ」

続けてハツフルパフが言った。

「驚かなかったあなたを見て腹を立てちゃったのよ」

「空気読めなくてごめんなさい」

「良いの気にしないで」

「それで、あなた達がホグワーツを守ってくれるの？」

「そのために呼ばれたのよ」

「それにしても、すさまじい魔力だったわね。私達を一気に実体化させるなんて」

「どういうこと？」

「この部屋の使用法は、まず、ホグワーツの危機に対してホグワーツを守りたいと思うこと、これは、ホグワーツのしもべ妖精を守りたいという思いでなったわけだけど。」

そして次に、この部屋の扉を開く事、これには大きな魔力の消費を伴うわ。本来は何回にも分けて魔力を与える事で部屋の扉を開くわけだけど、あなたは、一度で開いてしまったわ。そして、それ以後、部屋が実体化している間は魔力を消費し続けるは、今回の場合、かなり熟練した魔術師で50人分くらいかしら。そのせいで、あなたの本来使えるあなたの体の容量での力の半分以上をこちらにもらってしまったわけだけど。

そして試練の道があるわけだけど、あれは単なる時間稼ぎと修行ね。一気に魔力を吸い取ったら死んでしまうような魔力の量を調節する為の期間を作るためのものね。

そして、最後が私達を実体化させるだけの力量を見るための強さの試練よ。この古の守りは禁じて手とも言える、私達の実体化を本当に必要な事なのか判断する事と実体化させるだけの力量があるのか見るためのものよ。

まさか、あなたのような事情で、こんなに幼い子にこれだけの魔力があるとは思わなかったけど、そのせいで、体に負荷をかけすぎて弱らせてしまったわ」

「弱っていたのが、これのせいだとは何となく分かってはいたけれど、今はそれ以上に弱まってるの？」

「そうよ。あなたの本来の力の1/10もないわ」

「そう」

「だから、あなたは無理をしないほうがいいわ。それでも普通の魔法使いよりも何倍も強いでしょうけど」

「ロウエナ、今のままじゃあいつには適わないわ」

「そうね、ではこれを飲みなさい」

そう言つてレイブンクローは、小さな小瓶を出した。

「これは？」

「少しは力を戻せるわ。でも、応急的なものよ」

「あまり、無理をしては駄目よ」

ハッフルパフはやさしく呟いた。

「それにしても、あの人たちは、まだ喧嘩を止めないのね。まったくあいつ等のせいで私は体を壊したというのに記憶になってもまだ争うなんて」

レイブンクローは、グリフィンドールとサラザールを見て言った。

「あなたたち、いつまでやってるの!!」

ハッフルパフの雷が落ちた。

「はい!!」

二人は直立不動で、こちらを向いた。

「あなた達ときたら、いつもいつも喧嘩ばかりして、あなたたちのせいで、今、グリフィンドールの生徒とスリザリンの生徒が争っているのよ。いったいどれだけ、後世にあなたたちの生き恥を晒せば気がすむと思っているの!最初の喧嘩はなんだったかしら!!」

「ヘルガのご飯の取り合いです」

「そんな事のせいで、今の事態になっているのよ」

「ごめん」

「すまぬ」

「まったく、たしか最後に起こした喧嘩はトイレの位置だったかしら?」

「だって、こいつが女子トイレに男子が入れないようにするって言うんだもん。男の夢を捨てろって言うの！」

「だから、私は秘密の部屋を造り、愚かな生徒を石にさせるようにしたのだ。トイレには鏡があるからな、直視はしないようにしていたのだ」

「だまらっしゃい！」

（ハッフルパフ怖っ）

「ヘルガ、そのくらいにしておきましょう。ホグワーツの戦いはもう始まっているようだから」

「そ、そうだ！急いで援軍に駆けつけなくては」

「う、うむ。ゴドリックの言うとおりだ、急がなくてはな」

「あなたたち、あとでOHANASIしましょうね」

ハッフルパフは黒い笑みを浮かべた。

「急ぐわよ」

レイブンクローはため息をつきながら言った。

そうして、5人は姿を消した。

ホグワーツ防衛線後編（前書き）

ちょっとふざけてます。アレックスと主人公はもう取り返しがつきません。

ホグワーツ防衛線後編

ネビル視点

「貴様達は誰だ!!」

怒りの瞳孔で彼等を睨んだヴォルデモートの問いに静かに答えた。

「我が名はゴドリック・グリフィンドール」

「ロウエナ・レイブンクロー」

「ヘルガ・ハッフルパフ」

「サラザール・スリザリン」

「山田太郎。もちろん偽名」

「貴様らが創設者だと!」

（あの子無視された・・・）

「あらあら、ずいぶんご立腹よ。ヘルガ、あの子お腹がすいてるんじゃないかしら」

「野菜をちゃんと食べないから、情緒不安定なのね」

ふふつと笑う彼女らにヴォルデモートはさらなる怒りを見せた。

「二人とも、からかうのはそのくらいにしておいてやりなよ」

「そろそろ、しつけの時間のようだな」

4人は合図を待つように少年を見た。

「人々の心から正義の火が消えるかもしれない。人々の心からやさしさが消えるかもしれない。人々の自由がなくなるかもしれない。それでも、今日じゃない。今日は、戦う日だ」

大きく呼吸を言った。

「ハリーの為に!!」

（すごいドヤ顔してる・・・）

しかし、少年の期待に反して群集から何の反応もない。様子をつかがうと誰もが、ポカンとしていた。どうしてだろうと思っていると、大きな声でアレックスが言った。

「それ、さっきマクゴナガル先生が言いました」

「え！この、セリフは僕が言いたかったのに！くっそー別世界では
占い師に取られた」

ネビルは意味のわからない発言にあっけにとられながらも、不思議
と気力がわいてきた。それは、防衛隊も一緒だった。くすくすとい
う笑い声や呆れたようなため息まで聞こえるのだ。

「ヴォルデモート！」

声を上げたネビルをヴォルデモートはじろりと睨んだ。

「地獄の釜の火が凍ったら仲間になってやるよ。ダンブルドア軍団
！」

その言葉と共に、ホグワーツの軍勢は雄たけびを上げた。

「あんたの負けだよ、パピー」

少年はニヤリと笑って、空に向けて術を放った。すると、あちらこ
ちらからふくろうが集まってきて、空を埋め尽くすほどになった。

「やつらを蹴散らすぞ、やつらにラーマヤーナの矢を食らわすがい
い。行けーヘドウィグ部隊」

白い美しい鳥がほーと鳴きながら飛び立つと、それをあいずにした
ように大量のふくろうたちが飛び立った。ふくろうたちは闇の軍勢
の上空に差し掛かるとホーと一声、赤い閃光を地面に放った。大量
の閃光は闇の軍勢に降り注ぎ、次々と倒れていった。

「人がゴミのようだヒヤッハー」

アレックスが乱舞していた。

その光景に、見とれていたネビルだったが、マクゴナガルの一声で我に返った。

「今が好機です。やつらを打ち倒すのです」

その言葉と共に、防衛隊は走り出した。

主人公視点

5つの影は一気に闇の軍勢の中に飛び込むと有象無象を一気に蹴散らした。

どんどんと、なだれ込んでくる敵の勢力に足止めをくらいながら一歩一歩と進んでいった。

「ここは、私達に任せなさい」

「そうよ、ここは女の出番よ」

ハッフルパフとレイブンクローが言った。

その場を二人に任せて、3人は突き進んだ。3人のヴォルデモートが見え、魔法を放ったとき、ヴォルデモートの後ろから出てきた小さな何かに呪文を防がれた。

「アレックス・・・」

「はは、名無しさん。まさか、こんな手で来るとは思いませんでした」

「二人は、あっちのヴォルデモートをお願い」

「まかせろ」

「うむ」

二人は、二手に分かれ、それぞれ2人のヴォルデモートの元へ向かった。

森から出てきたアクロマンチュラやケンタウロスたちに押されて人々が城に追いやられる中で二人は静かに目を合わせた。

「こんなものじゃ、僕達の戦いは邪魔できませんね」

「どうしてなのアレックス」

「忘れたんですか？僕はドビーを殺した全てに復讐するんですよ」

「それが、闇の軍勢につくのと何の関係がある」

「またー名無しさんはやっぱり馬鹿なんだから」

「・・・」

「僕は名無しさんの中を見たんですよ。それがどついう事か、まだ分からないんですか」

「なんだつて言うんだ」

「僕は物語の登場人物つていうことでしょう？」

黙つて聞く少年とヘラヘラと笑いながら話す対照的な少年が不協和音を奏でる中でアレックスは続けた。

「ショックだったな。僕は娯楽の為に生み出されたんですよ。ドビーも死ぬ運命にあつたんですよ。そのた大勢の人たちも。そしてヴォルデモートも。娯楽の為に殺されるなんてたまつたもんじゃないですよ。決められた未来、決められた死。」

主人公のハリーポッターはご都合主義よろしく、最後は生き返っちゃうんだもんな。ひどい差だな。よくこんなひどい話を作るよ。」
Kローリングという名の神様はさ。

そんな時、ひとつ面白いこと思いついたんです。物語を壊してしまえば良いんだってね。名無しさんの介入で大分狂ってしまってるみたいだけど、それでもこのままだと最後は主人公が勝っちゃうんですよ。主人公補正って怖いな。だからね、やっぱり、そんな結末壊しちゃえばいいんですよ」

「アレックス・・・」

「あっそうそう。どうして、ヴォルデモートが3人いるか知りたいですよ？それはですね。物語に行方を知った僕は、まずヴォルデモートにハッフルパフのカップを偽者と摩り替えろとメッセージを送ったんです。そして、時期が来たらホグワーツに来いって言ったんですよ。ハリーポッターがいなければレイブンクローの髪飾りのありかは分からないんでね。そして、あの混乱の最中まんまと摩り替えてヴォルデモートに渡したんですよ。ついでに実体化させておきましたよ」

「そんなことして闇側が勝てば、しもべ妖精たちがひどい目にあう社会になっちゃうじゃないか」

「それは、約束を取り付けましたよ。クープ家と屋敷しもべ妖精に手を出すなとね。もちろん、敗れぬ誓いを立ててもらいましたよ」

「そんな事で、あの人が破れぬ誓いをするとは思えないけど」

「もちろん、それだけじゃ立ててくれないでしょうね。そこで、もう一つ取引をしたんです」

「取引？」

「敗れぬ誓いを立てたら、ニワトコの杖の真の所有者を教えるってね」

「アレックス、お前！！」

「ははは、これで、全ては僕の手の中に落ちました。後は、あなたに邪魔をさせなければ終わりですよ」

「それを聞いたら、是が非でも君を倒して行かなくちゃいけないな」

「倒せますか？あなたごときに」

「その如きと試してみるか？この紫やろっ」

「さしずめ、あなたは裏切られても愛し続けるヘタレの少尉ですか」

「？」

そこからは、呪文の応酬が始まった。

ゴドリック・グリフィンドールは、ヴォルデモートと向かい合っていた。

「創設者が今さらなぜ現れる」

ヴォルデモートは、睨みつけながら言った。

「グリちゃんお前にグリグリするために来たんです」

ヘラヘラと笑いながら言うグリフィンドールにヴォルデモートは呪文を放った。グリフィンドールは事も無げに素手で呪文を防いだ。

「何だと！」

ヴォルデモートは驚きの声を上げた。

「良いよ、お前良いよ。期待通りの反応だ」

うんうんと、頭を振るグリフィンドールにヴォルデモートは続けざまに呪文を放ったが、またしても片手で防いでしまった。

「杖もなしに・・・創設者とはこれほど強いのか」

苦虫を噛み潰したようなヴォルデモートにグリフィンドールは答えた。

「どうやら、この時代には残っていないようだね。魔闘術わ」

「魔闘術だと」

「魔力で肉体を守れば、防具になり、魔力で攻撃すれば矛になる。こうやってね」

グリフィンドールは腕を一線振るった。ヴォルデモートは、危険を察知しとっさに身を伏せた。無様な格好になってしまったヴォルデモートだったが遠くから大木たちが倒れる音を聞いて戦慄した。

「なかなかの判断だね。この時代にしては優秀だ。でもちょっと遅かったね」

「何を・・・」

そういった瞬間、ヴォルデモート体は二つに割れた。

サラザール・スリザリンは、腕をタクトのように振るい、いくつもの閃光を巧みに操っていた。その中心にはヴォルデモートが閃光を避けようと右に左に避けていた。しかし、それはまるで避けているというよりは避けさせられているようだった。その光景はまるでダンスをしているようだったのだ。

「なかなか、良い踊りをするな」

ヴォルデモートはこんな屈辱初めてだった。怒りに任せて、呪文を放つが、巧みに操られている閃光に相殺されてしまう。

「お前は私の子孫らしいな」

「そうだ!!」

ヴォルデモートは、閃光を避けながら叫んだ。

「だからなんだという話だがな」

「俺様はあなたの構想を実現しようとしているだけだ」

「構想だと」

「マグル生まれは魔法使いではないのだろう」

「だ、黙れ！！」

そう言つて、空を掴むように、掌を握ると、ヴォルデモートのいた空間は光線の渦に飲まれ消滅した。

「おいおい、若気の至りを指摘されたからってキレるなよ」

そう言つたのは、グリフィンドールだった。

「どこから、聞いていた」

「ああ、好いた女をマグルにとられたから、キレてマグル消滅計画を実行しようとしていた時の発言が、この事件を起こしたと気付いて、子孫にやつあたりしたところからな」

「全部じゃないか」

主人公視点

アレックスの力は以上に強くなっており、結界を張るだけでは防げず、こちらでも攻撃呪文を使うしかなかった。

「くられ！」

攻撃に反応し、サッと身をかわしたアレックスが言った。

「あなた、弱くなりましたね。これも、古の守りを使った影響ですか」

「そこまで、見越していたのか」

「当たり前ですよ。あなたが一番厄介だったんですから。あの部屋で聞いたんですよ。守りを発動させれば力が弱くなると。」

「いくら弱くなっても、僕のやる事は変わらないよ」

そう言って、術を放つ素振りも見せず呪文を放った。

アレックスは、気配を察しはしたものの、避けるのが間に合わず呪文にあったた。

「そんな事もできるんですね」

しかし、アレックスに何の反応もなかった。術でダメージを受けたのはこちらだったのだ。

「ぐっ・・・どうということ」

胸を押さえながら、荒い息をしながら言った。

「さっき渡された、札はこういう効果があるんですね。予想はしていましたけど」

そう言って、懷を撫でるように叩いた。

「渡してなかったのか」

「当たり前ですよ。どうして、あなたの計画通りにしなきゃいけないんですか。それより、この戦いで助けるってどういう事が考えた事あるんですか？」

「どういう意味」

「名無しさんの記憶に会った人を助ける。つまり、リーマスルーピン、テッドトンクス、フレッドウィーズリー、コリンクリービー、ハリーポッター側の人間で人名が分かっているのは、これだけです。」

ただし、これ以外に50人以上が死ぬんですよ。誰が死んで誰を救うんですか？」

「それは・・・」

「あなたは、言った。僕の記憶の中で死ぬ人を救え。知らない人は死んでも良いってことですね」

「違う！」

「どう違うって言うんですか？」

「僕は、それでも、少しでも死んじやう人を助けたいんだ」

「勝手な事を言う。あんたのそのおごりがドビーを殺したんですよ」

「くっ。だけど、今は、今守れる人を助けるしかないんだ」

「どこぞの種の主役乗っ取りやろっみたいな事を言いますね」

「お前は世界に八つ当たりする仮面金髪やろっだな」

「自己満足で世界振り回してもらっては困るんですよ」

「それでも守りたい世界があるんだー！！！」

「いくら叫ぼうが今更！　これが定めさ！　知りながらも突き進んだ道だろう！？　正義と信じ、解らぬと逃げ、知らず、引かず！　その果ての終局だ！　もはや止める術などない！」

「人はそんなものじゃない」

「やってみれば、良いじゃないですか。それには、まず僕を倒さなくちゃいけませんね。あなたの体を傷つけながらね。そうすれば、僕を倒せても、助けに行くことができるんですかね」

アレックスが、無言呪文を仕掛け、それを避けながら、呪文を放った。アレックスは、それを、受けながらまた呪文を放った。

「いったい、どこを狙ってるんだ。それくらいの事で、負けるわけないだろう」

そんな言葉にも答えず、呪文をくらっては、呪文を返し地面は小さなクレーターが数多くできた。

「避けもせず、僕の自滅を狙っているのか。時間稼ぎでは、僕は倒せないぞ」

アレックスはにやりと笑った。

「僕が唯やられているとでも？ エクスパルソ！ デプリモ！！」

地面がぐらりとゆれ、大きく陥没した。アレックスは地面に傷をつけながら、地盤を緩くし、爆破呪文で全てのクレーターの脆さをつなぎ、デプリモで大きな落とし穴を作っていたのだ。それに、気付いた時には遅く、地面に飲み込まれた。

アレックスは杖を振り天に向かって水をまいた。大量の水は雨を降らすように降り注いだ。

そしてアレックスは、またも杖を振り、巨大な炎を出した。炎と水は大きな雷雲を呼んだ。

「天光満る処に我は在り、黄泉の門開く処に汝在り、出でよ神の雷インディグネーション！！」

そう言つて杖を振ると、強大な音と共に雷が落ちた。あたりは膨大な光で見えなくなっていた。

「ぐう」

「ああ、やっぱり防ぐんですね」

「こ、こんなものでやられるわけがないだろう」

アレックスの狙いに気づき、いち早く飛び出すと結界を金に変え、避雷針にしたのだ。

「ふふ、今のが狙いだとでも？」

黙っている少年にアレックスは続けた。

「先ほどの水は唯の水ではありません。海水です」

「海水？」

「さて、ここで問題です。海水を蒸発させ、雷雲を作り電気を通しました。さて、ここでできたのは、水素です。大量の水素に近づけてはいけないものはなんですか？。回答者は名無しさんを指名です」

「火・・・」

「大当たり」

アレックスが杖を振ると猛烈な爆発音と共に爆風が襲った。

少年は吹き飛ばされながら、何とか体制を整え結界に弾力をつけて張り、ダメージを軽減した。

「これだけ、よくも引つかかってくれましたね」

土煙が立つ向こうから、アレックスの声が聞こえた。声のした方向に呪文を放つと、突然、声が耳元で響いた。

「だから、能力バカなんですよ」

真横に、アレックスの気配がしたと思うや、一気に吹き飛ばされた。

「はは、僕のコピーに騙されるなんて」

アレックスの受け継いだ経験は明らかに勝っていた。

「だったら、これならどうだ」

前方が全て埋め尽くされる量の魔法を放った。どうやら、アレックスに当たったようで、ダメージが自分にかえってくるのがわかった。

「もう、終わりだよ。アレックス」

そう言って、アレックスの背後に飛んだ。

「なっ」

「忘れたの、僕は人の魔力があるところに飛べるんだよ」

アレックスは、驚愕の表情を見せた。アレックスの後ろから呪文を放とうとした。

「同じ手に引つかかるとはね」

アレックスの声が後ろから響いた。

「そんなわけないだろ」

呪文を放とうとした、アレックスの手を掴むと言った。

「僕が魔力を感知できるのを忘れたの」

「さっきまではブラフか」

「大当たり」

「だけど、あんたの術があるぞ」

「自分の術が破れないとも思ってるの。もう、終わりだよ」

「くそおおおお」

その言葉と共に、特大の呪文を放った。

ハリー視点

ハリーは、透明マントの中で震えていた。仲間達が死食い人を倒していく中でヴォルデモートの分霊箱が消えたのを感じた。外から聞こえた巨大な爆発音は気になるが、今はヴォルデモート唯一人となった事のが重要だった。そんな時、モリー・ウィーズリーがベラトリックスを打ち倒したのだ。怒り狂った、ヴォルデモートがモリーに杖を向けた時、ハリーは盾の呪文を使った。ハリーはついにマントを脱いだ。群集がどよめく中、ヴォルデモートがにやりと笑ったのを見た。

「何がおかしい」

「お前が生きているのは知っていた」

「そうか。だが、お前は僕に負ける」

「なぜだ？」

「お前が今までしたことをよく考えるんだ。そして、悔いる。お前に僕は倒せない」

「もしかしたら、俺様はお前に負けていたかもしれん。お前の想像したとおりならばな」

「なんだと？」

「お前は、この杖の所有者が自分だと考えているな？」

「知っていたのか・・・」

「俺様も気づかなかった。ドラコに所有権があり、お前はドラコに打ち勝っていたとわな」

「だからどうした、杖の所有者は僕である事に変わりはない」

「お前が倒れた時、お前の知らないことが起きた」

「何が起こったというんだ」

「俺様は、お前から杖を奪った」

ハリーはその衝撃的な事実に凍りついた。

「そ、そんなこと出来るはずない。僕が目覚めるまでにそんな時間はなかったはずだ」

「どうだったであろうな、教えてやれベラトリックス」

先ほどまで倒れていたベラトリックスがむくりと立ち上がった。

「ポッター、お前を騙す為に一芝居つったのさ。お前をここで、殺す為にな」

そう言いながら、胸から石を取り出した。モリーの放った呪文は、その石に当たったに過ぎなかったのだ。

ハリーは、何が起きているかもわからず、ヴォルデモートが自分に杖を向けたのを見て反射的に杖を構えた。

「まだ戦うきか」

「僕が負けても、ここにいる全員に打ち勝つつもりか」

「この杖があつて負けると思っているのか」

「全員でかかればお前だつて」

「全員でかかれれば同士討ちになるだけだ。お前は集団での戦いを知らないようだな。お前は万策尽きた。どうだ？俺様の配下になるか。もはや、予言など意味がなくなった」

ハリーはヴォルデモートを睨みつけた。

「僕がお前に屈すると思っているのか」

「その女を殺せ。そうしたら、助けてやらんでもないぞ」

ヴォルデモートは、モリーを指差した。指をさされたモリーは見る間に顔を青ざめた。

「仲間を裏切るくらいなら死を選ぶさ」

ハリーとヴォルデモートは同時に動いた。その時、いくつもの事が起こった。

突然ジエームズという叫び声と共に突然人がゆつと姿を表した。そして、今度は空間が歪み、えつという声と共に人影が現れた。

二つの影はもつれ合いながら、ハリーとヴォルデモートの呪文を受けた。

人影は少年とペティグリューだった。ハリーは先ほどジエームズと叫んだのがペティグリューだと理解した。横たわる体からは自分の杖が体に刺さり血がどくどくと流れていた。

「ジエ……ム……ズ……無事か……」

「ああ、無事だよ」

ハリーは力の限り叫んだ。

「そうか・・・良か・・・った・・・すまな・・・か」

そう呟くと、力なくうな垂れた。

「おろかな男だ」

そう言った、ヴォルデモートをハリーは睨みつけた。

「おろか？この行為が理解できないお前の方が愚かだ」

二人は再度呪文を打ち合い、二人の術が繋がった時、周りで優しい風が吹きぬけたように感じた。ハリーはそれが、死んでいった両親や仲間達だとどうしてか確信がもてた。

やれる、いや、やらなくてはいけない。ハリーは渾身の力を杖に込めた。ヴォルデモートの光線をハリーの術が押し返しヴォルデモートは驚愕の表情を残したまま倒れた。

荒い息のまま、勝ったと確信したとき、耳をつんざく悲鳴が響いた。ベラトリックスは怒りの表情でハリーに杖を向けた。その時、バーンと音がしてベラトリックスは吹き飛ばされた。

術を放った人を見るとそこにはセブルス・スネイプの姿があった。

声をかけようとしたが、その声を掻き消すように群集は勝利の声を上げた。

ホグワーツ防衛線後編（後書き）

マクゴナガル先生の中の人にはHOLIECの占い師です。

創設者世代の戦いが少ないと思われるかもしれませんが、苦戦しているところって想像できないんですね。レイブンクローとハッフルパフは裏ではネビルやルーナたちと一緒に戦っています。

ヘドウィグが今回の話で登場しました。実は、ヘドウィグ救っていただいたのに登場させるの忘れてたので、ふくろう部隊の話を書いておいて良かったです。

ホグワーツの宴

大団円の中でハリーはある人を探していた。だが、引く手あまたにハリーは声をかけられていた。そんなとき、ルーナが任せておけと男気をみせた。いったい、何があっただんだと思っていたハリーはルーナが突然飛び上がり机の上で演舞を始めた。

ハリーは、渾身の力で気にせずその場を後にした。

天文台に来たハリーはどうしてだか、彼がここにいる事に確証が持てた。

「スネイプ先生」

遠くを見ていたスネイプは、ハリーの声にビクリと体を揺らしながら、こちらをギギイと音がするかのようにこちらを振り向いた。

「リ・・・な、何かね？」

「僕、今まで先生ってひどい人だと思ってました。でも、違っただですね。先生、今まで守ってくれてありがとうございます。でも、もう僕達の為に生きるのは止めて下さい。もう、充分は罪を償った。先生も先生の幸せを掴んで下さい」

スネイプはハリーの顔をじつと見ながら黙っていた。そうして、ゆっくりと言った。

「我輩に指図するな」

ふんと言いながらスネイプはハリーに背を向けた。ハリーはどうしてかスネイプの背中に幸福を見た気がした。

ハリーが大広間の前に差し掛かると、そこにはルーピンの姿があった。

「リーマス！ トンクス！」

「やあ、ハリー大活躍だったね」

にこりと笑ってリーマスが答えた。その隣にはやさしい笑みを浮かべながら微笑むトンクスの姿があった。

「リーマスとトンクスが無事でよかったよ」

「私も危なかったんだよ。アラスターが加勢に来てくれないとやられていたかもしれない」

「本当に危なかったわ。私がリーマスに加勢した時には死食い人達に囲まれていたもの。あの後、アラスターが来なければ、きっと死んでいたわ」

あの混戦の中二人の身に何が起きたかは簡単に想像できた。しかし、ハリーにとって目の前に元気で立っている二人の姿がとても死地を乗り越えたようには見えなかった。ハリーは二人の邪魔をしてはいけないと思い、そうそうに立ち去った。

ハリーは、壊れた壁や燃えたタペストリー、壊れた絵から、無事な絵へ避難している絵画の中の人を見ながら、一人全てが終わった事を感慨深く感じていた。

階段を下りる一步一步に悲しみ幸福が入れ替わっているように感じた。ハリーはたくさん犠牲のうえに、とうとう成し遂げた、そんな思いがあったのだ。

大広間からはウィーズリー家の双子の騒ぐ声が聞こえてくる。

そんな、声を聞きながら、あの時の事を思い出して背中がゾクリとした。

必要の部屋から出た直後、学校は混戦に陥っていた。パーシーとフレッドがシッケネスを打ち倒した直後、強烈な爆発が起きたのだ。気がついたときには、何かがうつすらとして消えいく瞬間だった。あれは、盾の呪文だったとハリーは思った。あの爆発から全員を守

るほどの強力な盾の呪文をハリーは見た事がなかった。

誰が助けてくれたのかハリーには分からなかったが、目の端に小さな影が走り去るのを見た気がした。

「ハリー！」

ハーマイオニーとロンが走ってきた。

「どこに行ったのかと思ったよ。突然いなくなっちゃうんだから」

「ちょっとね」

3人は学校の外へ出て行った。

「いやー本当に久しぶりだね。シャバの空気は」

「ゴドリック、意味が違って聞こえるが」

「だってさ、久しぶりに生徒がいる学校だぜ。テンション上がるだろ」

「それは、理解できるが」

「ヘルガとヘレナなんて、もう生徒に囲まれてるぜ」

「こういう光景も懐かしい。あのころに戻ったようだ」

グリフィンドールはチラリとスリザリンを見て言った。

「マグル出身も結局は俺らの生徒だよな」

「こうして大混戦の中でも生き残ったのだ。認めざるをえないな」

「生き残った？って何分けの分からないことを言ってるのさ」

「ああ、そうだったな」

アレックスは、空を見上げながら、冷たくなった地面の上に寝そべっていた。

運命に逆らい、全てを終わらそうとした。それでも、物語の結末は変わらなかった。

自分は、本来ならば、きっと戦いに関わらずに避難していたのだろう。どうして、こうなってしまったのか分からない。今となってはどうでも良いとまで思ってしまう。

しかし、アレックスの心にはドビーの死の運命を、決められた未来を変えられるんだと思っていたかった。そういう意味ではヴォルデモートにも少なからず同情してしまうのだ。ハリーポッターの敵になる存在として作られた不運な人だ。

アレックスは、ローブから石を取り出し手の中で回転させた。

小さな屋敷しもべ妖精が現れた。

「ドビー・・・」

ドビーは目をぱちりとさせながら微笑んだ。

「ドビーめは嬉しいのでございます」

アレックスは呟くように言った。

「ごめんね」

「ドビーめの為に尽力を尽くして下さいました」

「でも、変えられなかった」

「変えなくて良いのでございます。ドビーめは自由な妖精。ドビーめは死に場所を自由に決めたのであります。敬愛するハリーポッターの手中で死を迎えたのであります」

「でも」

ドビーはゆっくりと首を振った。

「クープ様は、人生を決められたと誤解しているのでありましょう。しかし、それは違うのであります」

「え？」

「人生が決められていようといまいと、ドビーめは頑張ったのであります。その思いに誰かが創ったということは関係ないのであります」

「関係ない？」

「神がいようがいまいが、人は努力するものであります。クープ様とドビーめの出会いも誰かに創られた運命だったとしても、その時の嬉しさはその時を共有したもののだけのものであります」

アレックスは、涙を隠すように手で顔を覆い、寝転がった。自分は何て馬鹿だったんだ。そんなことにさえ気づかず、怒りに任せてぐずっていただけだったのだ。アレックスは、自嘲の笑みを浮かべた。

「どうして、こんなところで寝ているの？」

その声をかけてきたのはハリーポッターだった。

「うげっ。ハリーポッター」

露骨にいやな顔をするアレックスに、ハリーポッターは不思議そうな顔をしていた。

「うげって、傷つくな」

「君、もしかして死食い人じゃないよな」

後ろにいた、赤毛、もといロナルドウィーズリーが言った。

「まさか、まだこんなに小さいのよ」

巻き毛のハーマイオーニグレンジャーが赤毛を制した。

アレックスは、黙って立ち去ろうとすると、背中に向けてハリーポッターが声をかけた。

「君って、もしかして、あの爆発の時に盾の呪文使った？」

「何の事ですか？」

「君くらい小さい子が盾の呪文を使っただけだっただけからさ、この戦いに参加してる小さい子って君しかないからね」

「頭が切れるんですね。そういう人嫌いです」

アレックスはそういつて立ち去ろうとすると、後ろからありがとうと声をかけられた。なんだか恥ずかしくなり、空を見上げると天文台にスネイプ校長がいた。校長はいつもとは違いにこりとこちらを見ていた。スネイプ校長はアレックスと目が合うと恥ずかしそうに目をそらした。とうとうハリーポッターがダークサイドに落ちようとしているのか。

中二乙。

アレックスは勘違いをしたままその場を後にした。

ネビルは、生まれてはじめて、この祝いの時を両親と共にすごしていた。いや、実際には、ネビルは誕生日や祝い事のさいには両親とすごした。

しかし、それは意思の疎通ができない両親とだ。そう、誰もが望んだ闇の終焉の日、この嬉しいひと時を共有する相手が両親である事をネビルは感謝していた。ネビルはポツリと呟いた。

「僕、今日の日を父さんと母さんとすごせてとても嬉しい」

ロングボトム夫妻は、ネビルの素朴な言葉の裏に隠された、自分達の知らない時をすごし、どれだけ寂しい思いをさせてしまっていたかに深く思いを馳せた。それを感じさせないようにたったそれだけの言葉に思いを込めて言った言葉はロングボトム夫妻の体に熱いものが込み上げさせるには充分だった。その思いを発するようにロングボトム夫妻はネビルノ体を強く抱きしめた。

傍らに立つネビルの祖母であるオーガスタ・ロングボトムはその光景に涙すると共に、私も仲間に入れてと心のどこかで思っていた。

マクゴナガルは、仮の遺体安置室に来ていた。

ここに眠る、数々の共に戦った英雄達を一人、また一人と確認をしていた。ハリー・ポッターを守るために戦い、そして戦死したつわもの達に畏敬の念をこめると、静かにため息を漏らした。

この、戦いで多くのものを失い、大きなものを勝ち取る事ができた。それは、事実なのだ。しかし、マクゴナガルの胸にはアレックス・クープが言った、狂っているという言葉が胸に残っていたのだ。

こうするしかなかった、こうしなければいけなかった。そう、割り切る事は容易かった。それでも、割り切って良いのだろうかと思ひ深く思い悩んでいたのだ。もしも、私がここで、割り切ったのだとしたら、自分はクープの言うとおり本当に狂ってしまうように思えたのだ。

マクゴナガルは、このものたちの死を割り切らず一生背負っている。そしてハリー・ポッターに背負わせてしまった重荷を一生かけて理解しよう、そう心に誓ったのだった。

教師生命が始まって以来、これほどの重荷を背負った事はなかった。自分は、どこかで楽観視している感情があった。ダンブルドアを信

じていれば大丈夫だろうと心の底で思っていた。

しかし、事あるごとに危機に飛び込んでいく生徒に、今まで悶々と抱えてきた感情を、クープに言葉にして言われ、はじめて自問自答した。ダンブルドアがいなくなりどこにも逃げ場のなくなった感情をどうすれば良いのか、どう行動すれば良いのか、分からなかった。マクゴナガルは、それでも、ダンブルドアが信じたようにハリー・ポッターを信じてさえいればと思っていたのだ。

しかし、絶望は訪れた。ハリー・ポッターがハグリットの腕の中でうな垂れている光景を目にした時、衝撃が駆け抜けた。やってしまった、自分は何んでもない間違いを犯した。私はあの時、何と言った？

探し物があるのなら早く探せ、そう言った。それが、なんであるか聞かなかった。もしも、それがとても危険なことではないのか。ダンブルドアの依頼で探している。彼はそう言っていた。私は、またも自分の生徒を危機に送り出してしまった。

私が、彼を、ハリー・ポッターを殺したのだ。その事を理解した時、我を忘れて叫んでいた。

マクゴナガルは、その恐怖を思い出しながらまるでデイメンターでも現れたかのように体が震えた。

震える手をいさめながら横たわるコリン・クリービーの頭を撫ぜた。

撫ぜながら、ふと気がついた。クリービーの顔に赤みがさしているではないか。

体を触ってみると微かに熱を感じる。

まさかと思い、杖を振った。しかし、何の反応もなかった。

「その程度では無理だぞ」

マクゴナガルが後ろを振り向くと、そこには創設者達2人の姿があった。声を発したのはスリザリンだった。

「どういうことでしょうか？」

「そのものたちは、生きているという事だ。ただし、仮死状態だから、普通の魔法では蘇生はできない」

「い、生きているのですか？」

マクゴナガルは驚いて聞き返した。

「まあね、ホグワーツの守り、つまり俺らの力を呼び起こそうとした時点でホグワーツ城内で人は死なないよ」

グリフィンドールが答えた。

「どうすれば目覚めるのですか？」

「知るか！」

グリフィンドールは即座に返答を返した。マクゴナガルは、その答えを聞くと、まるで返答がなかったかのように、別の答えを待った。

「あー、サラザール、どうだっけ？」

聞かれたスリザリンは驚いた。

「どうして、そこで私の名前が出るのだ。どうと、言っても、目覚めさせる方法は考えてなかっただろう」

「そうか。たしか、目覚めさせる方法を開発するまえに俺ら喧嘩別れしたんだっとな」

「やめろ、黒歴史を思い出させるな」

マクゴナガルは、目の前で行われている会話に割って入った。

「それで、目覚めさせる方法はないのですか？」

スリザリンとグリフィンドールは考え込んだ。

「あいつなら、できるんじゃないか？」

「ああ、あいつか」

「あいつって誰だ？」

「誰だっけ」

二人が困惑したような顔をしていると、扉が開いた。

「あれ、マクゴナガル先生と怪しい2人は何してるんですか？まさか逢引」

その発言に、マクゴナガルは頭を抱えた。こんな発言をするのは一人しかいない。ここまできても、まだ意味のわからない発言に付き合うのかと、教師を辞めようかとまで思ってしまった。

グリフィンドールとスリザリンはあまりの発言にフリーズしていたが何とか気を取り直した。

「子どもが、そのような卑猥な言葉を使うでない」

「そ、そうだよ。エロ餓鬼とかそんなレベルじゃないぞ」

マクゴナガルは二人の発言にはたと気がつき訂正した。

「昔とは意味が違います。今はデートという意味で使われています」

二人は顔を見合わせ、ホッと一息すると言った。

「焦った」

「まったくだ」

マクゴナガルはアレックスが不思議そうな顔をしていたが、この話題はこれで終わりとばかりに言葉を発した。

「クープ、どうしたのですか？」

アレックスは、またも不思議そうな顔をした。

「何か、ここに来ないといけない気がしたんです」

アレックスを見ていたスリザリンが不思議そうな顔をしながら言った。

「君は、いったい何をもっているのだ？」

「何をとはどういう意味ですか？」

「君の袖から異質な魔力を感じるが」

アレックスは、ああと一声、ローブから石を取り出した。

「拾いました」

啞然とするスリザリンの後ろからつかつかと歩いてきたグリフィン・ドールは言った。

「拾いましたじゃねえだろ。こんなものどこでどう拾うんだよ」

そう言っ、アレックスの頭を殴りつけた。

アレックスは、殴られた場所をさすりながら文句を言っていた。

その光景を見ながらマクゴナガルはグリフィンドールに向けて口を開いた。

「それは、いったい何ですか？」

グリフィンドールは振り向きながら答えた。

「蘇りの石。この世に一つしかない強力な魔力が込められた石だ」

「危険なもののですか？」

マクゴナガルは青ざめた。

「危険っていえば危険だけど。まあ使い方によるな」

「ゴドリック、それを使えばどうにかなるんじゃないのか？」

現実世界に戻ってきたスリザリンが声をかけたのだ。

「ああ、たしかに。この石の力を使えば、どうにかなるか」

マクゴナガルが口を開こうとした時、グリフィンドールは手で制した。

グリフィンドールが手を広げそこに石を置くとフワリと浮き上がった。その顔は真剣そのものでかなりの技術を使っていると思われた。

「やれ、サラザール」

スリザリンが石に手をかざすと、石は発光し始め、そこから、いくつもの光の線があふれた。光の線は部屋の中を縦横無尽に駆け抜け、この部屋に横たわるいくつもの体に入っていた。光は、そうして、体の中に入ると、また出てきて、蘇りの石の中に戻った。

「うーん、やっぱこうなるのね」

「当然の結果だな」

グリフィンドールとスリザリンは顔を見合わせ頷いた。

「あれ？これってもしかして」

アレックスはグリフィンドール達の顔を見上げた。

「気づいたか。なかなか見所があるやつだな」

マクゴナガルは分けも分からず、どうなっているのか聞こうとしたが、目の端で何かが動くのを見た。

コリン・クリービーが起き上がったのだ。

「クリービー！」

「……は……？」

クリービーはマクゴナガルに抱き疲れ何がなんだか分からない様子だった。

そんな、歓喜の時を世界は待たなかった。ところどころで、起き上がる人々の中で眼光鋭く叫び声をあげたものがいたのだ。

その声に驚きマクゴナガルは杖を構えた。ヴォルデモートが復活したのだ。

「ヴォルデモートさん」

ヴォルデモートを身ながら笑い転げるアレックスに哀れみの視線を送ったマクゴナガルだったが、ヴォルデモートはなおも叫び続けた。

「なぜ、魔法が使えんのだ！」

ヴォルデモートが復活してはじめて発した言葉にマクゴナガルは驚いた。

「ヴォルデモートさん、マグル昇格おめでとつございまーす」

「いったいどうなってるのですか」

マクゴナガルも喚いていた。

「死なないのは、俺らがかけた魔法なんだけどさ。目覚めさせる時に、蘇りの石で魂を揺り起こした。魔法使いつてのは魔力と魂が一緒になってるもんだからさ。簡単に介入できないんだ。だけど、それを無理やり力で捻じ込んだから魂は起こせたけど、魔力を魂を分離させて、この石に吸い取られちゃったってところかな」

「かなって」

マクゴナガルは呆れた表情でグリフィンドールを見た。

「悪い、正直わかんねー」

マクゴナガルは盛大なため息をついた。

「ヴォルデモートさん。仕事先紹介しますよ」

けらけらと笑うアレックスの声と絶叫し続けるヴォルデモートの声だけがその場に響いていた。

ホグワーツの宴（後書き）

いちようハリーポッターの物語自体はここで終了です。大団円な話でした。

疑問があればどうぞ。謎解きみたいなことをしたほうが良いですか？それと補足ですが、ホグワーツの守りは物理攻撃による即死は無効にできません。

後は、ハリーポッターとは関係ない主人公の話なので、興味ない人はここで終わって下さい。

興味ある人に言っておきますが、これ以上先の話はハッピーエンドで終わりません。

この話で終わる方もいると思うので、いちようあとがき。

この話を書き始めた当時、この小説のホグワーツの戦いで出てくるキャラクターの一人を主人公として書いている大人気作品があったので、休載しました。あんな面白い作品があるのに、ちょこつと使いたいだけなのに出すとか恥ずかしすぎるっていうのが理由です。こんな話みるわけないのに、

自意識過剰でした。

それに、ハリーポッターの映画が完結したのとは時期をずらしたかったっていうのもあります。なんか恥ずかしかったからです。

人気あるときに書くと、こんな駄文は叩かれると逃げたんです。

次回のあとがきでは、どうして主人公の時だけ会話文ばかりなのか明かします。こればかりは説明しないとダメですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4196q/>

ハリーポッターに怒りの転生

2012年1月7日03時50分発行